

幻想郷に店を構えてま す【完結】

鷹崎亜魅夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人里の隅にのんびりと構えている店がある。男がいろいろな商品を作ったり、訳あり幼女が居候してお店を手伝ったり。それなりに繁盛をしているのだが……たかりに来る「腐れ縁の常連」もいたり。面倒事に巻き込まれたり。ただ、名も無き店の店主は思いう。

——頼むからちゃんと金を払ってくれ。

目次

名前の無い店の日常

- 一話 『日常』① ————— 1
- 二話 『氷の妖精、見かけない客人』
11
- 三話 『烏天狗からの見た店』 — 21
- 四話 『香霖堂、競争』 — 35
- 五話 『名前の無い店の看板娘』
48
- 紅霧異変
- 六話 『紅い霧』 ————— 57
- 七話 『道中での妖怪少女』 — 65
- 八話 『霧の湖の妖精達』 — 74

九話 『紅い館の門番』 —————

83

十話 『図書館の魔女』 —————

98

十一話 『紅魔のメイド、その主』

111

十二話 『それぞれの戦い』 —————

122

十三話 『異変はまだ終わらない』

133

十四話 『吸血鬼の妹』 —————

149

十五話 『抱く想い、終わりゆく異変』

167

十六話 『異変の後処理』 —————

193

紅霧異変・後日談

十七話 『事情の説明、その準備』

	204
十八話『謎が深まる少女』①	211
十九話『謎が深まる少女』②	222
二十話『現れていた謎の女性』	241
二十一話『異変解決の宴会』	253
最終話『日常』②	271
クロス『パラレル・イマジンワールド』	296

名前の無い店の日常

一話 『日常』①

お前は覚えているだろうか？ 物心がついたときかもしれない。そんな時に交わした約束。

冗談だと思っているかもしれない。でも、俺はずっとそれを守るつもりでいる。

もちろん、その話を持ち出されたら困るかもしれないだろう。むしろ絶対困る。だからこそ……お互いの了承でこの「約束」が果たせる。まあ、お前にそんな意思がなかったら諦めるしかないが。

俺の心が動かされない限り、お前の心が動かされない限り——この「約束」は何処まで続くのだろうか？

「——ありがとうございますましたー」

『またお願いするわねー』

頼まれた製品を作り上げて、その依頼主への家に運ぶ。運用サービシ的なものだ。俺の構えている店……とりあえず、よろず万な物を売っている店だ。それとしか言いようがない（むしろ店の名前を決めていない）。

俺の店にはいろいろな物を作っては売っている。少し離れたところで畑で作物を作っては売り、衣類、何かしらに役立つ道具を作ってそれを売り、何かの材料まで調達して売る。何か適当に料理を作って売っている商品もある。今回のお客の場合は「夫の寝間着」だった。

……何で俺、いろんな物に手を出しているんだろ？

人里では一般的な和服を着ている。まあ、作務衣というものだ。それと女々しいかもしれないが、紐で長い髪の毛を後方に縛っているが……荷物を届き終えて、しつかりと

作務衣を着直して、目元に掛けていた眼鏡を脳天近くに上げた後、人里の隅にある店に帰還。

玄関を開けてとりあえず——挨拶という事で、居候している奴の名前を呼んで帰還を伝える。

「結梨華^{ゆりか}—— 帰ってきたぞー?」

『ああー!? 主人様が帰ってきたー!?』

幼い少女の声が聞こえ、しばらく待っている——すこしだぼだぼの白い「ぱーかー」(何か首後ろに頭を覆い被せる物がある)を着て、赤と黒の「ちえつく」という模様のスカート。頭には俺が適当に与えた花結びの簪を着けている幼女——結梨華が迎えに来た。実は名前はなかったが……俺が呼びやすいように名前を付けた。

……いや、むしろ本来はなくて正解なのかもしれないが。しかし本人は気に入っている。

その結梨華は俺が帰ってきたを確認すると、ある事を伝える。

「主人様—— また博麗の巫女と魔法使いがたかりに来ています!」

「……またか」

「はい。またです」

結梨華先導の元、おそらくいるであろう居間に足を運ぶ。そして襖を開けると——

『あら。帰ってきたのね。食べに来たわ』

『よっ。霊夢と同じく食いに来たぜ』

「だつたらせめて金で払え。第一ここはそういう商品も扱っているが、食事処じゃないんだぞ？」 そちら辺理解できているのか？」

「えっ？」

「……できるなら過去のお前らに殴りに掛かりたい……！」

昔から腐れ縁である、脇を出した紅白の変わった巫女服を着た博麗の巫女の——博麗霊夢。そして白黒の服に前掛けにエプロンのような物、魔法使いの帽子みたいな物を被っている同じく腐れ縁の人間の魔法使い——霧雨魔理沙。こいつらは本当に結構な確率で居座ってる。

そして俺の状態に察したのか——懐からある物をそれぞれ取り出して机に出す二人。

「じゃあはい。博麗印の御札」

「私はこれな。特性のポーシヨン！」

「お前らしい加減にしろ!? 何で金じゃなくそれぞれ物々交換でそれらを出しているんだよ!」

「え? だって『金がなかったらせめて別な物をよこせ』って言ったのはあんたじゃない」

「そうだけ? だから私達の共通の通貨としてこれを」

「……追加で過去の俺もぶん殴りたい……!」

……として「まあ良いか」という気持ちでこいつらの物を承諾してしまったんだらうか……!

結局流して受けとってしまい、店頭に並べる。一応売り物にしている俺も言えた義理ではないが。霊夢の札は人里を少し出る人物には重宝されるし、魔理沙のは栄養が豊富な飲み物として売っている。魔理沙の奴の売りはムラがあるが。

……魔理沙はともかく、霊夢は仕方ないと思っている。博麗神社までの道中は危険だしな。そこにあるはずの札が俺の店で買えるというのはメリツトが大きい。

そして二人は——俺の名前を呼びながら夕飯の催促をしてくる。

「ほら、ちゃんと払ったんだからご飯食べさせなさいよ——封結^{ふけつ}」

「そうだけ封結。私達はそのために来たんだからな!」

「あ……マジで締め出したい……!」

仕方なく、台所に移動する俺。俺の行動に結梨華もついてきて尋ねてきた。

「良いんですか主人様？　いつもの通りになってしまえますが……」

「どうせ元々二人分の夕食なんだ。倍になったところで懐は寂しくならん」

「結構主人様はちゃんと稼ぎますからねー。それでなんと云っても……何だかんだ主人様は優しいですよね♪」

「お前明日の試作品の間食抜きな」

「ええー!?　そりやないですよー!?」

「冗談だ。そしてもう少しお前は発言を自重しろ」

「ええー……主人様を褒めているのに……」

……結梨華は霊夢達と比べて過ごすのは短いが、彼女はそれなりにコミュニケーションンはとうとうとしている。こいつが居候し始めたときは、店に勝手に上がっていた霊夢に退治されかけたからな……泥棒扱いとして。まあ、ちゃんと誤解は解けたが。

……何時まで結梨華を預かっていけば良いんだろうな……?」

頭の片隅にそんなことを考えつつも、俺は結梨華に行動を促す。

「俺は野菜を洗って切っているから米をといでくれ。良いな?」

「分かりました主人様！　結梨華頑張っちゃいますよー!」

「ああ。頑張ってくれ」

一先ず俺達は作業を開始した……。

「——つていうかアレよね。封結は何で配達作業まで仕事に加えているのよ?」

俺、結梨華、霊夢に魔理沙と机を囲んで食べている最中に、霊夢が配達について尋ねてきた。

「それか? せっかく基本的に留守番は結梨華にしてもらっているワケだし、二人が店にいてもアレだからな。どっちかはそういう仕事を組み込んでみた。おかげで懐は上々だ」

「結梨華ちゃんとお勘定ができますからねっ!」

「……うん、まあ……結梨華の素性上、出来なければおかしいからな?」

「ガーンツ!? 出来て当たり前!?!」

魔理沙のツツコミに軽くシヨックを受けている結梨華。ここのメンツは結梨華の素性を知っているからな……。

シヨックを受けている結梨華は放っておく事にして、霊夢に違う話題を振ってみる。

「……最近、異変が起きていないようだが……平和なのか?」

「ないわねー。まあ、その分お茶を飲んで過ごしたり、ここにたかりに来ているわ」

「……何で霊夢さんはこんなだらけているのに巫女をやっているんでしょうかね……？」

何時の間にかシヨックから立ち直って会話に参加している結梨華。異変と聞いて分らないが……魔理沙がとある話題を出してきた。

「そーいや知ってるか？ 最近、霧の湖の近くで赤い洋館が出現したんだと」

「……赤い洋館？ 洋館は文献の情報が正しければ、異様に広い、西洋の建物だと聞いたことがあるが……」

「私にそういう事を言われても知らないぜ。一度外見だけ見たが……目に悪そうな色をしてた」

「だろうな。何故赤くしたのか疑問だ」

「……赤い洋館、ねえ……」

俺と魔理沙の会話に、何か気がかりがあるそうな声で霊夢は呟いていたが……まさか勘で何か思っただろうか？

……こいつの勘はもの凄くあたる。だがら前もって言っておく。

「その赤い洋館で異変が起きても俺は連れて行くなよ？」

「え？ ダメ？」

「……何故そう曇りなき瞳で聞けるんだ……？　どれだけ過去の異変に連れ回されてい
るんだよ俺？　魔理沙も同様だからな」

「話が急展開すぎるが……要するに、その赤い洋館に住んでいるであろう住民が異変を
起こすと霊夢は勘で思っているんだな？」

「うわあ……結梨華、三人の会話についていけないのでちよつとジエラシーです」

俺達三人はどんな会話か理解しているものの、結梨華は【今】の状態では理解が出来
ないらしい。【今】は人里の子供と大差ない精神年齢だからな。こうしてみたら普通の
子供。

そんな結梨華はよそに、霊夢は文句を言い、魔理沙は彼女の言葉に同意。

「何よー？　あんたの【能力】があればすぐ沈静化できるじゃない。わざわざ私が新しく
作った【弾幕ごっこ】をする必要がないんだから」

「だよなー。その能力でこうして結梨華が人里に溶け込んでいるんだし。中々良い能力
だと思っぜ」

「主人様のおかげで【今】の結梨華がいますからね♪」

……数少ない、俺の理解者だと思っ。後は【あそこ】で過ごしたメンツのみかもしれ
ないが。

「どうも。じゃあお礼に明日出す予定の試作品の間食を出すことにしよう」

「さすが封結！」

「お、デザートか！」

「わーい♪」

……巻き込まれながらも、この日常を楽しんでいることには変わりはない。

俺はとある氷の妖精の氷を利用した保存所から、試作品間食を振る舞った……。

二話 『氷の妖精、見かけない客人』

「——今日はこれだけ採れたか。中々に上々だな」

人里と魔法の森の境目付近にある俺の畑。無駄に少し広い畑から旬の野菜を採っていた。野菜を手に取りながら昼食に何を作るか考える。

「さてとと、茄子を使った料理……外界から紛れたレシピ本で「まーぼー茄子」だったか？　それでも作って——」

『待ちなさい【冬】！　今日こそアタイが勝つんだから！』

カゴに野菜を入れて帰ろうとしたとき——聞き覚えのある声か俺を呼び止めた。何となくイントネーションが違うような名前の呼び方だが……振り返って確認。そこには全体的に青い服をきて、胸元には赤いリボン。背中には氷で出来た妖精の羽。そこからわかるのは——

「はあ……懲りないな、チルノ」

「いつもいつも勝ち逃げばかりして！ 今日こそはアタイが勝ってやるんだからーっ！」

「……大妖精はどうした？」

氷の妖精、チルノ。きっかけは俺の畑に悪戯しようとしていたときだっただろうか……？ ぶつちやけてしまえば畑は俺の「能力」で被害は出ないようにしている。それでもなお、俺が注意して……何故かある意味逆ギレされた。その時に霊夢が作ったルー【弾幕ごっこ】で対決して……勝利。

……いくら何でも正面安置はないと思う。

そんな回想をよそに、いつも傍にいる他の妖精である【大妖精】の所在を尋ねると、自慢げに胸を張って応える。

「大ちゃんはおアタイの為にゆーしを募って貰ってるの！ アタイ達のこんびねーしよんを舐めない事ね！」

「それは強そうだな。今回は俺の負けで良いから戦利品としてこれを受け取るよいい」

さすがに一对複数はめんどくさいと感じたため、能力を駆使してできた苺を数十個手渡した。それを手渡されたチルノは困惑するも、一つ口に入れると――

「――甘くて美味しい！」

「良かったな。それをちゃんと友達に分けてやるんだぞ？」
「わかったー！」

……チルノに勝利した際、氷を貰ってかなり役立っているからな。そのお礼と言っても良い。

喜んで食べているチルノを置いていき、店に戻っていった……。

『——チルノちゃん？ 皆連れてきたけど……あれ？ 封結さんは？』

『皆には悪いけどアタイが勝った！ それで戦利品ってゆーことで、これ手に入れた！ 皆に分けてやれて！』

『（……大人な対応で済まされちゃったんだ……）これって……封結さんの畑にある苺？』

『うん。どうしてか分からないけどアタイ達が入れない畑の。でもこれ、美味しいよ！』

『そうなのか……私も食べて良いー？』

『もちろんよ！ みすちーとリグルも食べて良いわ！』

『じゃあ、貰おうかな——あ、美味しい』

『虫たちにも、この苺食べさせてあげたかったな……』

歩いて店に戻ると……店の前に見慣れない服装の女が結梨華と話していた。もしかするとお客かもしれない。ちょうど俺がいなくときは結梨華が店番しているからな。

少し遠くで立ち止まり、会話を聞くことに。

『……こころって基本どんな物を買っているの？』

『えっと、お野菜だったり、お総菜だったり、服だったり、道具だったり、それと物々交換で仕入れた博麗神社の御札と調合された栄養豊富(?)の飲み物とか色々あります！』

『え？ これ全部あなたが作っているの？ まだこんなに幼いのに……？』

『違いますよ。結梨華はたまにお手伝いで作ることがありますが——って、結梨華はそんな幼くないですよーっ!? 少なくとも人間のあなたよりも長い時間生きているのです！』

『……人里には妖怪も住んでいるらしいけど、じゃあ妖怪なの？』

『はっ?! これ以上は【きみつじこう】です! 必要以上結梨華の事を話すのはよろしくないことなので! それと妖怪じゃありませんっ! これは断言できます!』

『(……見た目【お嬢様】と変わらない外見しているけど……そんなプレッシャーとか、そんな類いな事は感じられないわね……)』

……ちゃんと自制は出来ているが、ちよくちよく危ないワードが出ているな。これ以上ボロが出ないように、フォローするか。

「——ウチの店に何かお求めで? お客様?」

後ろから声をかけると、その人物は振り返った。その人物は頭に「かちゅーしゃ」をしており、清潔そうな服を着ている。髪の毛の両側には三つ編みされており、リボンで留められていた。

その人物は俺に気づくと返事をした。

「……【ウチの店】? これはあなたのお店なの?」

「ああ。そうだ。名も無き店の店主だ。結梨華の事は気にしないでくれ。ちよつと頭がアホなんだ」

「主人様!? お客様の前でそんなことを言うのは酷くありませんか!」

「バカ」というよりは随分マシだろう？」

「あ、そうですね！ だったら良いです！」

……さすがに言い過ぎたと軽く反省している。変な目でお客は見ているし。

そしてそのお客は少し冷たい目で話し掛けてくる。

「……見た目幼い少女に【主人様】って呼ばせているの？ それはどうかと思うわ……」

「俺は呼び方を強要させた覚えはない。結梨華が勝手にそう呼んでいるだけだ」

「ですよ！ 結梨華は主人様にいろいろ厄介になっていきますから、それ相応の態度で接

しているのです！ 主人様がいてくれたこそ、【今】の結梨華がいます！」

何故か俺への非難に結梨華はムキになってフオローを。そして疑問に思ったのか、話

し掛けてくるお客（仮）。

「……一応聞きたいのだけど、あなたは人間よね？」

「俺は人間だが……それがどうした？」

「いえ……何でもないわ」

聞きたいことが一応聞き終えたのか、話題を変えてきた。

「せっかく来たのだから、旬なお野菜でも貰おうかしら？ 幻想郷に来たばかりだから

あまりどんな野菜があるのか分からないのよ」

「毎度あり。それしても【外来人】だったのか……いろいろ聞きたいことはあるが、引き

留めるわけにはいかないな。適当な詰め合わせで用意してくる」

お客（確信）の要望で俺は店の中に入り、旬な野菜、食べやすいだろう野菜を適当な袋に詰めていく。そしてその袋を持って行き値段を伝えると。

「……この量で安すぎない？ 予算の半分近くの値段なんだけど……？」

「儲けているからな。これくらい構わないさ。一応、初回限定のやつには少し多めに入れて、安くしているんだ。これ以降も買い物するときは量に応じて値引きされる。これからも常連になるようにな」

「……中々良いお店ね。また来るとするわ」

「おう。よろしく」

「ありがとうございますー！」

お金を受け取って商品を渡し、結梨華の挨拶を最後にそのお客は歩いて帰っていった。そして——結梨華があることを伝えてくる。

「主人様……あの人から【妖怪】のにおいが付いていました……」

「……結梨華、一応聞きたいんだが彼女は人間か？ 妖怪か？」

「あの人自身のおいは主人様と同じ人間ですね。それは結梨華の鼻がそう判断しています。妖怪については複数ののにおいを感じるの、種族の断言は出来ませんが……」

結梨華は鼻が良く効くからなあ……。言っていることは間違いないだろう。

そして……気がかりなことが一つ。

「魔理沙の言う赤い洋館の出現と、彼女が外来人である事は重なっているような気がするな……」

「……お腹がすきました……」

「場違いな発言をするな」

俺の推理とは全く関係発言をしやがった。俺の言葉に抗議を申し立てる結梨華。

「だってもうそろそろお昼ですよ!! 結梨華のお腹は腹ぺこ丸です! お店の商品に手を出さなかったただけ良かったと思ってくださいよ!?!」

「手を出したら間食抜きだったな」

「……危なかったです……」

「ま、そろそろそういう時間帯だしな。外界のレシピ本を元に作ってやるから」

「やったー♪」

一先ずは俺達は昼食を摂る事にした……。

とある湖の近くの洋館。そこである二人の人物が話をしていた。

「それで人間達が住む人里はどうだったの——咲夜」

「……至つて普通の人間ばかりに思えましたが……とある名前がないお店に、少々気になるところがありました」

「……気になるところ？」

「はい。多様な商品を売っているお店なのですが……若い少女の存在が気になりました。本人曰く、私より長く生きており妖怪ではないとか……」

「……さすがに本人をみない限り運命は見えないわね。それで咲夜より幼く長く生きている……？ それで妖怪ではない……他は？」

「他と言いますと……あの店の主人——というよりも私と同じぐらいの外見の少年でしようか？ その人物は「博麗神社」と繋がりがあると思います。お店の商品で博麗神社の御札が売られていました」

「博麗神社への道中は危険だと聞くけど……その店自体がその神社の「分社」という事かしら？ つまり博麗の巫女もそこによく出現すると……」

「……どうしますか？」

「どうするも何も、予定に変更はないわ。吸血鬼の時代がこの幻想郷中に広がるのよ……！」

三話 『烏天狗からの見た店』

——最近、ネタがありませんねえ。「妖怪の山」でも面白いことは起きていませんし、特ダネの人物もいませんし……。

「……異変解決者に所にお尋ねして、それを新聞にしましょうか——」

人里について適当に昼食を取ろうと歩き回ろうとしたときに——とあるお店から会話が聞こえてきます。私はその方角に視線を向け、耳を澄ましてみる事に。

「——お金ありがとうございます！ ではお総菜をどうぞ！」

『結梨華ちゃんは偉いわねえ。まだ幼いのにお店の手伝いまでして』

「うう……本当はそんなに若い年齢じゃないんですが……」

『背伸びしたいお年頃なのよ。孫も『子供扱いにするな』って言われちゃうし……あ、博麗神社の御札も良いかしら？ もしもの護身用で重宝しているのよ』

「霊撃札ですね。人里から少しでも外に出るとき、不審者が現れたときには重宝しますからね。持っておいて損はないと思いますよ？ では、セットという事でお安くお売

「りしますね」

『おや？ そんな安く売って貰っても良いのかい？ 店主さんに聞いた方が良いんじゃないかえ？』

「多く買ってもらえるほど安く値引きしても良いと言われているので！ 最低限の境界線はきちんと把握しています！」

『ありがとうねえ、結梨華ちゃん。店主さんにも伝えておいてくれないかい？』
「はい！ きちんと伝えておきます！」

……あんなお店あったでしょうか？ あんな人里の隅にお店が……？ それに、気になる単語が聞こえましたし……。

「……【博麗神社】の御札。つまりあの店は博麗の巫女である霊夢さんと関係がある……」

それに……あの【結梨華】と呼ばれたお勘定をしていた存在……。長く生きてきた私ですが、あの子は人間では……ない？ 何か【モヤ】があるような不自然が……？ それと同時に……妖怪の気配もしない。そのような人物の存在があり得るのでしょうか……？

……どうだったとしても——

「——久々の取材対象、発見です！」

私はそのお店に向かつていった……。

「あのー、ここのお店の店員さんですか？ 少々聞きたいことがあるのですが？」

私はその店の前に行き、椅子に座って何かの本を読んでいる幼い少女（結梨華さん）に声をかけると顔を上げてこちらに向いて言葉を返してくる。

「？ どちら様ですか？ お客様？」

「いえ、その前に——私は「文々。」の新聞記者である烏天狗の射命丸文です。以後お見知りおきを」

「あ、ご丁寧に。結梨華は結梨華っていう名前です。主人様が名前を付けてくださいました！」

「……【主人様】？ それは誰かに仕えているということですか？」

「うーん……仕えているというよりは……お世話になっている？ 的な事だと思います」

す。主人様のおかげで【今】の結梨華がいますし」

嬉しそうに大雑把な説明をする結梨華さん。

……名前を付けてくれたということは「孤児」というものなのでしょうか？ 人里の片隅にそういう人間の子供達がいると聞いていますが……？ 大抵の孤児の理由は親が妖怪に襲われたという理由が多数のようですが、でも、目の前の結梨華さんは人間の気配がしない。その事に問いかけようと思いましたか——

『文？ 封結の店で何しているのよ？』

背後から聞き覚えのある声。振り返ってみると脇の空いた紅白の巫女服。その人物は博麗霊夢さん。

「あや？ 霊夢さんこそこのお店に何か用——って、そういえば何故かこのお店に博麗神社の御札があるんですよね……それと何か関係が？」

「当たり前じゃない。御札でこのご飯たかりに来ているんだし」

「……………え？」

「それでこの日は「アレ」ね。月一で「あそこ」に封結は行っていると。まあ、今日もよろしく願いますわ、結梨華」

私の疑問をよそに、博麗神社の御札を取り出しては結梨華さんに手渡す霊夢さん。彼

女の行動を見て悩むように言う結梨華さんでしたが――

「霊夢さん……お金でご飯を買おうと思わないんですか？」

「封結は何だかんだ言いながらちゃんと受け取ってご飯振る舞ってくれるじゃない。それに私にとつては御札がお金。適度に作ればここでの通貨になるって……素敵じゃない？」

「主人様も主人様です！ 本当に霊夢さんと魔理沙さんに甘すぎます！ この間作つてくれたおはぎのように！」

「あー、あれは適度な甘さで良かったわね……また食べたくなつてきたわ」

「それを見通してはわかりませんが、作り置きで今日のお昼はおはぎです！ セットで緑茶も付いてきます」

「わかつてるじゃない封結♪」

二人特有の会話でしたが……分かることは霊夢さんと「ふゆ」さんは良好な関係だということ。結梨華さんはもう諦めているかのように、霊夢さんをお店の中へと誘導し始める。

まだお店に入っていない霊夢さんに聞きたいことがあるので、引き留めて話を聞いてみることに。

「れ、霊夢さん？ その「ふゆ」さんとどんな関係なんでしょうか……？」

「封結？ 封結は——」

顎に手をつけながら霊夢さんは応える。

「——腐れ縁、よ」

そう答えると霊夢さんはお店の中へと入っていった。私が動いていないのを見て、結梨華さんは誘うように声をかけてくる。

「文さんもお昼ご飯どうですか？ 一応まだ量はありますし」

「あやや？ 私も良いのですか？」

「あ、でも商品でもあるのでお金はいただきます。でも大丈夫ですよ。初回の方には安くしているので」

「それはお気遣いありがとうございます……では、いただきますでしょうか！」

「毎度ありがとうございます！」

……ここでお誘いに乗れば、ネタが盛りだくさんな気がします……！

居間へと案内してもらい、おはぎと緑茶をもらう。手始めにおはぎから一口食べてみ

たところ――

「あやや……これはこれは何とも……」

「主人様の料理でお客さん、ゲットです！」

結梨華さんが私の表情を見てか嬉しそうにしています。これ……普通に美味しいです。緑茶もいただきますが、口の中の甘みをさつと流してすつきりさせるお茶。

「……これって結構高い茶葉なんじゃないですか？」

少し不安になって聞いたものの、代わりに霊夢さんが答えた。

「確かそれも封結が作っているのよね。そうよね結梨華？」

「はい。お茶つ葉まで主人様の手作りなのです。えっへん」

「それはあんたが自慢げにすることではないでしょう……う？」

「だって結梨華だってお手伝いしているんです！ 水やりをきちんとやってみましたよ！」

他愛のない会話をしながら箸を進めるお二方。

……「ふゆ」さんはよほど女子力が高いようですね……聞いたところ、ほとんどの商品は「ふゆ」さんの手作りだとか。でも、少々気になるところが。

「畑にしても、このお店にはないですよ？ 何処の土地で作っているんですか？」

「その事ですか？ 主人様は魔法の森で土地を耕して作っているのです」

「…………え？ 普通の人間は瘴気でアウトですよ？ まさか人間ではないのですか？」

魔法の森はキノコの胞子などの関係で、耐性のある人物か人外の存在しか入れないはず。可能性が高いとしたら、もしかして人間ではないのでしょうか？

しかし、結梨華さんは首を横に振って否定する。

「主人様は人間ですよ。人里に住んでいる人間では珍しく、能力持ちなのです。能力で影響がでないかと」

「そうなのですか!? それは大変興味深い……一体どんな——」

「文。結梨華に尋ねても答えてくれないと思うわよ？」

結梨華さんに「ふゆ」さんの能力についてお聞きしていたところ、何故か霊夢さんから制止の声が。当然私は疑問の声をあげる。

「あやや？ それはどうしてなのですか？」

「封結はあまり能力は知られたくないのよ。本人にとつて能力は生活にしか基本使わないし。というよりも……基本的に知られたら近寄りがたい能力でもあるから」

「ふーむ……霊夢さん、結梨華さん。ちよこつとだけでも教えてくれませんか？」

少しでもヒントを貰えるかお二人に譲歩してみたもの——

「ご飯が買えなくなるから嫌よ」

「おやつ抜きにされてしまうのでそれは無理です……ごめんなさい」

「あなた達食事に釣られすぎですよ!」

結梨華さんとはもかく、霊夢さんはお金で払っていませんよね!? 御札で物々交換みたくしているだけですよね!? そして結梨華さんの理由が可愛いっ!?

『——何か知らない声が聞こえたんだが……誰かいるのか?』

急に居間の扉が開かれ、作務衣という人里ではメジャーな服に、頭には眼鏡を掛け、髪が長いせいかポニーテールにしている……男の方?

その方は私に視線を移すと話し掛けてきます。

「……見ない顔だな? 客か?」

「あ、はい……私は烏天狗の射命丸文つていいいます。失礼ですが……あなたは?」

「名も無き店の店主である封結だが?」

「……………あややつ!?! 男の方でしたのか!?! てつきり女の方がこのお店を構えていると思っていましたの!?!」

予想と違う光景を見て私は驚愕しました。結梨華さんの言っていたことはまりつきり女の方と思わせる話でしたよ!?! 家事が出来て、言葉を少しぶつきらぼうの時があります。優しい人だと!?!

私の反応を見てか、溜息をつきながら説明する封結さん。

「……………まあ、男の癖に髪の毛を伸ばしている俺がそう見えても仕方ないけどな……………」

「はあ……………でも、結梨華さんはあなたのことを「主人様」と読んでいるみたいですが……………実はお若く見えて年を取っていられるのですか?」

「霊夢より少し上だ。そんな老いぼれに見えるか?」

「……………いえ、そう思っただけではありませんでした。念のために。しかし……………霊夢さんは博麗の巫女で仕方ないと思いますが、ご両親はどうしたのですか? 聞く限り繁盛しているお店みたいですが、まさか離れて暮らしを——」

私は安易に聞いてみたのですが……………彼は淡々と答えた。

「妖怪に殺された」

「……………ええ?」

「まだ物心がついてない時だったか……人里に侵入していた妖怪と戦っていたらしい。それで勇敢に死んでいったよ」

「そんな淡々と話すものではないですよね!？」

何故両親がそんな事になってしまったことを平坦と話せるんですか!? 人間はそういう事は胸にしまっておくべき事ですよね!？」

その中、霊夢さんが封結さんに気遣うように話し掛けた。

「……それで今日行ってきたんでしょ?」【墓参り】

「月一で行っているからな。何時までも心配かけるわけにはいかないし」

「そういうところは本当に真面目ねえ……」

霊夢さんは封結さんの行動を理解しているみたいです。結梨華さんは悲しそうに頷いて同意していますが……でも、それでも気になることが。

「……封結さんは私のような妖怪を恨んでいるのでは? 大事なご両親がそうやってしまつては——」

「何故お前を恨む必要がある? お前は俺の両親を殺したわけじゃないだろう? 別に

妖怪を恨んでなんか無いさ。復讐も、ちょうどその時に達成出来たらしい。その時に発現した自分の能力でそいつを、な」

……何となく、霊夢さん達が封結さんの能力について黙っていたわけが分かるような

気がしました。

「……どのような能力で？ 霊夢さん達は生活に役立てると聞きましたが……殺す事も可能な能力なのですか？」

「……そうだな。生かす事も殺す事のも俺次第だ——とは言っても、条件は難しいが。それに霊夢には俺の能力が通用しない」

「霊夢さんの【空を飛ぶ程度の能力】ですか……さすが最強と呼ばれる博麗の巫女ですね……」

「いや、私としたらそんなつもりはないんだけど？」

呆れた声で反応を返した霊夢さん。そして封結さんは場の空気を変えるように話題を変える。

「……辛気くさい話を聞かせたな。詫びに今日食べたと思われるおはぎとお茶の料金はいらない」

「あやや？ それは良いんですか？ 私が話を振ったにも関わらず……？」

「店主である俺が良いって言っているんだ。気にすることはない」

「封結。だったら私も御札を——」

「お前は例外だ。金払うか、別な物を寄越せ」

「……いけずー」

「結梨華が思うには霊夢さんはかなり優遇されていると思いますけどね……」

……私が話の原因でもありませんのに、心の広い方ですね……。人間ですのに、霊夢さんと大体同じように肝が据わっているというか……。

あ、それと素朴な疑問が一つ。

「あの、封結さん？ 少々気になるところが一点」

「……何だ？」

「結梨華さんとはどういう関係なんですか？ 彼女から聞けば、あなたに感謝しているみたいですが……」

話を聞いてからずつと気になっていた話題。どのような過程を経て彼女は封結さんを慕い始めたのか気になります。それに「兄妹」としても——というより、明らかに兄妹じゃありませんね。そこところはどうかの？

そう問いかけると、封結さんは何かを考えた後に一言。

「……訳ありの居候だ」

「……ちなみに、どのような理由で居候を——」

「文さん！ それ以上は〔きみつじこう〕なのです！ 申し訳ないですが、結梨華の秘密を知られるわけにはいきませんっ！」

詳しく聞こうとしたら本人に遮られてしまいました。むう。ここからが記者として

も私なんですが……。

「あの……結梨華さん？ そののどころをもう少しだけ——」

「……これ以上喋ったら【お爺様】が——」

「おいコラ結梨華。喋り掛けたぞ今」

「はっ!? 確かに喋り掛けました!? 記者さん、恐ろしいです……!」

「いや、今のは結梨華の自爆じゃない……」

封結さんの制止声に、霊夢さんの呆れ声。もしかして霊夢さんは知っているのでしょ
うか……気になるところです。

ですが……【今】は止めておきましょう。

異変解決者の他に結梨華さん、封結さんといった取材対象が出来ましたからね！ そ
れとこのお店についても！

私は名も無き店での料理に舌鼓を再開しました……。

四話 『香霖堂、競争』

魔法の森を歩いて数十分。ある場所に向かって俺は歩いてきた。久しぶりにとある店に行く為だ。それと……依頼した物を受け取りに。

そしてその店に行くと、周りには「無縁塚」で拾ってきたという外界の物がたくさん置かれている。意味不明な「まねきん」という変わった等身大の人形があるが。

「……店の外に置かれている「商品」に惹かれるような物は無し」と

商品を確認した後、ドアを開いて挨拶を。

「霖之助ー？ 何かめばしい商品はあるかー？」

『おや、この声は……封結君か。久しぶりだね』

『お、封結じゃん。【香霖堂】に何か用か？』

『いや、魔理沙？ ここは僕の店だからね？ 用件を聞くのは君じゃないから』

来た店、「香霖堂」に入ると店主である森近霖之助と魔法使いの霧雨魔理沙がいた。俺の知っている範囲で二人はかなり過ごした日が長いらしい。俺は途中から霖之助と知り合ったが。

俺が来たことを確認した魔理沙は近寄り話し掛けてくる。

「たまにお前もここに来るが……何か買物か？」

「お前と違つてちゃんと金は払っているからな。いい加減霖之助にちゃんと金払えよ」
「失礼な。出世払いで死ぬまでに返すぜ」

「果たしてお前に出世する機会はあるのだろうか……？ まあ、それはともかく。霖之助、何か俺の興味があるような商品を仕入れたか？」

「うーん……そうだね……じゃあこれはどうかな？」

そう悩むように言つた霖之助は机の下から外界のものであろう……小さな箱みたいなものを取り出した。

そして霖之助は能力である「未知のアイテムの名前と用途が分かる程度の能力」で説明。

「これは「ハーモニカ」といつてね？ 用途は「息を吹きかけて演奏する」ものだ。息を吹きかけて、指で空いている穴を防ぐ数や場所を変えると音が違うんだ」

「何か変わった楽器つてのは理解した。しかし……実用性が無いな」

「まあ、娯楽の類いだと思つても良いかもね。それで興味湧いたかい？」

「これといつてないな。それで……依頼した物はできあがつたか？」

霖之助がお勧めした「はあもにか」を断り、本題に入る。

「ああ。完成しているよ。じゃあ持つてくるから待つてくれるかな？」

「わかった。感謝する」

「? 何か香霖に作らせたのか?」

裏へと移動していく霖之助の後に、改めて問いかけてくる魔理沙。

「ああ。霖之助が仕入れた商品と俺の持ってきた——というよりは結梨華にもらったものか? それを合わせたものだ」

「……? 結梨華から? 何を貰ったんだぜ?」

「魔理沙も同じ素材を持つている物質をどこかから拾ってきてな? 日頃の礼という事で貰った」

「私と同じ素材の物……?」

魔理沙がそう疑問に思っている——霖之助が俺の依頼した商品を持ってきてくれた。

「はい、封結君。【ローラーブレード】にミニ八卦炉の特性を付け足した商品だよ」

「ありがとな霖之助。余った緋々色金は約束通り渡すとして、いくらぐらいだ?」

「そうだね……これくらい——」

「緋々色金!? 封結それを拾えたのか!」

精算してもらっている途中で魔理沙が驚愕の声をあげた。まあ、無理は無いかもな。再び俺は説明する。

「俺じゃなくて結梨華な。本当に良い物を渡してくれたよ——お？ 結構予算に余裕があるが良いのか？」

「ああ。構わないよ。君は常連さんでもあるからね」

「やっぱ普通に買いい物してくれてこそだよなあ……」

霖之助に感謝しながらお金を払い、商品を受け取った。受け取った商品について魔理沙は詳細を尋ねてきた。

「なあ……靴に丸い物が一列に並んでいるが……何だぞそれ？」

「霖之助曰く〔ろおらあぶれえど〕。これを履いて滑ることにより、通常より速く行動が出来るんだと。改造してもらおう前に試しにやってみたんだが……これが速い速い。生活にも役立ちそうなアイテムだ」

「そんなアイテムがあったのか!? 香霖っ！ どうして教えてくれなかったんだぜ!」

少し怒りを含めて霖之助に詰め寄る。俺の満足な表情を見て欲しかったのかもしれない。

しかし、霖之助なりにもちゃんと理由はあったので話した。

「足のサイズの問題もあったんだよ。僕だと小さくて入らない。君の場合だと大きすぎてぶかぶかで危険。試しに封結君が履いてみて少し余裕のあるちょうど良いサイズだったんだ。この〔ローラーブレード〕は持ち主を選ぶんだよ」

「小さいと危険なのか!」

「下手したら途中で靴が脱げる可能性があるからね。ましてや、改造したこれは君にとつて危険すぎる」

「……さすがに危険なアイテムを使う気にはなれないぜ……」

霖之助の表情を悟ったのか、魔理沙は食いつくのを止めた。まあ、折角俺が最初に目を付けたのに盗られるのは解せないからな……。

会話を交えるようにして霖之助は俺に話し掛けてきた。

「この「八卦ローラー」は全体的にも緋々色金でコーティングされているから、耐久性はあまり問題ないよ。もしも欠けたりとかしたら、持つてくるといい。余っているので修復しよう。それと安全のために膝まで別の素材を作って伸ばしている。膝下までの高さしかなかったが……膝まで覆える方が負担も少ないし、安全だからね。そして両方の八卦ローラーの靴の部分は四方向に噴射口がある。前後左右にね。足に靈力なりを溜めて込めなきゃいけないという特殊だが……それは大丈夫か。それが出来たからこういう作りになっているわけだし。靴の後ろは前に加速、靴の前は減速とバック。左右については方向転換だ」

「把握した」

「……封結はどうして短時間で理解できるんだぜ……?」

「そりゃあこういう作りにしてほしいと頼んだからな。依頼者が把握出来なくてどうする。」

「何か安心したぜ」

魔理沙が適当に安堵したところで、最後に補足という事で霖之助は一点。

「後は……これは君以外の人物には使わせないように。君の【能力】で安全が保証されている物だからね。能力が無かったら体の負担が大きすぎるから」

「……だろうな。気をつける」

「なあ、封結？ そんなに速いつてなら私と勝負しようぜっ！ どっちが速く着くか競争だ！」

霖之助の説明が終わると、魔理沙から……「かけっこ」だろうか？ そういうのを申し込まれた。

……良いかもな。これがどれくらい速いのか知る必要がある。

「わかった。じゃあここから霧の湖まで競争だ」

「よし！ 私が勝ったら何か奢れよ？」

「普段俺の店にたかりに来る奴が何を言う？ ……まあ、考えておこう」

「その言葉忘れるなよ！ じゃあ表に出ようぜ！」

魔理沙に促されるまま、手を掴まれて店の外に連れて行かれそうになる。完全に店か

ら出る前に、霖之助に挨拶を。

「ありがとな霖之助！　また来る！」

「ああ。歓迎するよ」

そして俺達は香霖堂から出て行った……。

「……魔理沙も魔理沙だねえ……。素直に誘えば彼は了承してくれると思うのに……」

「——封結。準備は良いか？」

「ああ。大丈夫だ」

俺は普通の靴から【八卦ローラー】に履き替えて、二人でスタートダッシュの準備をする。

……今の内に足に靈力を溜めておこう。いつでもダッシュ出来るように。

そして……お互いの声で、カウントダウン。

「3、2、1——」

魔理沙は箒にまたがり、俺は構えて——

「——スタート——」

お互い言ったところで——かかとに靈力を込めて——靈力を一気に放出！

俺はすぐさま言い終わった魔理沙を置いて目の前に直進した。左右の噴射口、ステツプを上手く調整しながら木々を避けていく。

「——おまつ!? スタートダツシユ速すぎるぜ!？」

遅れながらも魔理沙は箒で動き出しただろう。後方で魔理沙の声が聞こえてきた。

「一先ずはスタートダツシユで差を付けるのが優先だからなっ!」

直進しながら後方にいるであろう魔理沙に声をかける。それに応えるように自信がある声で魔理沙の声が聞こえてくる。

「速さなら総合的に私の方が上だぜ!」

後ろから魔理沙の声が近づいてくる。普段の魔理沙は結構飛ばして移動している所為か手慣れた。一瞬だけ後ろを振り返りながら確認しながら前に俺は進んでいく。

——そして何時の間にか、併走するようになる。

「……さすがに普段飛ばしている方が有利か……」

「当たり前前だぜ! 私に速さで敵うと思うなよ!」

「……お前、ずっと俺の方を見ているようだが良いのか？ 前方不注意だぞ？」

そう。魔理沙は俺に視線を向けながら話し掛けています。今のところは、何も問題は無かったのだが——

「封結と違って大体把握してるんだぜ？ キノコの收拾で地理は——」

「——バカッ!? 前見ろっ!!」

「おいおい、そりゃないぜ？ 私の気をそらそうとするのは——」

——あいつ本当に見てないっ!? 俺の言葉を妨害として認識して——数十メートル先の正面に大木があるのにも関わらず！

俺はすぐさま魔理沙に体を向きながらも、せめて現状を把握させるために言葉をかけ続ける。

「マジで正面見ろっ！ ぶつかるぞっ！」

「？ 焦るようにそんな——え——」

ようやく現状を把握した魔理沙だが——突然に入ってきた目の情報から体が動いていない！

だから俺はすぐに——

「魔理沙っ!!」

「!? ふ、封結——」

八卦ローラーで魔理沙の元に一気に加速、箒から魔理沙を引き離して——なるべく広く、傷つけないように魔理沙を包み込むように抱き寄せる！

刹那。箒と大木がぶつかる鈍い音が聞こえる中、俺と魔理沙は転がっていく。数十回か、それ以上近くだろうか……：……ようやく転がるのが止まった。偶然、霧の湖に着いたが……：……それよりも、確かめなければいけない事がある！

「魔理沙っ！ 怪我はないかっ!？」

座るような体勢に移し、魔理沙の確認。近くに彼女の帽子があつて、魔理沙の金髪の髪の毛が簡単に見える、見たところ外傷はないようだが……：……魔理沙が心配そうに俺に話し掛けてくる。

「わ、私よりも封結は!? 私を庇って——」

「俺は能力で害を封じているから影響はないっ！ それよりも怪我は無いんだな!？」

「な、ないぜ……：……封結が庇ってくれたからな……：……」

「そうか……：……良かった……：……」

「どうやら外傷は本当にないようなので安堵した。あの速さでぶつかっていたらシャレにならなかつた……：……」

「その中……：……魔理沙は頬を赤く染めながら……：……声が少し小さいながらも——」

「その、封結……：……ありがとう……：……」

「……素直に礼を言われているのはともかく、お前が言うとは違和感がありすぎるな……」
「おまつ!? 人が素直に礼を言っているのにそりやないぜ!」

「仕方ないだろ。魔理沙はそういう奴なんだから」

「……解せないぜ……」

軽く礼を言った後、すぐに魔理沙は近くにあつた帽子をとって土埃を払い、被つた。俺も立ち上がり、服をはたいて土埃を落とす。

そして魔理沙は悔しそうに、箒が鈍い音を出したのを思いだしたように言う。

「……あの音の大きさと絶対壊れているぜ……」

「だろうな。まあ、自身が大怪我するよりはよっぽどマシだろ」

「そうだけだよ……」

名残惜しそうに、悔いがあるような言い方で、箒が壊れた場所に視線を移しながら言う魔理沙。

「……仕方ない。」

「実はというとな魔理沙。かけつこの結果なんだが……実はお前の勝ちなんだ」

「は……? 私、封結に明らかに負けただろ? 私は……大木に本来ぶつかっているんだし」

疑問を含めた声で魔理沙はこちらに振り返って尋ねてくる。

……黙っていれば俺の勝ちですんだかもしれないのに、我ながら甘いな。

「魔理沙を庇って転がったとき、ちょうどこの霧の湖についただろ？ その時、魔理沙の背中——というよりはその長い髪の毛か？ それが俺よりも先にゴールしたんだよ、お前」

「……じゃあもしかしてあれなのか？ 私を庇って、その私が勝ったのか？」

「そういう事になるな……やれやれ。今回の敗因は運だな。これで俺は魔理沙に何かを奢らなきゃいけないワケだが——」

そこで俺は区切り——交渉を持ちかけたみた。

「——箒で良いか？ 二日ほどあれば作れると思うが……」

「え……!? 良いのか!? てつきり封結の事だから『今回の勝負は無しだな』って言うかもって思ってたんだが!」

「霖之助の買い物で余裕があるからな。材料から集めて作ればさらに低コストだし。人里で箒の材料を集めて、特注品作ってやるよ。『もう二度と壊してたまるか!』って思わせるぐらいのな」

……どうしてか、魔理沙の悲しそうな顔は見たくない。魔理沙は……覇気のある顔の方が彼女らしいからな。

そして、その事が嬉しく思ったのか——

「——ありがとな封結っ！　楽しみにしてるぜっ！」

——覇気のある、彼女らしい笑顔を見せながら礼を言われた……。

五話 『名前の無い店の看板娘』

人里にある勉強を学ぶ場所。一般的には「寺子屋」と呼ばれている場所がある。その寺子屋の教師であり、人里の守護者でもある——上白沢慧音。ちょうど本日の勉強は終わったみたいだ。

「——よし。これにて解散。ちゃんと宿題をやってくるんだぞー?」

『はーい!』

元気な生徒の返事。慧音の言葉で生徒達は雑談し始める。これも普段と変わらない光景。明日の為に、瓦版作りをしようと移動しかけていた慧音だったが……とある男子生徒の会話が耳に入ってくる。

『なあーなあー? これからどうする?』

『お小遣いもらったからあそこ行こうぜ! えつと……名前の無いお店にいる結梨華ちゃんのところに!』

『お前、結梨華ちゃんの事好きだもんなく……どんだけ結梨華ちゃん競争率高いんだよ……』

『お前も!? お前もなのかよ!? それにやっぱ結梨華ちゃんってモテるよな……』
『何で結梨華ちゃん寺子屋にいないんだよ畜生! あの子がいたらもつと勉強頑張れるのこー!』

『逆にお前だとずっと結梨華ちゃんを見続けて頭突きもらうぞ……』

「(……【ゆりか】? そういえば風の噂で聞いたことがあるような……)」

とある三人の生徒で出てきた【結梨華】の話題。その事柄について慧音は思い出す。「確か人里の隅である【名前の無い店】の店員という事は聞いたことがある……接待がうまく、対応も丁寧だとか。性格も良い少女だとか……)」

……実はというと、封結の店には名前が無いが、人里から【名前の無い店】と呼ばれている。そして知名度ではというと店主の封結ではなく、結梨華の方が知名度が高い。これにはキチンと理由は有り、封結は商品を作り、その製品を運ぶ事という裏方をメインとしている。無論、たまに勘定もするが。それに對し結梨華は基本常に店におり、勘定も結梨華が基本やっている。お客からみたら、封結よりも結梨華の方が対面する確率が高いのだ。

……それとこれは間違っている認識なのだが、結梨華は封結の妹と勘違いしている人物が多数である。そして慧音もその一人あったり。

「(……一度、「ゆりか」という少女を見ておくか……。同年代なら、噂通りの少女なら寺子屋に誘っても良いかもしれない……)」

慧音は計画を変更し、「名前の無い店」に行くことにした……。

慧音は移動し、「名前の無い店」を遠目で観察していた。何故かというと、先ほど結梨華の話題をしていた生徒が店内に入っただけからだ。

そして慧音は観察し、耳を澄ませて会話を聞くことに。

「——いらつしやいませ——って、あれ？ いつもご鼻屑にさせて貰ってる——」

『ここ、こんにちは結梨華ちゃん！ 颯太です！』

『お前改めて挨拶しすぎ。俺覚えてる？ 勇二だけど……』

『何だかんだお前もしてるじゃねーか……歩（あゆむ）って名前だけどな』

『皆さん、そんな改めて自己紹介しなくても大丈夫ですよ？ 結梨華はちゃんと覚えて

いますし、幻想郷の人々の名前を覚えようとしているんですから！（ニパー）』

『さすが結梨華ちゃん……自然すぎる笑顔……』

「それで、今回は何を求めめに？ 間食関連ですか？」

『そ、そうだな……水飴、貰っても良いか？』

『あ、俺も！ 放心している楓太の分もお願ひします！』

「毎度あります！ 結梨華としても嬉しい限りです！ 主人様のお店にキッチンとした常連さんが出来ることは嬉しく思いますよ！」

「（……明らかにお店目的じゃなくて、君自身だと思うが……これも一種の青春なんだろうな……）」

慧音は少し苦笑いしながらも、まだ観察をしながら会話を聞く事に。

『……結梨華ちゃん、ちよつと俺達、聞きたいことがあるんだけど良いかな？』

「？ どうしたんですか？」

『結梨華ちゃんって……その、好きな男がいたりするの……？』

「好きな男の方ですか……？ いますよ？」

『!? 本当に!? 誰!?』

「もちろん、主人様ですよー♪ 主人様がいてくれたからこそ、今の結梨華がいますからねー♪」

『『いや、そういう【好き】じゃなくて』』

「え？ 違うんですか？」

『多分たけど、結梨華ちゃんの【好き】はアレだろ？ 家族に対しての【好き】みたいな

……』

「あー……言われればそれに近いかもしれませんねー……でも結梨華、主人様が求めるならば捧げてても良いぐらいなのですが——」

『いやいやいや!? それはダメだから結梨華ちゃん!? お兄さんとそういう関係（兄妹

での）は!?!』

「うーん……主人様とそういう関係（兄妹）ではないのですが……この誤解はいつ解けるのか——」

『じゃあアレだ！ どんな外見の男が好きなんだ!?!』

「……どんな外見、ですか……——主人様みたいな外見の方ですかね？」

『『よし、髪の毛伸ばして眼鏡を掛けよう!』』

「(……何て言うか、お兄さんの事が大好きなんだな、【ゆりか】という子は……)」

「またもや苦笑いをしながら慧音は見守る。そして——生徒の恋は長期戦になりそうだと悟った。」

三人の生徒が去った事を確認した慧音はタイミングを見計らい、店内に入って結梨華に声をかけた。

「君が【ゆりか】かな？ お店の番をしているとは偉いじゃないか」

「はい！ ありがとうございます——つて、あなたは？ 少なくとも初回の方ですか？

それとも主人様のお知り合いとか……？」

「ああ。前者だ。私は寺子屋で教師をしている上白沢慧音だ。以後よろしく頼む」

「あ、これはご丁寧に……知っての通り結梨華って言います」

お互いにお辞儀をし、お互いの名前を知ったところで……結梨華が慧音にあることを尋ね始める。

「あの、慧音さん。少々聞きたい事があるのですが……良いですか？」

「？ 何だ？」

「慧音さんつて——半分妖怪なんですか？」

唐突の言葉。そして慧音は結梨華の言った言葉に驚愕した。実際に彼女は満月で姿を変えるワーハクタクでもあるのだ。目の前の幼い少女が半分妖怪である事に見抜いたことは信じられなかった。

「!? 私と君は初対面のはずだよな!? 何故!?!」

「あー、やっぱりそうなんですね? 多分、このにおいだと——ワーハクタクでしょうか?」

「なっ!?!」

さらには種族までも当てられた。慧音は困惑しかない。

「(見た目生徒達と変わらない年齢に見えるのに洞察力が高い!? そして「におい」……もしかして妖怪なのか!?)」

彼女の考える可能性。今までのことを考えると妖怪がしつくりとし、その事について尋ねたのだが——

「もしかして君は……妖怪なのか?」

「いえ、結梨華は妖怪じゃありませんよ? とある事情で主人様の所に居候している結梨華です。ただ……結梨華は秘密を喋れないのです。公おおやけにはしてはいけない事柄なの

で……」

「……いろいろと訳ありなのか？」

「はい……でも、結梨華は幻想郷の人々と仲良くなりたと思っています」

「(……嘘を付いているようには見えないな……でも、さっきの対応といい、この子の言っている事は本当かもしれない……)」

しばらく考えていたが——慧音は結梨華の事を「信頼」する事にした。さっきまでの生徒への対応を見る限り、嘘を付いているとは思えなかつたためである。

「わかつた……深く聞かないでおこう。人にはそれぞれの秘密があるからな」

「はい。助かります。風の噂で慧音さんは人里の守護者と知っていたので、大雑把な事は説明した方が良くかなと思ひまして」

「(……ん？ 知っていた？ じゃあもしかすると……幻想郷縁起で知っていたのだからか……？ まあ、こんな幼い少女だ。知的なところを見せたいと思つたのかもしれない)」

慧音は彼女なりの解釈をし、彼女の言葉を受け入れた。

そして空気を変えるように結梨華は話題を振った。

「そして慧音さん。何かお求めの商品はありますか？ 初回の方は値引きしますよ？」

「そうか？ なら——」

本来の目的である「結梨華を寺子屋に誘う」事は忘れ、慧音は名前が無い店で寺子屋

の備品を買うことにした……。

そして、次の日には——紅い霧が幻想郷中を覆うことになる——

紅霧異変

六話 『紅い霧』

その日、普通に店で商売して、店番を結梨華に任せて休息がてら【ある物】を作り終え、仮眠を取っていたところ——目が覚めたら赤い世界だった。

……いやいやちよつと待て。何で赤いんだ？ 俺は起床してすぐ外を確認しに行つた。

俺が外に出ると先に結梨華が外に出ており——幻想郷の空が紅い霧に覆われている……!?

すぐさま目の前にいる結梨華に俺は現状を尋ねた。

「結梨華!? この紅い霧みたいなのは何だ!？」

「あ、主人様! 詳しいことは結梨華もわかりませんが——この全体に妖力を感じます! それで多分、この【におい】の種族は——吸血鬼です!」

「……吸血鬼? おかしいな……幻想郷に吸血鬼だなんていたか?」

「結梨華は幻想郷の種族を全ては把握してませんので……むしろ勉強するために主人様の元にいるわけですし——って主人様! 主人様はこの霧の中大丈夫なのですか!？」

……今更だが、現在の結梨華にもちゃんと能力がある。「において種族がわかる程度の能力」。直接本人ならば種族はわかるのだが、間接的（前の清潔そうな服を着た人物など）は曖昧になる。大雑把な分類の種族しかわからない。複数いけば尚更だ。しかし……この霧の発生元は吸血鬼らしい。今初めて知ったが、特有な物質からでも種族が分かるらしい。

遅れて結梨華は俺を気遣うような発言をしたが——納得した。少し離れたところでは……外に出ている人里の人達が倒れていたことに。

「……！ この霧は悪影響を与える物なのか!？」

「おそらくそうかと思えます！ 結梨華はおそらく性質上、影響はありませんが……主人様は？」

「……今のところ、気持ち悪くなければ何とも問題ない。普段自分に掛けている【能力】のおかげかもな」

「良かったです……主人様に何も影響がなくて……」

結梨華が安堵しているとき——こちらに向かってくる二人の人影。一人はいつも通りなのだが……もう一人は諸事情で箒無しで飛んでいる人物。

……この二人が動いたという事は——

「霊夢……魔理沙……これは【異変】として捉えたんだな？」

「さすがに、ね……それに人里の人間達まで影響があるようだし……」

「それで異変解決に行こうと思っただが——封結、アレは出来たか？」

「【アレ】か。タイミングが良かったな。ちょうど昨夜に出来たところだ」

俺が店に戻ると霊夢、魔理沙、結梨華も着いてくる。そして壁に立てかけてある——
新品の箒。

その箒を手に取り、魔理沙に手渡した。

「大事に扱ってくれよ？ まあ、保険も掛けてあるからな」

「サンキュー封結！ なるべく大事にするぜ！」

「……封結？ その箒どうしたの？」

話に着いてきていない霊夢から概要を尋ねられる。

「何、魔理沙の前まで使っていた箒が壊れてしまつてな。その代用品でもある」

「ええ……封結、私にも箒作りなさいよ。今私が使っている箒、だいぶポロポロになつているんだから——」

「気が向いたらな。じゃあお二人さん、異変解決頑張ってくれ。俺は結梨華と共に人里の住民の介護にあたるから——」

そう逃げるように俺は自室に行こうとしたが——両肩が、それぞれの手によつて捕ま
れた。

「待ちなさい」

「待つんだぜ」

「OK。落ち着こうかお二人さん。俺はさつきも言った通り人里の助けを——」

「あんた（お前）も一緒に行く（んだぜ？）のよ？」

無駄に重なった綺麗な声で止められた。

……だからさ——

「俺は異変に巻き込まなって前に言っただろっ!? お前達二人で解決してくれ！」

「ええ〜? だって正直——めんどくさいもの」

「おいコラ博麗の巫女!? 幻想郷を担う存在なのにそれで良いわけないだろよ！」

「霊夢もそう言っているんだ。お前がいれば早く解決するぜ☆」

「笑顔で催促するなっ。結梨華もそう思うだろう!? お前も何か言ってやってくれ！」

助けを求める意味合いで結梨華に話を振る俺。

……結梨華は俺の味方だからな。俺の意見を肯定するような弁護を——

「主人様——申し訳ないんですが……ここは霊夢さんと魔理沙さんの言う通り、一緒に異変解決を助けてあげてください」

「まさか結梨華が裏切った!?!」

「いえいえ!?! そういう事では無いですよ主人様!?! ちゃんと結梨華は考えて発言しま

した!」

まさか結梨華が二人側に着くとは思わなかったが……一先ずは理由を問いかけてみることに。

「……納得する理由なのか?」

「主人様が納得するかはともかく……この紅い霧が出続けている間、主人様や結梨華、霊夢さん達はともかく……家で避難している人達に何時か悪影響を与えてしまいます。確かに主人様の言う通り、影響が無い結梨華達は介護した方が良いという選択肢があります。ですが……それは結局、この霧の異変が終わるまでずっと介護し続けることになりますよね?」

「……まあ、そうだな」

結梨華の言い分間違いは無いので頷く。俺の相槌を確認して彼女は話を続けた。

「しかし、主人様が霊夢さん達に協力して異変解決を早く終わらせれば、基本的に介護をする必要が無いのです。この霧が出続けている間、体調を悪くする方がたくさんいるでしょう。ですが……異変が続いている間の介護は焼け石に水です。発生源を何とかしなくちゃ回復することが出来ません。そういう事を考えた結果——結梨華は主人様が異変解決に向かった方が良いと考えました!」

「……結梨華? 俺の能力ちゃんと掛かっているよな? 解けたりしてないよな?」

結梨華にも、とある事柄の「能力」を掛けている。その事柄について問いかけているが、結梨華は首を横に振る。

「いえ。今の結梨華なりの考えです。主人様の「能力」はきちんと継続してますよー？」
「はあ……見た目こんな幼女に悟られるってなんだろうな……？」

結梨華の言い分は間違っていないので腹を割り、霊夢達に振り返って言葉を伝えた。

「五分ほど待つてくれ。準備してくる」

「最初からそう言えば良いのよ封結。私の勘が封結を連れて行った方が良いつていつているんだから」

「霊夢、所謂あれだ。「つんでれ」っての」

「お前ら出禁にするぞ？」

「ごめんささい」

軽く怒りを含めて脅迫(?)するとすぐに謝った。あまり調子に乗った発言するなよ……。

ダンスから霖之助から買った「外界の服」を取り出し、それに着替える。赤いワイシャツを着て、黒いズボンを履く。白いロングコートを羽織り、ポケットには弾幕ごっこに必要な「スベルカード」、反対のポケットには「とある二種類の紙束」も入れておく。腰のベルトには香霖堂印の「武器」を。眼鏡を目元に掛けて、霊夢達が待つている場所へ。

そして——霖之助から買った「八卦ローラー」に履き替える。

霊夢と魔理沙は俺の格好をみて懐かしそうに発言。

「……久しぶりに見たわ、その格好」

「こうして見ると香霖グッズがかなり多いよな……」

「体を大きく動かすときはこの格好がちょうど良いからな。さらには俺の能力でこの服達も補助付きだ」

一応、二人との会話を終わるのを見計らった結梨華は確認するように話を振ってくる。

「主人様。人里の介護に関しては結梨華が積極的に行います。なので——霊夢さん達と一緒に、一秒でも早く異変を解決してください！」

「ああ。結梨華、店と人里頼んだぞ」

「はい！ お任せくださいですよ！」

笑顔で結梨華は了承。これ以上話す事はないと判断した霊夢は俺達の行動を促す。

「じゃあさっさと行くわよ。私の勘は魔理沙の言う【赤い洋館】が原因と思っているんだからー！」

「私が異変の張本人を退治してやるぜ！ 霊夢と封結はそれ以外を頼む！」

「俺は誰が解決しようが構わないんだがな……」

霊夢は空を飛び、魔理沙は箒で飛翔。俺は地面をローラーで走るように滑って赤い洋館へと向かった……。

「……主人様、霊夢さん、魔理沙さん、……どうかご無事で……」

七話 『道中での妖怪少女』

赤い洋館へ向かう道中の魔法の森。どうしてかわからないが妖精達の行動が活発になっていた。どうしてか俺達に攻撃を仕掛けてくる。

「もうっ！ こんな雑魚ばかり構っている時間は無いのよ！ 今日はずっくり封結のお店でお茶をたかろうと思っていたのに！」

微妙なカミングアウトをしながら霊夢は向かってくる妖精達にアミュレットを放ち撃退する。お前は少し自重しろ。

「私は封結の作ってくれた箒を試したかったが——ちょうど良いぜ！」

戦闘する気満々の魔理沙は魔力で込められた弾幕を放ち、スピードで翻弄しながらも妖精達を撃退。箒……：気に入ってくれているようで何よりだが、もう少し丁寧な扱え。

「しかしアレか？ この霧の影響で妖精達は活発になつているのか？」

俺も霊力を放つ……：八卦ローラー噴射口から。足から弾幕を飛ばすというのは他の人物は絶対しないだろう。断言できる。

それにこの霖之助特性の八卦ローラー、攻撃も出来る事は今知った事実だが。他の人物が使うと反動がかなりあるだろうが、能力で影響がない。

俺の仮説に二人はそれぞれの意見を。

「そんな事知らないわよ！ それよりも手も動かしてくれない!? 数が数なんだから！」
「封結は何か分析しないと気が済まない性質だからなく。仕方ないことだと思っただけ霊夢？」

「俺は気になってしょうがないんだけどな……」

気にならない二人が不思議でしょうがない——

『何か美味しそうなにおいがする』

妖精達を撃退していた俺達だが——黒い何かの固まりが脇から出現した。何かが見えたのを警戒し、移動するのを俺達は止める。

「……？ 何よこの黒い固まり？」

「いや、霊夢……うっすらとだが、この黒いのになんかいるぜ？」

「というよりも、この物体から声がしたような……」

俺達は目の前の物体が何か討論していたとき——黒い何かが晴れていく。そこにい

たのは——全体的に黒い服を着て、シヨートカットに赤いリボンのようなものをしてい
る少女が現れた。

その少女は……何故か俺に視線を送っている。無論、どうしてか聞いてみることに。

「……何だ？ 俺に何か用か？」

「うん……やつぱり、この人間からいろんな食べ物のおいがする……」

少女はジュルリと涎を垂らしながら俺を見ってくる……もしかして、腹を空かせている
のか？ それにしても食品を扱っているとはいえ、そんな食品のおいがするものだろ
うか……？

「何か金を持っているか、物を持っていれば店に招待してもよかつたんだが……異変が
起こっているからな。また後にしてくれ」

「そうなのか……でも——」

少女は目を妖しく光らせながら、言葉を続け——

「——あなたは食べられる人類？」

——悟った。少女じゃなくて妖女だ。空腹に耐えかねて、捕食の目をしている。

……現状を把握した俺は霊夢と魔理沙に行動を促した。

「霊夢、魔理沙……どうやらこの妖女は俺を狙っているみたいだから先に進んでくれ。後で追いかけて——」

「じゃあ任せたわよ。先に行っているから」

「封結が負けるとは思えないしな。さっさと来いよー」

言いかけている途中で把握したのか、霊夢と魔理沙は先に進んでいった。

……せめて「一緒に戦えば早く終わるから、さっさと片付ける」とか言って欲しかったんだがな……あいつらの性格上、無理か。

その妖女に体を向け、最低限の交渉を。

「せめてスペルカード勝負——弾幕ごっこだ。俺に勝てたら食うなりしたら良いさ。だが、負けたら道を空けること。良いな？」

「……その約束、守るのーっ！」

すぐさまその妖女は弾幕を放ってきた。連続する弾幕だったり、交互に来る弾幕だったり。

……だが——

「隙間だらけだー！」

足に靈力は込めない、八卦ローラーで滑って躲す。躲すのと同時に手に靈力を溜め、妖女に放って当てた。その妖女はよろめきながら悔しそうにする。

「ううー……当たらないのだー……」

「伊達に魔理沙にちよつかいを出されていないからな。余裕で躲すことが出来る」

「そうなのかー……なら——」

そして妖女は一枚のカード——スペルカードを取り出し、宣言！

「——夜符【ナイトバード】！」

そう宣言すると、弾幕が右側から平行に放たれて、左側からも放たれて交差するように弾幕が襲ってくる。

しかし……攻略方法がわかりやすい弾幕だ。

「左右にちよつとだけずれてつと……」

ローラーで滑るのをやめ、ちよん避けに近い動作で躲す。一步か二歩で動く範囲で。

「！ 当たらないのかー!？」

「……まあ、おそらく【今】のお前は深く考えることが出来ないだろう。それはしょうがない事だと思っぞぞ？」

それでも諦めずに妖女は弾幕を放ち続けるが……当たることは無かった。そして制限時間が来たのか——スペルブレイク。それを見計らい、これ以上の戦闘を止めるよう

に促したのだが――

「さてとと……お前のスペルカードは攻略したワケだが……もう戦闘は止めにしたのか？ 無駄な戦いはしたくない――」

「まだまだ行くのだー！ 闇符『デイマーケイション』！」

どうやら諦めるつもりは無いようだ。続けて妖女はスペル宣言。弾幕同士が均一な距離で放たれたと思つたら、その隙間を縫うようにまた弾幕が。そして後は繋がつて見えるような、ムチを連想させる弾幕を放つて来る。

――仕方ないか。

……俺は腰に付けていた【武器】である――鞘から鏢の無い【日本刀】を取り出し――
――弾幕を斬る！

「!? 何なのだそれー!?」

妖女からの疑問の声。そして改めて――俺の能力を掛けている刀。持ち手には黒の六芒星の模様がある御札が貼り付けられているが……そんなことはどうでも良い。俺は繰り出される弾幕を斬りながらローラーで加速、接近し――弾幕を放つ！

「動揺したお前の負けだつー！」

「あう——（ピチューン）」

そのまま、妖女は俺の弾幕に一定量被弾し——相手のスペルカードがブレイクした……。

「——うう……負けたのだ……」

「ま、運が悪かったな」

刀をしまい、妖女にその声を掛ける……そういえば名前を知らなかったな。確認するためにも、自己紹介しながら名前を聞く。

「俺の名前は封結っていうんだが……お前、名前は？」

「私？ ルーミアだけど——あれ？　　そういえばチルノがそう【ふゆ】って言っていたよ
うな……？」

「チルノ？　　何だ知っているのか？」

「うん。友達——」

……不思議なことに、あの氷精と繋がりがあつたらしい。

「一応聞きたいんだが……チルノから赤い小さな果実をもらわなかったか？」

「もらったー♪ 甘くておいしかったー♪」

……何て事だ。もしもあの複数戦をしていたらこんな戦いをするのが無かったのか？ 世の中分らないことに満ちあふれているな……。

……保険の為に餌付けでもしておくか。

「さてルーミア。実はその果物を作ったのは俺だ。人里に戻れば、俺の店にかなりの食料がある。その食料を分けてやっても構わない」

「本当なのかーっ!?!」

「ああ。本当だ。ただ——条件がある」

飛びかかりそうだったルーミアの頭を抑えながら、条件を提示。

「今、こんな紅い霧だろ？ 妖怪は対して影響は無いと思うが……人里は被害が大きくてな。人里で訳あり居候幼女——簡単な特徴としては白い服をきた上半身、赤と黒のスカートを履いて、頭には花が見える——お前と外見の年齢が近い幼女が人里で人間を助けている。お前にはその幼女——結梨華という幼女を手伝って欲しい。前払いと後払いの分割で良い。助ける前と助けた後に結梨華から食べ物に分けて貰え」

「人里の人間を助けたら食べ物もらえるのかー!?!」

「ああ。そう解釈してくれ。詳しい助ける方法は結梨華から聞いてくれ」

ざっと説明し、俺とはある紙束の一つの一枚——黒い六芒星の絵柄が描かれている御

札をルーミアの腕の袖に貼り付ける。当然彼女は疑問に思ったようで聞いてきた。

「？ 何なのだから？」

「呪いだ。まじな一応お前は妖怪だから、人里で人間に危害を与えないようにな」

「いくら何でも私は人里にいる人間は襲わないのだ。そうなたちやうと博麗の巫女に退治されちやう……」

「……最低限の良識はあったか。まあ、それを結梨華に見せながら話した方がスムーズに進むからな。意味はある」

「そうなのか。じゃあ私は人里に向かうのだ。ふゆ、また」

そうルーミアは別れの挨拶をして人里に向かつていった。

……ルーミアの——いや、気にしてもしょうがないな……。

「……その時はその時だ」

俺は霊夢達の後を追っていった……。

八話 『霧の湖の妖精達』

封結がルーミアに勝利した頃。幻想郷の異変解決者である【博麗霊夢】と【霧雨魔理沙】は、襲いかかってくる妖精などを蹴散らし——霧の湖まで来ていた。

霧の湖に着くなり、霊夢は隣に併走して飛んでいる魔理沙に声をかける。

「……ねえ、この湖ってこんな白い霧が掛かってたっけ?」

「私の記憶が正しければこんな霧が掛かってなかったな。それに……何で少し寒いんだ? もうそろそろ夏のはずなのに」

「太陽が紅い霧で隠されているっていうのもあるんでしようけど……私の勘が正しければ、他の奴が干渉しているわね」

「おう、そうなのか。じゃあそろそろ——」

二人が会話を進めている間に——とある羽根が生えている少女に見える人物が霊夢達の目の前に現れる。少し遅れて、その少女の後ろに違う少女がいるのだが。後ろにいる少女も羽根が生えている。

霊夢達の目の前に出現した青く見える妖精——チルノが彼女達の道を塞いだ。

「もう陸には上がらせないよ! ここですアンタ達はアタイのいしずえになって貰うわっ

！」

喧嘩を売るような言葉で高らかに言う氷の妖精——チルノ。その後方で、焦ったようにして引き留める、他の妖精よりも知性がある妖精——大妖精。

「ち、チルノちゃん!? この人達って異変解決者の人達だよっ!? 多分、この紅い霧の異変を解決しに行っているんだから邪魔しない方が良いよ!?!」

「心配いらぬわ大ちゃん! 今日のアタイはすっごく調子が良いのっ! 異変解決者だか知らないけど、サイキョーはアタイなんだからっ!」

無自覚で挑発的な言葉を言っていたチルノだが——異変解決者組はというと——

「最初はグツ、ジャンケンポン。あいこでショツ。あいこでショツ——」

——何故かジャンケンをしていた。チルノの言葉は全く気にする素振りは見せなく、二人はジャンケンをし続けている。

当然、精神面はまだ子供なチルノは二人の自分への態度を見て憤怒。

「コラーツ!! アタイを無視するなっ!」

両腕を上下に振りながら訴えていた彼女だったが……ようやく、ジャンケンで異変解決者組は決着がついたようだ。結果は——

「じゃ、魔理沙。妖精の相手をよろしくね」

「畜生……あの時パーを出していたら……」

どうやら霊夢の勝利で収まり、魔理沙は渋々といった形でチルノの正面に立つ。ジャンケンの内容は「負けた方が面倒事を引き受ける」ということで、ジャンケンの勝者である霊夢は先に進める権利を得た。

そこに——飛翔して霊夢達に近寄る人物が一人。普段の姿と格好が違い、表通部分としてまとめた後ろ髪、眼鏡を目元に掛けている男。その人物——封結が現状を把握するように魔理沙に話し掛けた。

「戦闘する気満々のチルノと控えめな大妖精がいて……。それで魔理沙が迎え撃つようにやっているということは……。次は魔理沙の番か」

「不服ながらも。いっそ、向こうは二人みたいだから二対二で封結もいて構わないんだぜ？」

「相手の戦闘意欲によるな。それで……。大妖精はどうしたい？」

「え、えっと、私は——」

友達なので、申し訳ないですが二対二に——そう言おうとした大妖精だが……。霊夢が彼女に視線を送り続けていた。そして大妖精にとっては霊夢の視線の意味はこう捉えていた。

【手間を掛けさせないでくれるかしら……？】

気のせいだろうか、大妖精は身震いして首を横に振った後に答える。

「……異変を解決する人達の邪魔をしてはいけないので、私は控えさせてもらいます
……」

「大ちゃんは優しいからね……。大丈夫よっ！ アタイ一人でも問題ないわ！」

友人が戦闘をしないと意思表示したのだが、チルノも友達思いなのか彼女の言葉を承諾。一人でもやる気に満ちあふれていた。

大妖精の言葉を聞いた霊夢は魔理沙に勝ち誇るようにして、封結の手を掴みながら言う。

「相手は一人みたいだから魔理沙だけで十分ね。私は封結と一緒に元凶をしばきに行くからよろしく♪」

「……上等だ！ こいつをさっさと片付けてお前達に追いつくからな！」

「その勢いで倒しちやいなさい。封結、行くわよ。どうせ道中で妖精はわんさか攻撃し

てくるんだろうし、働いて貰うんだから」

「……俺、これでも一戦やってきたばかりなんだけどな。それで、魔理沙——」
普段、ぶつきらぼうな言葉を主体にする封結だが——応援の声を。

「——頑張れ」

「……頑張るっ！」

その言葉を最後に、霊夢と封結は先に進んでいった。その二人の行動にチルノは止めようとしたが——

「！ ちょっと待ちなさい——！」

「悪いがもう弾幕ごっこは始まっているんだぜっ！」

魔理沙はすかさず弾幕を放った。反応できず、彼女は被弾。

「イタツ!？」

「あいつらを追うなら私を倒してからにすればいい。最も——私がお前を倒してあいつらを追いかけるけどなっ！」

「じょーとーよ！ アタイを舐めない事ねっ！」

普通の魔法使いと、氷の妖精による弾幕ごっこが始まった……。

魔理沙とチルノの弾幕ごっこが始まり……チルノは無我夢中で冷気で凍らせた弾幕を放つ。攻撃を放たれている魔理沙はというと――

「そんな見え見えな弾幕じゃ私は喰らわないぜっ!」

箒で空中を駆け抜けるように、素早い動きでチルノを翻弄。それでもなお彼女は手から弾幕を放ち、チルノに被弾させる。

「ッ!? どーして当たらないのよーっ!」

「所詮ただの妖精だ。普通の弾幕を放っている時点で私には当たらないぜ……しっかし、封結の作った箒使いやすいな……」

「【冬】にはこの間勝ったもん! だからアンタだつて簡単に倒せるはずなのよっ!」

「甘過ぎるぜ。断言してやっていい。その時の封結は本気を出してない」

「むうっ! だつたら――氷符【アイシクルフォール】!」

チルノはスペルカードを取り出し宣言。魔理沙の両側面から氷の弾幕が、正面からも弾幕が放たれてくる。

魔理沙は躲しながらも、感心したように言う。

「何だ。やれば出来るじゃないか」

「【冬】の言う通りに、正面からの弾幕を加えたわ！　これでまた一步サイキョーになっているんだからっ！」

「（……側面だけで正面の弾幕が無かったのか。確かに正面の弾幕が無かったら正面が安置だっただろうなあ……。封結のやつ、見た目結梨華に似た幼い外見の奴に結構優しいところがあるんだよな……）」

欠点を直させた友人を少し溜息を感じているようだった魔理沙だったが……それでも彼女は躲し続ける。それを見てチルノは弾幕を放ち続けるが、あまり効果はなく……スペルブレイク。

「ほらほら、攻略しちまったぜ？　さっさと降伏した方が良いんじゃないか？」

「まだまだ、よゆうよ！　凍符【パーフェクトフリーズ】！」

すぐさまチルノは新しいスペルカードを宣言。彼女は手を構えると、色とりどりの弾幕を広範囲に放つ。それを魔理沙は平然と躲し続けているが——疑念が生まれてくる。

「（……？　ただ弾幕を乱発するスペル？　こんなの大したことは——）」

「これで当たっちゃえーっ！」

チルノがそう言ったとき——弾幕がその場で凍りついて、止まった。急なことで魔理沙は急ブレーキして方向転換。

「おおっ!?　止まった!？」

「逃がさないっ」

そしてチルノの手元から違う弾幕が放たれ、躲しているときに——止まって凍りついていた弾幕も動き出す！

「こりや他の妖精と違うと言うしかないな……！　面白いスペルじゃねえかつ！」

「何でそれでも避けられるのよーっ!?!」

悔しがっているチルノだが、実際魔理沙は内心驚いていた。弾幕が急に止まっては動き出す。それで別の弾幕まで襲ってきているのだ。それでも、彼女は躲し続けながらもチルノに弾幕を当て続けていると——スペルブレイク。

「ふいー……。今のは少し焦ったぜ。だが、これで——」

「まだよっ！　雪符【ダイヤモンドブリザード】！」

まだ彼女は諦めが悪いみたく、次のスペルカードを宣言した。弾幕の速度は先ほどと比べて遅いが、量はそれなりになる。

そして魔理沙はしびれを切らしたのか——

「いい加減しつこいぜっ！　【イリユージョンレーザー】！」

彼女は先ほど放っていた弾幕とは違い、白色の質量のあるレーザーを放ち始めた。今まで放っていた弾幕と比べると攻撃力が高く、彼女はチルノのスペルを躲しながら被弾を続けさせ——

「うっ——（ピチューン）」

——スペルブレイク。そして魔理沙の最後の通常弾幕が偶然にも額に当たった所為か、倒れて気絶。離れて見守っていた大妖精が駆けつけた。

「ち、チルノちゃん!? 大丈夫!？」

「心配ないだろ。そいつも妖精なんだ。一定時間経ちや目覚める。それと……お前は霧の影響は大丈夫なのか？ 封結の推測曰く、妖精とか妖怪が活性化しているみたいなんだが……」

魔理沙は霧の影響について大妖精に尋ねると、彼女は首を一先ず縦に振って肯定。

「確かに……調子が良いとか、そういう感じはします。でも、私はあまり戦う事が好きじゃなくて……」

「（……妖精にしては何か賢い気がするぜ……）そうか。じゃあ私は霊夢と封結を追いかける事にするぜ。そいつ……チルノだったか？ 看病してやってくれ」

「は、はい……」

魔理沙はこの場を大妖精に任せ、霊夢と封結を追った……。

九話 『紅い館の門番』

魔理沙がチルノと弾幕ごっこをしている時。霊夢と封結は攻撃してくる妖精を撃退しながら進んでいた。

そして、霊夢が今の状況を見て呟く。

「……多分、そろそろ元凶に近づいているのかしら……？ 妖精が頻繁に来るようになったし、何か来るかもね」

「安定の『霊夢リーダー』か。勘で呟いた事は大抵本当になると言われている」

「人の勘をあんた何だと思っているのよ……？」

「だってお前の勘は一種の予言と言って良い。それとも何だ？ 【運命を勘で決める程度の能力】じゃないのか？」

「何その能力怖い」

他愛のない会話をしながら進んでいく二人。

そして……霊夢が控えめに、封結に話題を振ろうとした時――

「ねえ……封結。あんたは――」

『やっぱり、博麗の巫女が来ましたか！　ですが——ここからは通行止めですよ！』

——帽子に『龍』という文字があり、外界で言うチャイナ服を着た女性。両耳の傍には黒いリボンで留められている三つ編みにしている女性が、森の中を移動している霊夢達立ちふさがった。

当本人の霊夢はというと——

「人が話している最中に割り込んでくるなっ！」

怒りを含めた声でありつたけのアミュレットをその女性に投げつけた。投げつけられていた女性は戸惑うばかり。

「ちよっ!?　痛い!?　痛いですって!?　不意打ちにも程がありますよ!」

「あなたの登場が不意打ちよ!　空気を読みなさい!」

「むしろ私の方が読みましたよ!　ここで博麗の巫女が来たら私は止めなくてはいけないんですから!」

負けずとその中華風の女性も弾幕を放つ。円球状の弾幕だったり、ばらつきのある円球の弾幕だったり。しかし、霊夢は空中を泳ぐように躲しながらアミュレットを投げ続

ける。

……一方、封結はというと。

「……休憩するか」

二人の弾幕ごっこに被害が及ばないよう、離れて傍観していた。

そして、中華風の女性は攻撃を受け続けてか、場の空気を変えるようにスペルカードを取り出して宣言。

「華符【芳華絢爛】！」

そう宣言すると、一定の弾幕の後に、縫われるような弾幕が放たれている。弾幕の並びも綺麗で封結は感心するようになっていたが、霊夢はというと――

「邪魔っ！」

細かい動き、または少し大きな動作でひよいひよいと彼女は躲しながらアミュレットを投げ続ける。中華風の女性も当てるように放つが当たらず――スペルブレイク。

「くっ……背水の陣ですね……！」

そうして、中華風の女性は撤退。撤退していく彼女を見て、霊夢は呟く。

「あんた一人で陣じゃないでしょうに……」

どうやら彼女の言葉に疑問を持っていたようだ。それとは別に封結は近づき、霊夢に行動を促す。

「……『博麗の巫女が来たら止めなくてはいけない』……これから考えることは、異変に荷担している人物と見て問題なさそうだ。霊夢、今の女に着いていくぞ」

「……そうね。そうしましょ」

「それと霊夢……さつき何を言いかけたんだ——」

「言う気が失せたわ。さつきと行くわよ」

「……そうかい」

霊夢は一步先に中華風の女性を追い始めた。溜息をしながらも、封結も着いていく。そして、襲いかかる妖精を二人で倒していき——目の前に紅い洋館が広がった。その前の門に、構えながらも困ったように言う中華風の女性。

「ちよっ!? 着いてこないでくださいよ!」

「道案内ありがとー。ってかあんたのその行動は着いてきてくださいって言っているよ
うなものじゃない」

「あら、私についてきてもこっちには何もありませんよ?」

霊夢の言葉に平然と応える中華風の女性だったが、封結が追い打ちの言葉を。それに
霊夢も荷担。

「お前さつき『博麗の巫女が来たら止めなくては』云々の事を言っていたじゃないか?
明らかに異変の関係者だろ」

「封結の言う通りよ。それに何もないとところに逃げないでしょ？」

「うーん……逃げるときは逃げると思うんですけど……それより、男のあなたは誰ですか？」

自分なりの言い訳を展開していたところで、中華風の女性は封結に話し掛けた。彼は機嫌の悪いように言葉を返す。

「お宅らが異変を起こした所為で巻き込まれたんだよ。今日はまともに店が出来ないじゃないか。どうしてくれる？」

「あ……それについてはすみませんとしか言いようがありません」
「おい」

軽い彼の怒りの言葉を聞いて彼女は気まずそうにしているが、霊夢は尤もな事を切り出し始めた。

「ちなみにあなた、何者？」

「えー？ 普通の人ですよ」

「さつきあなた私達の進行を邪魔したでしょ？」

「それはあなたが先に攻撃してきたからです。攻撃されたら普通のことだと思いますよ？」

「あんたが普通以外なのよ。私は巫女をしている普通の人よ」

「普通の巫女は人の店にたかりに来ない」

「霊夢の言葉にツツコム封結。しかし、霊夢は気にする様子は見せないで言葉を返えす。」

「普通の店はあるならばらつきのある商品は売らないと思うけど？ あんたはいろんな商品に手をつけすぎなのよ」

「その結果、繁盛しているんだ。俺の商品を霊撃札で買っている奴のセリフじゃない」

「ま、結局結果が良ければ良いと思うけどね」

「……お二人さん、結構仲がよろしいんですね？」

二人の会話に中華風の女性はその事にツツコムと――

「腐れ縁だから（よ）だ」

「（息びったりじやないですか……あ、確か巫女は――）」

心の内にそう思っていた女性だが、ある間違った知識を思い出しながら言う。

「確か……巫女は食べても良い人類だつて言い伝えが――」

「言い伝えるなっ！」

当事者である霊夢の言葉。呆れたように封結はしながら、中華風の女性に話し掛ける。

「結局、後ろの赤い洋館が異変の発端なんだろう？ さつさと解決させろ」

「……通すわけにはいきません。門番である私の役目なんですから！ 紅美鈴、行きま
す！」

態度を変え、拳法のような動きをしながら戦闘態勢をとった中華風の女性——紅美
鈴。それを見た霊夢は前が出る。

「封結はそこで待つてなさい。こいつの巫女の間違った知識は巫女が何とかしないとい
けないわ」

「ああ。任した」

「……何か言いなさいよ。魔理沙みたいに」

封結の態度に不満があるような霊夢。それに察した封結は改めて言葉を。

「霊夢が負けるとは思えないが——頑張れ」

「……ええ。もちろん！」

そうして、博麗霊夢と紅美鈴の弾幕ごっこが始まった……。

封結は手を貸さず傍観。弾幕を放ち続ける赤い洋館の門番である紅美鈴だが……一

向に攻撃が当たる心配がない霊夢に苦戦していた。苦虫を噛み潰したように、美鈴は霊夢に話し掛ける。

「さすが幻想郷の異変解決者と言われる博麗の巫女ですね……！ 攻撃が当たらないです……！」

「あなたの弾幕は空きがありすぎるのよ。封結でも避けられるわ」

「……そういえば、あなたに勝ったとしても、あの男の方も相手をしなければなりませんね……！ でも、あなたを甘くはみません！」

そして美鈴はスペルカードを取り出し、宣言。

「虹符【彩虹の風鈴】！」

そう彼女が宣言すると、規則正しい、順に七色の色鮮やかな弾幕を繰り出してくる。それに対して霊夢は弾幕の空きの道を見つけると、縫うように躲していく。それでもなお、霊夢はアミュレットを投げ続ける。

「スペルカードは使わずにすみそうね。全然避けられるわ」

「くっ……！」

そして霊夢は被弾する事はなく、ずっと躲し続けて弾幕を美鈴に被弾させ続け——スペルブレイク。苦々しい顔をしている美鈴だが、次のスペルカードを宣言。

「彩符【彩雨】！」

宣言し、今度は先ほどの規則正しい弾幕とは違い、七色の弾幕は雨が降るように霊夢へ襲いかかる。

「……ふーん。綺麗じゃない」

何か感心するように言つた霊夢だが……それでも彼女は涼しい顔で避け続けている。彼女を遠くで傍観している封結は呟く。

「……霊夢にそんな攻撃は当たらないだろうな……」

そのような彼の発言に二人は気づかない。美鈴は霊夢に焦点を合わせて弾幕を放ち続けているが……当たる気配を美鈴は感じられない。

「……どうしてそんな涼しい顔で避けられるんですか……!?!」

「勘」

「勘?!? それだけで!?!」

たった一言の言葉に驚きを隠せない美鈴。それでも彼女は奮闘するもの——スperlブレイク。

「まさかここまでの実力とは思いませんでした……!?!」

「いいから終わりにしない? いい加減この霧を何とかしたいんだけど?」

「まだです! そういう事は、このスペルを攻略してからにしてください——彩符【彩光乱舞】!」

彼女がそう宣言すると——彼女は一点にとどまり、先ほどのスペルカードの弾幕と比べて、遙かに量が増えていた。それと同時に、多方向から弾幕が霊夢を襲う。

しかし……当本人の霊夢はというと——

「動かないならちようど良いわね。この弾幕が当てやすいわ——」

霊夢は大きな動きをやめ、必要最低限の動きで弾幕を躲しながら——袖から違う弾幕を放ち始める。

「——【封魔針】」

霊夢の構えた腕から——次々とアミュレットと共に針の弾幕を投げつけた。

その場を動かず、当てることに集中していた美鈴に、次々と針の弾幕を含めた攻撃を喰らい——

「つ、強い——」

その場で美鈴は崩れ落ち——スペルブレイク。自分の勝利を確実に確信した霊夢は、傍観していた封結に声を掛けた。

「ほら封結。さっさと行くわよ」

「そうだな。さっさとこの霧を止めてもらわないと」

封結は霊夢に近づくと同時に、門番である美鈴に声を掛ける。

「門番がやられたら道を譲るのが鉄則だ。進ませて貰うぞ」

「ううく……すみません、お嬢様——」

悔しそうに美鈴は唸るように言っていたが——霊夢と封結の背後に来て、空中から足を着く白黒な人物。場を確認するようにその人物は霊夢達に声を掛けた。

「やつと追いついたぜ。それでこの状況となると……順番的に霊夢が倒したところか?」

「あら、魔理沙じゃない。てつきりあの氷の妖精にやられたかと」

「魔理沙……お前はあの時俺達を庇って死んだはずじゃ——」

「死んでねえし、二人とも酷くないか!? 特に封結! お前、私を応援していたじゃないか!」

「単なる冗談だ。魔理沙がチルノに負けるだなんてそうそう無いと思っていたからな」

「つたく、冗談にしても質が悪いぜ……」

二人の態度に魔理沙は不服を申し立てているが、現状を確認した美鈴は魔理沙を知らなかったように驚愕。

「えっ!?! もう一人いたんですか!?!」

「ん……何だ? この中国を感じさせられる奴は? やっぱり門番か?」

魔理沙の疑問に、霊夢が簡潔に答える。

「そうみたいだけど、私が勝ったからこの洋館に進むのよ。魔理沙も異変解決したいな

ら着いてきなさい。封結も行くわよ！」

「だから魔理沙。お前もさっさと着いてこい。お前達どつちか二人が異変を解決してくれるだけで俺は万々歳なんだからな」

「じゃあ封結は犯人をギリギリまで追い詰めてくれ。私がトドメを刺すからな！」

三人は、赤い洋館——紅魔館へと入って行った……。

「……博麗の巫女はともかく、確かあの白黒の人も確か異変解決者……!? 二人も一緒に行動していただなんて——？ そうなると、あの男の方は……？ もしかすると、咲夜さんが言っていたお店の人なのでしょうか……？」

紅魔館へと入って行った霊夢と魔理沙に封結。三人は攻撃してくるメイド服を着た妖精を撃退し続けていた。そして——道が二つに分かれる。おそらくそのまま上に行く道と、地下に続く道。

二つの道を見て、封結は悩むように言う。

「どっちかが【当たり前】だよな……上へ行くか、下へ行くか。どっちが当たり前なのか……？」

そんな彼に、魔理沙は行動を促すように自分の意見を述べる。

「こういうのは地下に行く方が正解なんだぜ！ 地下に行くほど、敵が強くなるみたいな感じだ！」

「魔理沙は下だと思ふのか……確かに、霖之助が拾ってきた外界の【げえむ】では言う通りに、洞窟の下に潜るほど強くなっていったな……」

「そういうこつた！ だから強い奴、つまりは異変の犯人である実力者は地下にいると私は考えた！ だから封結、一緒に——」

彼女が封結の手を取って行動を促そうとしたところ——先に霊夢が封結の手を取った。そして霊夢は彼に行動を促す。

「上に異変の犯人がいるわ。向かいましょう」

「……一応聞いておこう。どんな根拠で上にいると思ったんだ？」

「勘」

「よし、上に行くこう——」

「いやいやちよつと待てよ封結！ 何で霊夢の何もない根拠の勘で上に行くんだぜ！」

「靈夢の【勘】という言葉だけなのにも関わらず、即決した彼の行動を魔理沙は引き止めようとしたが——彼は、尤もなことを言った。

「だってなあ……靈夢の【勘】だぞ？ 多分、靈夢の判断は間違つてないと思う」

「……私の根拠は何だつたんだぜ……？」

「まあ、もしもという可能性もあるからな。行つた先に犯人がいなかったらそつちに向かうから安心しろ」

「……だけだよ——」

それでも腑に落ちないのか、魔理沙はまだ封結と話をしていたが——靈夢が割り込む。

「だつたらさつさと地下で誰もいなかったとしても、さつきみたく追いかければ良いでしょ？ それで良いじゃない」

「……まさかだと思うが靈夢……お前私に対抗して——」

「さ、封結行くわよ」

「悪いな魔理沙。こつちに犯人がいなかったら駆けつける」

魔理沙の言葉を気にしない靈夢をよそに、彼女に行動を促されるまま封結は靈夢の後に着いていった。

そして、魔理沙は——

「——追いつくからな！ 待ってろよ！」

箒に乗り直して、速いスピードで地下へと向かっていった……。

十話 『図書館の魔女』

魔理沙は地下へと進み、攻撃してくる妖精メイドを倒していき——大きな扉の前に立った。

「……ここが当たりだろ。この先に私の求める物がある」

魔理沙は扉を開き、風景を確認すると——辺り一面に広がる本、本、本……数え切れない本が多数の本棚に納められているのを確認。

「わあ、本がいっぱいだ」

箒で飛翔して周りを確認するも、本ばかり。中には魔理沙が興味を持つような本——魔導書関連の本もあった。未知の知識がここに多数あるとわかり、気分を高揚させていた魔理沙だが——

「(……一先ず、どんな内容かはとりあえず確認するか)」

そう予定を決め、前に進んでいたときに——スーツを着た、背中と頭に悪魔の翼が生えている女性が現れたのだが——

「侵入者ですかっ?! ここは通しません——」

「[イリキュジョンレーザー]！」

「こあつ!? いきなり攻撃って——（ピチューン）」

チルノを倒した弾幕で、まともに自己紹介すらできなかった女性はそのまま倒れてしまった。魔理沙はそれを気にせず進む。

「この住人なら問題は無いな。どっちみち霊夢と封結もしばくだろうし」

そう言いながら、魔理沙は近くにあつた本棚に近づき、試しに本を持って軽く確認。ざっとパラパラと捲ってページを見通した後、少し満足したかのように、呟くように言った彼女だが——

「後で、さっくり貰っていい」

『持つてかないでー』

彼女の声に反対するように、聞き覚えのない女性の声が聞こえてきた。魔理沙は本を本棚に戻し、道に出ると——ナイトキャップみたいな帽子に三日月のアクセサリ、もみあげの両方には赤と青のリボンが二つずつ、紫をベースとした服だ。足下を良く見たら浮いているが。

おそらく、彼女が本の持ち主だと魔理沙は理解したが、気にする様子を見せないで言う。

「持ってくぜ」

「ええーと、目の前の黒いのを消極的にやっつけるには……」

「(載ってるのか?)」

薄暗い部屋の中で、魔理沙を倒す方法を本で見つけようとしている少女。無論、魔理沙の思っている通り本に載っている事は怪しいが。

しばらく本を読んでいた少女だが、本から目を離して魔理沙に向かい合うが……悩むように言う。

「うーん、最近、目が悪くなったわ」

「部屋が暗いんじゃないのか? こんな暗い中で本なんか読んでいたら目は悪くなるに決まっているぜ」

「鉄分が足りないのかしら」

「どっちかつーとビタミンAだな」

少し的外れな事を言った少女の言葉を魔理沙は訂正する。そして、確認するように少女は魔理沙に尋ねる。

「あなたはどなの?」

「足りてるぜ、色々とな」

「——じゃあ、頂こうかしら」

「私は栄養満点で美味しいぜ。ただ、癖は強いだろうけどな」

「ええーと、簡単にアクを取り除く調理法は——」

途中の言葉で魔理沙は察した。食べる云々の真意はわからないが——追い出そうと
していることに。そして少女は本を浮かせ、その本は速いスピードで捲られていく。そ
してある事に確信した魔理沙は少女に話し掛けた。

「……やつぱ、魔法使いなのか。そりや当然か。これだけの魔導書があれば」

「ええ。この図書館を管理しているパチュリー・ノーレッジ。どのみちあなたに本を渡
すつもりはないわ」

「ま、それよりも先に元凶を退治してからだな。外の紅い霧を何とかしてもらわないと」
「ふーん。人間がレミィに勝てるとは思えないけど……」

魔理沙の言葉に少女——パチュリーは客観的に、挑発的に言うが——魔理沙は平然と

答える。

「人間を舐めちやいけないぜ？　今の人間は妖怪退治のプロに、それを補佐出来る店主もいるんだぜ？　中々の強者だと思うが」

「……？　妖怪退治のプロは……博麗の巫女の事ね。確かに、異変を起こせば彼女はやってくると思ってた。妖精メイドの伝えで、今いるらしいけど……店主？　異変解決者で店主なんていなかったはずよ？」

パチュリーは聞き覚えの無い単語に疑問を覚えたが……魔理沙は指を二本出しながら注意するように言う。

「二つ、訂正があるぜ。一つは——その店主の手柄は私か霊夢になるんだ。本人はそういう事で有名になるのが嫌らしくてな。それを利用して宣伝すればいいのにと常々思っているんだが。それで二つ目は——妖怪退治のプロは目の前にもう一人いるぜ！　人間の魔法使い、霧雨魔理沙！　さっさと元凶を退治して、霊夢達を追わなきゃならん！　だからさっさと片付けるぜ！」

「……ふん」

そして、二人の「魔法使い」の弾幕ごっこが始まった……。

紅魔館の魔法使いである——パチュリーから四本のレーザー、円球状の弾幕が繰り出される。それに対して魔理沙は先ほどのレーザーの弾幕では無く、ショットに近い弾幕に切り替えた。

「マジックミサイル！」

緑色に近い、連続して放たれる弾幕。それを打ち続けて弾幕を相殺させる。魔理沙の弾幕を見てか、感心するように言う。

「へえ……人間の魔法使いが無属性の魔法をね……」

「そういうお前の円球の弾幕は属性があつたな。火だつたり水だつたり。さぞかし、お前は属性魔法か？」

「ええ、その通りよ。それじゃあスペル宣言でもしましょうか——」

そう言いながらパチュリーは一枚のスペルカードを取り出し、宣言。

「——木符【シルフィホルン】」

そう宣言すると、全域から小さな風の弾幕が魔理沙を襲う。数は多いが、魔理沙は箒での素早く移動し、回避していく。

それを見たパチュリーは少し驚いていたようだった。

「……へえ。中々速いじゃない。おかげで当てにくいわ」

「そりやどうも！ 封結特性の箒だからな！ いつもより凄い動きやすいぜ！」

「（……誰かの名前？ その人物が作った箒……どうしてか、あの箒に【何か】掛けられているわね……？） 一体、どんな箒なのかしら……？」

パチュリーは魔理沙の箒に【何か】の違和感を感じていたが……パチュリーの放った弾幕は魔理沙は避けていく。そして時間が来たのか——スペルブレイク。

「何だ？ 属性魔法を使っている割にはたいしたことないな」

「……じゃあもう少し、強いモノを宣言しようかしらね——」

パチュリーは新しいスペルを宣言。

「——火符【アグニシャイン上級】」

今度は広範囲に、大きな火の弾幕が魔理沙を襲う。数もそれなりにあるので、魔理沙は場合によって速く躲したり、ちよん避けに近い動作をしながら躲していく。

「おまつ!! 箒を燃やすつもりか!？」

「あら？ そんなつもりはなかったんだけど……それは万々歳ね。じゃあ箒を狙うとしまししょうか」

「（やぶ蛇だったーっ!?!）」

軽率な発言に後悔し始める魔理沙。だが、パチュリーは手を休めない。彼女の狙いを

魔理沙ではなく、箒を狙っていく。当然、魔理沙は躲していく。

「せっかく封結が作ってくれた箒を壊させる事はしないぜ！」

魔理沙はやってくる弾幕を躲しながら、彼女も弾幕を放って相殺していく。彼女の弾幕は無属性だが、今回はそれでよかった。仮に魔理沙も属性魔法だったら、パチュリーは魔理沙の弾幕に合わせて弾幕の属性を変えてきただろう。無属性弾幕に優勢な属性はないが、同時に劣勢の属性も無い。魔法の熟練度は総合的には向こうが高いかもしれない。しかし、それは複数の属性の使い分けの結果だ。一つの属性を極めている魔理沙はそれが有利に働くと考えていたからだ。

根気よく、火の弾幕を躲し続け——スペルブレイク。

「ふう……熱いどころか冷や冷やしたぜ……」

「本当にすばしっこいわね……あなた、ネズミか何か？」

「ネズミより龍の方が良いぜ」

「はいはい。戯言はそれまでで——ここから、舐めない事ね。属性魔法の真髄をみせてあげる」

「(……流されちゃったぜ)」

魔理沙の言葉を打ち切り——パチュリーは次のスペルを宣言すると——

「木&火符「フォレストブレイズ」」

彼女が宣言したと同時に——小さな風の弾幕、大きな火の弾幕が魔理沙に襲いかかる

！

魔理沙は驚愕しながらも、必死に回避を続けながら声をあげた。

「!? さっきの二種類のスペルを複合せたスペル!？」

「そうよ。単発の属性魔法だけだと思ってた？ 私は七つの属性魔法が使えるのよ」

「七つ……!？」

「そう。これらの属性魔法は単発でも行使する事が出来る。でも——私はそれぞれの属性を合わせる事が出来るのよ。その内の七つの二つの属性魔法。さらにはこれ以上の複数の属性を組み合わせる事も可能よ」

「……私、無属性以外も極めた方が良いのか……?」

「(……まあ、喘息や貧血のおかげで唱えきれないものもあるけどね……)」

魔法に関しては腕があるパチュリーだが——肉体を動かす事は苦手としている。本来、自分の足で移動したり、魔理沙の弾幕を避ければいいのだが……彼女は魔法で体を動かしている。運動能力を自身の魔法でカバーしているのだ。

しかし、魔理沙は冷静に避けながら考える。

「慌てるな私。これはさっきの二種類を合わせた弾幕だ。しっかりと観察し続けなければグレイズ出来る……！」

魔理沙は懸命に弾幕をグレイズしていく。先ほどの二つのスペルカードを思い浮かべながら、しっかりと。パチュリーに弾幕を放つことも忘れない。

そしてその行動が結びついたのか——スペルブレイクすることに成功した。パチュリーは少し咳き込みながら、魔理沙に話し掛けた。

「コホッ……伊達に異変解決者を名乗っているわけじゃないのね……」

「そりゃな。そうじゃないと異変解決業は名乗れないぜ」

「……私達は退治されるわけにはいかないのよ……！ だから次で落ちなさい——」

再びパチュリーは新しいスペルカードを構え、宣言。

「——土&金符【エメラルドメガリス】！」

再び属性を複合させたスペルを唱え——質量感がある多くの円球状の弾幕が魔理沙に襲いかかる。それと同時にパチュリーから大きな弾幕も一緒に放たれる！

次々と弾幕が魔理沙に襲いかかるのを見て……パチュリーは勝利を得たと思ってい

たが——

「(……勝った——)」

「——魔符【スターダストレヴァリエ】！」

——魔理沙のスペル宣言が図書館内に響いた。彼女の宣言と同時に、彼女の周りに大きな星形の弾幕が広がり——パチュリーの弾幕を次々と飲み込んでいく！

「!? まさか……スペルカード!? それに弾幕の密度がかなりある……!?!」

「やれやれ……スペルカードは温存しておきたかったんだけどなあ……。異変の元凶に。でも……しよがないか。そうじゃないときつかった」

徐々に魔理沙の姿が確認されていく。彼女は誇るように、言葉が続ける。

「パチュリーは確かに強いさ。でも——弾幕はパワーだぜ! いくらたくさんの属性を極めたって、それにパワーがなかったらしようがないぜ!」

そして魔理沙の弾幕はパチュリーに飲み込んでいき——決着が着いた……。

弾幕ごっこは魔理沙の勝利で終わり、満身創痕なパチュリー。だが、魔理沙は腑に落ちないようでも話し掛ける。

「魔法が本当に得意ようだな。まだ、隠しもってんじゃないのか？」

「しくしく、貧血でスペルが唱えきれないの」

「(……鉄分も足りなかったのか)」

意外すぎて、しょうもない理由に魔理沙は少し呆れている様子の魔理沙だった。

その中、その図書館内で——さらに地下に続く道を魔理沙は見つけた。そして魔理沙は確信したようにこう思った。

「(やつぱ地下に近づく程強くなるパターンじゃないか！ まあ、それなりの実力者なんだろうな。異変の元凶は。一先ずは——私が一番乗りで退治するか！)」

方針を決め、魔理沙はその地下へ続く道に行こうとしたが——焦りのある声でパチュリーは引き止めようとする。

「！ 待ちなさい！ 地下に行っては行けないわ！」

「ん？ どうしてダメなんだぜ——ははくん？ どうやらこの先に異変を起こした元凶がいるんだな？ それでお前は守っていたと……」

「そういうのじゃなくて、そっちには——」

「ま、何を言われようともこの先を進むだけだぜ！」

パチュリーの話を聞かず、魔理沙は地下へと進んでいった……。

「——ゴホッ。少し……やばいかもしれないわ……調子が良くないみたいだし、妹様を止められるかどうか……」

十一話 『紅魔のメイド、その主』

魔理沙がパチュリーと戦い始めた頃。霊夢と封結は妖精メイドを倒しながら進んでいく。

霊夢はアミュレットと「封魔針」で退治しているが——そして一方、封結は球状の弾幕の他に六芒星の絵柄が描かれている御札を投げつけていた。御札が張り付いた妖精は、弾幕の攻撃が出来なくなつて焦っていたが。霊夢は封結の投げた御札を見てか、少し呆れたように言う。

「……やつぱ、あんた特性の御札も持つてきてたのね。あんたの能力が掛けられている御札を」

「二応、他にもあるけどな。後はお前が常に店に持つてくる——」

『あー、お掃除が進まない——お嬢様に怒られるじゃないの!』

封結が話している途中で——カチューシャを着けた、清楚な服を着ている女性が言葉と共に一瞬で現れた。霊夢達の目の前に来るのと同時に多数のナイフが霊夢達に投げつけられる！

「！こいつ今一瞬で!？」

「霊夢！一先ず俺の後ろに隠れろ！」

封結は珍しく驚いた霊夢に行動を促して、「刀」を鞘のまままで防御。器用に投げられてくるナイフをさばいていく。円球状の弾幕を八卦ローラーから出したりなど、目の前にいた女性の攻撃を躲していた。

そして、封結と霊夢を攻撃した女性は——スペルカードを宣言。

「——奇術【ミスディレクション】」

彼女が宣言すると、多数のナイフを投げたのだが——直後、瞬間移動をしたかのように別の位置に移動している。そして彼女はさらにナイフによる連撃。無論、攻撃を捌き続けている封結は驚愕。

「!? 何だ!? 一種の魔法か!？」

「そんな事より封結、攻撃が来ているわよ！」

「わかってる——」

封結は落ち着き——剣を振るう！

「——【コネクトスラッシュ】！」

彼が刀を振るうと——斬撃が出現し、後に結ばれるように同じ斬撃の弾幕が最初の斬撃の弾幕を追う。そして距離がドンドンと縮まり——大きな斬撃へと変わり、ナイフをはじいていく。

「！ 斬撃の弾幕が後の弾幕で、後押しされるように大きく……!?!」

ナイフを投げていた少女は再びその場から消え、違う場所に出現する。それを繰り返して、スペルブレイクさせる事には成功したのだが……封結はゆっくり視線を向けた時——改めて見て、封結はその少女に見覚えがあった事を思い出した。

「お前は……あの時の客!?!」

「……客? そういえば、その眼鏡と、紐で縛られた後ろ髪——もしかして、あそこの店の店主さんかしら? 全然服装が違うけど……?」

「……は? 何? 封結、知り合いだっただけ?」

彼の言葉に、ナイフを投げた少女は思い出した様子は反応をしたのに対し、霊夢はわからない。だから彼女は彼に問いかけた。霊夢の様子に察した封結は説明。

「ああ。前に店にちゃんとした客として来てな。それで今わかることは——異変の関係者だった事だな。結梨華が言った【複数の妖怪のにおい】、【吸血鬼のにおい】……おそらく側近か何かだったんだろう。異変を起こす前に人里の下調べついでに俺の店に来

たんだろうな」

「……あなたのお店で博麗神社の御札があるって事は、博麗の巫女と関係があるってのはわかったけど……二人して紅魔館に来たの？ それとも……隣にいる博麗の巫女の従者とか？」

「いや、そうではなく——」

「そうよ。封結は私の従者。間違っていないわ」

「おいコラ霊夢？ 何でつち上げているんだ？」

メイド服を着た少女の疑問に否定しかけていたところで、霊夢が話に割り込み肯定した。当然、そのような事実は無い封結はツツコミを入れたが……霊夢は話を続けた。

「あんた、人里じゃ私の使いつて事になっているのよ？ 博麗の御札があんたの店にある。それに封結は私の神社にも来るじゃない。そして私もあんたの店に良く行く。人里の人達はあんたの店を博麗神社の分社とも捉えられているんだから」

「おかしいな……そのような事実は一度も聞いたことがないんだが……う？」

「八割嘘だもの」

「おいっ!?! どこか二割本当なのか!?!」

「(……) 案外、博麗神社の分社ってのは間違っていないなかったのね……)」

二人は他愛のない会話をした後、霊夢は封結に確認するように本題に移した。

「それで……この異変の発端者は【吸血鬼】なのね？」

「ああ。結梨華が判断したからそうだ」

「——待ちなさい。どうして吸血鬼だと言うのかしら？ この霧だけでは判断できないとパチユリー様は言っていたのよ？ それにそのお店の少女はお嬢様を見てもいないはず……」

目の前にいる少女が二人の会話に割り込んだ。その事に封結は答える。

「何、ウチの居候はそういう事がわかるんだ。しようがないだろう？」

「……どういう原理でわかったのよ……？」

「——ああー、成程ね。吸血鬼って確か日光が厳禁だったわね。それで太陽を覆い隠すためにこの霧を出したわけね……じゃ、その吸血鬼とやらをしばきに行ってくださいませか」

簡単な推理をした霊夢は、封結を置いて先に進むとするが——当然、異変関係者の少女は止めに掛かる。

「行かせない……！」

またもや瞬間移動みたいな移動の仕方です少女は霊夢に接近し、適度な距離でナイフを投げつけるものの——霊夢はひよいと躲し、進みながら封結に彼女は言う。

「じゃあ封結ー。足止め頼んだわよー」

「……まあ、わかっていたさ……」

封結は答えるように——黒い六芒星の御札を、異変関係者の少女の先の廊下、壁、天井の上下左右に一枚ずつ投擲し、貼り付ける。

無論、少女は気にしないで霊夢を追いかけようとするが——封結の貼り付けた御札が黒く光り——何かが妨害しているかのように、少女は何もない空間に拒絶されるように反発した。

「!? 追いかけれない……!?」

「そりゃそうだ。そこから先以降を進むのを封じているからな。簡単に言えば一種の结界みたいなものだ」

背後から落ち着いている封結の声。少女はすぐに貼り付けられている御札を剥がそうとしたが……剥がれる気配がない。

「！ なら——」

今度はナイフを片手に持ち、傷つけようとしたがそれでも傷つけることが出来ない。その様子を見て封結は補足するように説明。

「あー、無理無理。その札は一定日数の時間が過ぎるか、俺の手じゃないと剥がせない。簡易的な札だが……足止めには充分すぎる時間だ。お前は霊夢を追いかけられない。

まあ、異変が解決されるまでのんびり待つとしよう」

「……なら、あなたを屈服させる必要があるようね……!」

彼の御札を剥がすことを諦め——改めてナイフを持ち直し、その先を封結へと向ける。相手の戦闘意欲に否定を見せる封結だが——

「おいおい……俺はあくまで異変解決者でもなんでもない、しがない店主なんだが——」
「それならば、何故異変解決者である博麗の巫女と一緒にこの紅魔館まで来たのかしら？ それだけでも異変解決者の関係者だつて事じゃない。それで役目を頼む……足手まといとして扱っているわけじゃなく、頼られているじゃない。普通に見てもあなたは異変解決者の一人と捉えられるわ」

「……やれやれ。俺個人が有名になつてもなあ……。ま、最低限の抵抗はさせてもらおうか」

封結は眼鏡を掛け直し、改めて刀を構える。同様に、少女もナイフを構える。そして彼は——尤もな情報を求める。

「……一応聞きたい。お前の名前は何だ？」

「……人に尋ねる際には自分から名乗るのがマナーじゃない？」

「おつと、これは失礼。俺は名も無き店の店主である封結だ」

「封結、ね……。私は紅魔館のメイド、十六夜咲夜。お嬢様方の為にも——結界みたいなものを外してもらおうわ!」

「俺敵にはさっさと異変解決したいからな。それなりに実力は出させてもらおう！」
そうして、二人の弾幕ごっこが始まった……。

一方、その頃――

「――封結がちゃんと足止めしてくれているみたいね。それで……そろそろ姿を見せてもいいんじゃない――お嬢さん？」

霊夢は突き進み、屋外のテラスまで来た。そしているのを確信しているのか、誰かに行動を促すと――悪魔の翼が生えた、外見はそれなりの少女が霊夢の目の前に現れて言う。

「咲夜はどうしたのかしら？　咲夜の運命が見れないのだけど……」

「咲夜……あのナイフ投げの奴ね。運命だか知らないけど、今頃封結と戦って負けている頃よ」

「私も求める答えとは違うわ。その【ふゆ】だか知らないけど……そいつ、何か私の能力に干渉できる能力でも持っているのかしら？」

「あんたの能力はそもそも知らないし、そんな小難しいことは知らないわよ。ずっと考えてなさい」

目の前の悪魔の翼が生えた少女の質問を蹴る霊夢。そして、霊夢は本題に移る。

「それで、結梨華の情報通りだとあんたは吸血鬼らしいわね」

「……そうよ。レミリア・スカーレット。誇り高き吸血鬼よ……で？ 何しに来たのよ？」

自分の種族を明かした少女——レミリア・スカーレット。彼女は霊夢に質問すると、単純に霊夢は答える。

「そうそう、迷惑なの。あんたが」

「短絡ね。しかも理由が分からない」

「とにかく、ここから出ていってくれる？」

「ここは私の城よ？ 出て行くのはあなたただわ」

「この世から出て行ってほしいのよ」

お互いに牽制しながらも、霊夢は怒りを含めた声で彼女に話し続けるが……レミリアはため息をついて、話を切り出した。

「しようがないわね。今、お腹いっぱいだけど……」

「護衛にあのメイドを雇っていたんでしょ？ そんな、箱入りお嬢様なんて一撃よ！」

お互いに弾幕ごっこをすると理解したのだろう。レミリアの身なりと環境を推測してか、挑発してみた声を出す……レミリアはゆっくりと語る。

「咲夜は優秀な掃除係。おかげで首一つ落ちてないわ」

「あんたは強いのか？」

「さあね。あんまり外に出してもらえないの——私が日光に弱いから」

最後の言葉と共に、レミリアから妖力があふれ出し始める。肌で感じた霊夢は少し感心したように言った。

「……中々できるわね」

「こんなにも月が紅いから本気で殺すわよ」

「こんなにも月が紅いのに——」

そして、二人は言葉を交えながら——

「——楽しい夜になりそうね」

「——永い夜になりそうね」

——異変の元凶者と、異変解決者による戦いが始まろうとしていた……。

十二話『それぞれの戦い』

紅魔館のメイド、十六夜咲夜と封結は弾幕ごっこをしていた。咲夜はナイフとクナイに似た弾幕を繰り出す。封結は手のひらからの弾幕を相殺させ、鞘のままの刀でも攻撃を受け流しながらローラーで滑るようにして回避していく。

お互いに、それぞれ疑問に思っていることを言い合う二人。

「ふーん……普通の弾幕とその刀が主体みたいね。それで変わった靴で行動していると……どうして鞘に入ったまま対処しているのか疑問だけど……」

「そちらとしたらどうしてそんなにナイフを持つているんだ？ どこから出してくるのか、かなりの疑問何だが……？」

「乙女にはいろいろと秘密があるものなのよ。詮索するのは男のすることじゃないと思うわ」

「詮索しなければお前——咲夜を無力化できないだろう？ 仕方ない事なんだ」

「よく言うわ。人を結界みたいなので閉じ込めておきながら。あなたと付き合ったら束縛が強そうね」

「さすがに自重するぞ。そもそも俺はそんな病んでいないしな」

軽口を言いながら、それぞれが持つ手段で応戦していく。そして——咲夜はスペルカードを取り出して宣言！

「攻めさせてもらおうわ——幻在【クロックコープス】！」

彼女の宣言と共に、最初は小さな弾幕がまばらに繰り出されていく。封結は単純な弾幕だなど思い、軽く躲そうとしたが——

——彼が気が付いたころには、前方に多量のナイフが配置されている事に遅れて気付いた。

「!? 何っ!?」

封結は即座に対応しようと体を動かし、ナイフはなるべく刀でさばこうとするが……多少、グレイズする。彼にとつては【能力】で被害を被らないようにしているのだが……一定以上の攻撃を喰らうと強制的に解かれてしまう。

先ほどの結界については封結は嘘の内容も含まれていた。本当は一定以上の攻撃でも能力が解かれる。そのような事実を明かせてしまえば、彼女は隙あれば札に攻撃して

結界を解こうとするだろう。少なくとも、封結の役目は足止め。異変解決の補佐だ。そのためにもなるべく結界が攻撃を受けるのは避けたい。

彼は必至に躲していくが、咲夜は攻撃を緩めない。

「次々と行くわよ！」

再び彼女は小さな弾幕を放った後に——またもやいつの間にか多量のナイフが展開される。彼は必至にグレイズしながら攻撃をかわしていこうとする。その際には被弾も重ねられるのだが……まだ、彼の能力は許容範囲内で発動を続けられている。

そして彼は刀に弾幕を込めて——

「[コネクトスラッシュ]！」

先ほどと同じ弾幕を彼は繰り出した。弾幕が続いて繰り出された後に、その後方の弾幕が戦闘の弾幕に追いつき、重なり合って巨大化する。咲夜はその弾幕を冷静に考察し、多少のナイフや弾幕を封結の弾幕とぶつける。威力を弱めた後は彼女は躲していく。

お互いに攻防を続け……時間制限か、咲夜のスペルカードはブレイクした。呼吸を整えながら彼は彼女に疑問を投げつけた。

「……一瞬にしてナイフが出現したぞ？ どういうからくりだ？」

「教えるわけがないでしょう？ 自分の能力を敵に。まあ、ゆつくりと観察しすぎて

……屈服してくれるとありがたいわ」

続けて、咲夜はスペルカードを取出し宣言。

「幻象【ルナクロック】」

彼女は小さな弾幕を繰り出した後に———またもやいつの間にか、封結の目の前にナイフが配置されている。先ほどのスペルカードと違って、はるかに量が増えていた。加え、彼女の位置がさつきとは違い、別な場所へと移動している事実を封結は確認した。

「……一体、どういう仕組みでナイフが出現して、あいつの場所が変わっているんだ……!?!」

封結は攻撃を避けながら考える。どうやったら十六夜咲夜を止められるのか。否、止める方法は頭に浮かんでいるのだが……条件が難しい。

「……とりあえず、一枚は仕込んでおくか……」

彼はいつでも使用できるように、とある紙を腕に仕込んでおく。だが……彼女はその瞬間を見逃さなかった。

「あれは……スペルカード？ だったら———やらせない！」

咲夜は「能力」を使い、一瞬で封結の背後に出現する。彼女はそのままナイフを首元に突きつけようとしたが———

突きつける前に——何かの衝撃波が彼女を一瞬にして吹き飛ばした。

「なっ!?!」

確実に彼女は封結への攻撃圏内に入っていたと思っていた。もし仮に移動するにしても、時間がかかる。彼が動く、回避する時間はなかったはずなのだが……咲夜はよく現状を把握してみると、彼女が封結から離れていた。

無意識のうちにスペルブレイクしてしまい、衝撃についてのダメージはなかった彼女だが、今の事に少し動揺しながら問いかける咲夜。

「!…あなた……一体何をしたの!?!」

「ふう……。仕込んだ瞬間に背後に現れるとか、かなりの驚きだぞ……。ま、今回はそれで良かったけどな……」

彼がいつの間にか持っていた紙が崩れて消えていく。その事に驚いている様子を見せる咲夜だったが……封結は丁寧に言った。

「なにが起こつたのかわからないって顔だな。答えはこれだな——博麗神社っていうよりは霊夢の特製か？ 今のは【霊撃札】だ」

「霊撃札……？」

「相手の距離が近い時、囲まれている時に有効な御札だ。殺傷能力は皆無だが……状況を多少変える事が出来る。特に今みたいに攻められている時はな。相手の距離を離して体勢を立て直す事が出来るアイテムだ。ま、一回の使い捨てだけだな」

霊撃札がなくなつた手元を見ながら封結は言う。「使い捨て」という言葉を聞いてか、咲夜は勝ち誇るように言うが——

「【使い捨て】、ね……だつたらもう見た通り、使えないわね。何回も使われていたらわからなかつたけど……それがもう無くなつた以上は——」

「……話をしよう。博麗の巫女、博麗霊夢はウチの商品をお金ではなく、霊撃札で購入している。本人はそれを通貨として扱っているんだ。尤も、それを受け入れた俺が悪いんだがな……」

「……それが何？」

「話はここからだ。霊夢とかは腐れ縁でな。しょっちゅう商品の代わりに霊撃札を置かれたんだ。それは有り余つてついに商品をして売っているぐらいだ。そこで——」

封結は上着のポケットから、ある紙束を取出し——扇子のように広げながら言う。

「——常に、かなりの枚数でも霊撃札を携帯しているぐらいだ」

「えっ?! 何よその枚数!?!」

「積み重なった結果がこれだ。あまり使う機会は無いかと思つたが……好都合だな。これだけあれば、攻撃が断然躲しやすくなる。時間稼ぎも簡単にできるようになるしな。この優位性を生かしてお前と戦う事にしよう」

咲夜の驚愕をよそに封結はポケットに霊撃札の束を戻し、片手をポケットに入れたまま封結は挑発。

「さあ。さっさと霊撃札を消費させてみるよ。それまでに霊夢がさっさと異変の元凶を退治している頃だろうがな」

勝ち誇るかのように、封結は言っていたが——咲夜のは少しだけ、口角が上がっていた……。

一方。霊夢とレミリアによる弾幕ごっこも同時に行われていた。レミリアはスペルカードを宣言しながら霊夢を攻撃していくが……彼女は躲し続けている。それに伴い、アミュレットを投擲してダメージを与えるのも忘れない。

現在レミリアが宣言しているスペルカード——天罰「スターオブダビデ」の光線、輪に並んだ弾幕を繰り出していたがスペルブレイクさせられて……彼女は新しいスペルカードを宣言していた。

「くっ……冥符【紅色の冥界】！」

早い速度の弾幕が真っ直ぐ放たれる事に加え、ゆつくりと交差を繰り返す弾幕を彼女は放つ。レミリアは一点だけにとどまらず、場所を移動しながら繰り出していた。

それに対して霊夢は機嫌が悪いようにしながら、「封魔針」とは違う弾幕を放とうとしていた。

「いちいち動くのはめんどくさいわね……威力には欠けるけど仕方ないか——【ホーミングアミュレット】！」

彼女は針の弾幕から、アミュレットと同じような弾幕に切り替えた。一見、彼女は常に放っている赤に近い色をしているアミュレットと色が違く、水色のアミュレットを繰

り出し始めた。しかし、赤色のアミュレットとは違い——レミリアを追尾する！

「！ ホーミングの弾幕……！ 威力は少ないとしても、それなりに数があるわね……！」

レミリア自身もなるべく弾幕を繰り出して相殺しながら、弾幕を回避しようとする。だが、異変解決者として長年やってきたおかげか、霊夢に優位性が見える。

お互いに攻防を続け……レミリアのスペルカードがブレイクした。彼女でも優位性を理解しているのか、苦虫を噛み潰したかのように言う。

「……異変解決者って褒めておこうかしら？」

「褒めるより賽銭をよこしなさい」

「嫌よそんなの——咲夜、来るのが遅いわね……それほどのネズミなのかしら……？」

彼女は霊夢の言葉を蹴りながら、自分の従者が来ないことに疑問を覚えていた。その事に霊夢は単純に言う。

「だから言ったでしょ？ あんたの従者は封結に倒されているって」

「それならば何故その【ふゆ】っていうやつはここに来ないのかしら？ 咲夜が処理している可能性もあるわよ……」

「大方あいつの事だから時間稼ぎでもしているのよ。それでなるべく体力を温存しているんでしょ。私に加勢するために」

「……時間、ね……」

霊夢の言った【時間】という言葉に、レミリアは呟いた。その事に疑問を覚えた霊夢は彼女に問いかける。

「……時間がどうかしたのよ?」

「咲夜の能力は優秀なのよ。何故ならば——咲夜は時に干渉できる能力を持っている。普通の人間が咲夜に勝つことは不可能だわ。咲夜は——時間を止めた世界で、自分だけ動くという行動が許されているのだから。中々頑張っているみたいだけど……何時か咲夜はここに駆けつけるでしょう」

誇るように、自分の従者について自慢をしていたレミリアだったが——

「……ふーん——だから何?」

適当な相槌で彼女の言葉を霊夢は流した。あまりにも興味を持って無かった反応というのはレミリア自身は予想外だったのだろう。今度は彼女が霊夢に問いかける。

「……何よその反応は? 逆に通り過ぎとして呆れているって事かしら?」

「どうでも良いわよそんな事。どれだけ凄い能力を持つていたとしても……人間には変わりないでしょ?」

「……咲夜はこの紅魔館の中で唯一の人間。その人間の咲夜は人外の能力を持っているのよ? それを上回る能力は数少ないはずだわ。それとも何? あなたの従者はそれ

を超える能力を持っているっていうの？」

「……封結の能力自体はそれなりに便利な方よ。特に自分に対してはいろいろな対策が出来るし。でも、問題はその相手。戦闘中にどうやって条件を満たすかが課題になるだろうけど——」

霊夢は言葉をそこで区切って、言葉を繋げた。

「——例え人外の能力を持っていようが、その能力が使えなくなったら——それはただの人間よね？」

十三話 『異変はまだ終わらない』

紅魔館のとある廊下。咲夜は封結の持つ霊撃札を確認した後……咲夜は心の中で彼の行動を笑っていた。

「……どうしてわざわざ丁寧にまだストックがある事をバラしたんでしょね？ 私ならバラさないで、いざという時にとっておく。それで何枚持っているか攪乱すべきでしょうに……それをしないで手の内を明かしてきた。余程その道具の力に過信でもしているのかしら……？」

そして咲夜はそれを踏まえ、作戦を考える。

「（もし、また使う様子を見せたのなら私の「時を操る程度の能力」で——あの上着のポケットに紙束をしまった……その時に、使おうとしたタイミングで奪い取って無効化する！）」

彼女は作戦を遂行するために、新しいスペルカードを宣言する。

「これでその御札を消費させてあげるわ——メイド秘技【操りドール】！」

宣言し終わると、彼女の手元から多数のナイフが投擲される。そして、彼女以外の時が止まり——制止されている世界で咲夜は行動し、ナイフを設置。制止している封結を

ナイフで取り囲むようにするのも忘れない。

「そして——時は動き出す」

彼女が能力を自分の意思で、再び時間が動きだし——取り囲んでいたナイフも一齐に動きだし、封結に襲いかかる！

「……大体、予想はついていたさー！」

刀でさばき、手からの弾幕で相殺させ、ローラーでグレイズしながら最小限の負担にとどめる。このスペルカードでのナイフはどうやら壁、床にあたると反射をするみた、彼はその攻撃にも対応していた。

そして、彼は自分の動きに限界が来たのか——ポケットに手を伸ばそうとしているところを彼女は意識した。

「(させないわー)！」

再び彼女は、時を止める。彼女以外の時の進みが止まり……封結はポケットに手を伸ばそうとしているところで止まった。それを確認しながら彼女は歩いて、彼には聞こえていないが話しかけながら、彼のポケットに手を伸ばす。

「……幻想郷の人間にしてはよくやった方だと思っわ。あなたの敗因はやっぱり、手の内を明かしたこと。道具に頼りすぎている……そういう点かしら？」

咲夜は彼の手を伸ばしているポケットに手を伸ばし、そこに入っている紙束をすべて

取り出した。彼女は紙束を自分の目で確認をし始めたが――

「さてとと……使い方はさつき見てたから良いとして――？ 二種類の紙？」

彼女が手元に広げて確認したのは、赤い文字で漢字が連ねられている御札と……疑似結界を張るのに使用した――黒い六芒星が描かれている御札。その御札が一枚紛れ込んでいた。

そして――その内の黒い六芒星の御札が黒く光り出す。

「!? 何、この黒い光!？」

とつさに咲夜は身体の反射で持っていた彼が所有していた霊撃札、六芒星の御札を離して距離をとった。しかし、その光った一枚の六芒星の御札は彼女の右手の甲に張り付く。

彼女の手の甲に張り付いた瞬間――静止していた世界が動き出した。目の前にいる封結の時間も動き出す。彼はポケットに手を入れる動作を中断し、目の前にいた咲夜に反対のポケットから違う紙の種類である――スペルカードを取出し、宣言！

「——結符【結晶流界】！」

彼の宣言と同時に、封結の周りに計八個前後の小さな白と黒の弾幕が出現。その弾幕は咲夜に向かう道中で、同じ色同士の色の弾幕が距離を詰めていくうちに——隣接していた弾幕が結びつくかのようになり、肥大化して襲い掛かる！

「また、さっきのような弾幕のスペルカード版!？」

「驚いている暇があるのならば能力を使うべきだったな！」

「しまっ——」

彼女は封結の言う通りに能力を使おうとしたが……何故か発動できず。そのまま被弾した。そのまま彼女は彼の張っている結界のうちつけられるようにぶつかると、すぐさま地面に散らばっていた一枚の六芒星の御札を手に取り、彼女に接近し——彼女の手の甲にあった御札を剥がし、張り替えた。それと同時に——咲夜の意味がゆっくりと闇に堕ちていく。

「(!?) 急に……意識が……」

そのまま咲夜は意識が沈んでいく。彼女は横になり、意識を失った。

封結は散らばった霊撃札、六芒星の御札を集めてポケットに収めた後、彼女に彼は近寄り謝りの言葉を。

「……手荒かもしれないが、意識を封じさせてもらった。その点についてはすまない。

「先ずは、ちゃんとしたところで寝かせるか……」
彼は彼女を抱き上げ、疑似結界を解いて足を進めた……。

同時刻。紅魔館の主であるレミリア・スカーレットは博麗霊夢の言った事を復唱して問いかけていた。

「……能力を封じられたら？ まさか……お前の従者は呪術の使い手だというの!?!」

「まあ、大体そんな感じね」

彼女の言葉を霊夢は肯定した。レミリアは数秒沈黙したが……否定するように、彼女の言葉を非難した。

「……例え、そのような能力を持っていたとしても人間が咲夜に敵うはずがない。咲夜は【時を操る程度の能力】を持っているのよ？ 能力の優劣ならば咲夜の方が上。さつきお前は『条件を満たせば』と言った。条件を満たさない限り、咲夜が負けるはずないじゃない!」

「……だから?」

「なっ!？」

無関心そうな霊夢の返事。レミリアは彼女の反応に驚きを覚えているが……霊夢は解説をし始める。

「封結はそれなりに頭が回るほうよ。それぐらいの条件なら、初見の相手なら余裕なのよ。封結は言葉で相手を誘導するから」

「……誘導？」

「まあ、あんたの従者の能力を教えてくださいましたから、私の従者の能力も教えておこうかしら」

彼女は言葉をそこで区切り、封結の能力名について切り出した。

「——封結の能力は【結び繋ぐ程度の能力】よ」

「……【結び繋ぐ程度の能力】？」

「そ。命名したのは私だけだね。魔理沙は【封じて結びつかせる程度の能力】って言って、封結自身はよく『封じる』関連で言っているけど……私だとその名前がしっくりと

くるのよね。封結は能力名なんてどうでも良いみたいだけど」

霊夢の言葉をレミリアは聞き返し、補足をつけて言葉を彼女は返す。続けて彼女は言う。

「能力使用の条件としては自分が残した【印】が必要なよ。実際に直接で【印】をつけた方が良いんだけど……紙に【印】を書いて貼り付けるのも効果があるのよ。その分効果が薄くなって早い時間で解けてしまうみたいだけど。まあ……ある事を強く結びつけるためには違う事と結びつかせないといけないけどね」

「……それならば、近づかなければ良い事じゃない。わざわざその【印】を書かれなければ良い事なのだから」

フン、と鼻を鳴らし霊夢の話を一蹴しようとしたレミリアだが、霊夢は気にしないように話を続ける。

「封結は私の何枚もの【霊撃札】と、彼自身の特製の御札を持っている。初めは霊撃札で誘導するでしょうね。『霊撃札はここにある』というアピールをね。それであんたの従者の時を操る能力……結末が見えているわね。あんたならば相手の距離を離すことが出来る御札の束を持っていたら、時を操る能力を持つてどうする?」

「そうね……その札を奪い取るわ。時を止めて、それを無力化する。それが妥当でしょう——」

「はい、封結の能力で【能力が使えない】事に結び付いたわー」

「……………はっ?」

当然な事を言わんばかりに言ったが——霊夢は挑発するかのようレミリアの言葉を否定する。彼女は唐突の言葉で呆然しているが。

答え合わせをするかのように霊夢は言う。

「その霊撃札の束に一枚以上、封結の御札が紛れ込んでいるのよ。念を込めた御札をね。ポケットに無造作に手を入れた場合、能力の仕込みをしているから。それに他者が触ったら……………能力を無事に発動。多分、今頃あんたの従者は能力を封じられて詰んでいる頃よ」

「……………——でも! 何故そう言いきれる!? 実際にそうならない可能性もあるのよ!」

「いえ、なっているわ」

レミリアの言葉を否定し話を続ける霊夢。段々とレミリアに焦りが見えてき、霊夢は言う。

「……………封結とは長年の【腐れ縁】なのよ? これぐらい予想できないでどうするのよ?」

多分、魔理沙も予想できるわね」

「……………くっ! ならばさっさとお前を倒して、その従者も追い出すのみ——」

急ぐように、レミリアはスペルカードを取り出し宣言。

「——呪詛【ブラド・ツエペシユの呪い】！」

彼女の宣言と同時に、最初はナイフに似た弾幕を多方向に繰り出す。ナイフの軌跡を描くように円球状の弾幕が配置され……弾幕と弾幕が交差するようにして霊夢に襲い掛かるが——

「……少しずつだけ……あんたの弾幕に慣れてきたわ」

霊夢は最小限の動きで彼女の弾幕を躲していく。躲している最中にアミュレット、追尾するホーミングアミュレットを放ってダメージを蓄積させるのも忘れない。

彼女の様子を見てか、歯ぎしりをしながらレミリアは思う。

「（甘く見ていた……！ 異変解決者がここまでやるだなんて……！）」

……実際だと、レミリアは「勝つ」事が出来る能力を持っている。彼女の固有の能力——【運命を操る程度の能力】だ。この能力を行使すれば、霊夢の運命を操って【敗北】させ、この異変を達成する事が出来るだろう。

しかし……本来の自身の実力で屈服させなければ意味がない。吸血鬼のプライド——否、彼女のプライドが許さない。

彼女も必死に当てるようにしていたが……制限時間が来たのか、スペルブレイク。だが、彼女はあきらめないで次のスペルカードを宣言した。

「まだよっ！ 紅符【スカーレットシユート】！」

彼女は周りに魔法陣を展開し、前方の五方向に特大の弾幕を放った。後に続くように大小の弾幕が放たれ、霊夢は大きく避けようとしたが――

「痛っ！」

――ようやく、彼女の脇腹に被弾した。一瞬苦痛の表情を浮かべた霊夢を見てか、レミリアは嬉しそうに、挑発するかのように話しかける。

「……ふふふ。やっぱ人間が吸血鬼には敵わないのよ。このままいけば、私が優勢になるわ」

「……あんた、何か勘違いしてない？」

弾幕を被弾してもなお、霊夢は弾幕を避け続けながらレミリアに忠告するような言い方で言葉続ける。

「弾幕ごっこ――スペルカード勝負はあくまで種族間関係なく、平等にするためのものよ。多少はあるかもしれないけど……種族での優劣なんて関係ないわ」

「あら？ 負け惜しみかしら？ 今の私に大きなダメージは与えられていないわよ」
「……はあ。じゃあさっさと使いますか……」

疲れたようにため息をしながら霊夢はある紙——構えながら、そのスペルカード名を宣言した。

「——霊符【夢想封印】！」

博麗霊夢のスペルカード宣言。彼女の言葉に反応するかのように、色がとりどりの特大の大きな円球状の弾幕が八個前後ほど出現した。レミリアの放ったスペルカードの弾幕を呑み込みながら——レミリアに追尾する！

「まさかっ!? ここですペルカード!? しかもかなり大きい……!」

レミリアは追尾してくる特大の弾幕に焦点を当てて、弾幕を相殺しようとしたが……
全ての数は相殺しきれず、残った弾幕が彼女に被弾した。

「がっ……!?!」

攻撃を数回喰らってしまったレミリアでかなりのダメージを負ってしまったが……

気力でその場に体勢を保つ。それと引き換えか偶然か、レミリアのスペルカードはブレイクしてしまったが。霊夢本人としてはこれで勝負が付くと思っていたのか、意外そうに言う。

「……やっぱり、種族としての耐久性と言った方が良いのかしら？ まだ大丈夫なの？」

「紅魔館当主がこんなところでやられるわけにはいかないでしょ！ まだあの子に色々教えなきゃいけないことがあるのに——いい加減このスペルカードで終わりなさい

——「レッドマジック」ッ！」

おそらく、レミリア最後の宣言となるであろうスペルカード。彼女の周りに先ほどとは違う魔方陣を展開。その魔方陣から大きな弾幕がレミリアから霊夢に放たれていった。

「……そろそろ終わりにしましょう。この異変はさっさと解決させるわ」

霊夢は弾幕をグレイズしながら、アミュレット、ホーミングアミュレット、封魔針を使い分けながらレミリアに弾幕によるダメージを蓄積させていく。確実に霊夢は当ててくる攻撃に、レミリアは着々と疲弊していく。

「（……ここで負けたら、あの子の狂気を緩和する事が出来ないのに……！）」

彼女は必死に、霊夢に弾幕を当てようとするが回避されていく。最初とくらべてかするようにはなってきたのだが……決定打にならない。

……そして――

「――そいつー！」

「うっ――!?!」

――霊夢はレミリアに急接近し……レミリアの懐に手を当て、零距离で弾幕を放った。彼女は耐え切れず――スベルブレイクし、レミリアは空中から落ちていった。吸血鬼という種族のおかげか、地面にたたきつけられても意識はあるみたいだ。彼女は疲弊しながら、片膝をついて霊夢を見上げながら悔しげな言葉を。

「……………これが……博麗の巫女……………」

「そうよー。泣く子も黙る博麗の巫女よー。さてとと……あんたが異変の元凶者みたいだから……この異変の紅い霧を止めてもらおうわよ」

「(……もしかして、あの子を落ち着かせる実力もあるから――)」

――ドゴオンツ!!

レミリアがもしもの事を考えていたとき——下の方向から、大きな地響きと共に何か
が壊れるような音が響いた。その急な出来事に驚く霊夢だったが——

「!? 何、このでかい音!? それに下からって——」

「まさか……!? フランが暴れているの!? あの子の暴走はパチエが抑えてくれるはず
……まさか、こんなときに喘息!」

「……下に誰かいるの? それで誰よ——」

霊夢は疑問に思ったことをレミリアに問いかけていたが……彼女は、あることを思い
出す……。

『こういうのは地下に行く方が正解なんだぜ! 地下に行くほど、敵が強くなるみたい
な感じだ!』

『魔理沙は下だと思うのか……確かに、霖之助が拾ってきた外界の【げえむ】では言う通
りに、洞窟の下に潜るほど強くなっていったな……』

『そういうことだ！ だから強い奴、つまりは異変の犯人である実力者は地下にいて私は考えた！』

「——まさか!? 地下に隠し玉がいたの!?!」

「……隠し玉じゃないわ。私はあの子——妹のフランをこの異変に関わらせるつもりはなかった。でも……多分、一定以上の動かさせる何かと会ったみたいね……」

彼女の言ったことをレミリアは否定しながら説明する。霊夢はその何かに心当たりがあった。

「地下には魔理沙が向かっているのに……! 多分、そいつとやっているのね……!」

「……急いだほうが良いわ。こんなときにダメージが重なって動けない私が言えた義理じゃないけど……下手したら、そいつ——壊されるわ」

「……っ!? 理性が無いって言いたいわけ!?!」

「今の場合、無いかもしれない。異変の元凶である私が言うのは悔しいけど——」

レミリアはそこで言葉を区切り——霊夢の目を見ながら頼み込んだ。

「——フランを止めてちょうだいっ！」

十四話 『吸血鬼の妹』

紅魔館の地下。魔理沙は地下へと進みこんでおり、ある人物と対面していた。魔理沙は必至に箒に乗って、濃い弾幕を躲し続けていた。現在、攻撃をし続けている人物こそ

『——アハハハッ！ モット楽シマセテヨ魔理沙ッ！』

「何だよこの強さ……!? 異変の元凶者でもないのに、それなり以上の実力を持ってやがる……! 案外、【強い奴】ってのは間違ってたみたいだな!」

——フランドール・スカーレット。彼女の外見は赤色の服装に白いナイトキャップの帽子。背中には順に七色に輝く宝石みたいな翼。紅魔館当主のレミリア・スカーレットの妹。異変解決者である霧雨魔理沙は「弾幕ごっこ」として呼べるかはわからないが、炎の剣を持って愉しそうに笑う彼女と応戦していた。

戦う事態になったのは、少し前に遡る——

彼女はパチュリーを突破し、地下を進んでいたところ。魔理沙は時折攻撃してくる妖精メイド、もしくは罫かどうかはわからないが……本から放たれる弾幕をグレイズしたり、弾幕をぶつけて相殺していた。

地下に進むにつれ、彼女はある事を不思議がる。

「……地下に進むたびになんで、敵の攻撃が激しいんだ？」

思ったことを口に出して進んでいたが——魔理沙は進むのを止めた。何故かという……魔理沙の目の前には大きな扉が道を遮っていたからだ。

「……この先に異変の元凶が……よし！ さっさと退治して私が解決してやるぜ！」

覇気に満ちた声で、大きな扉を開ける。まず最初に彼女が確認したのは……一人のクマの人形を抱いている少女。

「……誰だお前？ 異変の元凶として考えても、不自然としか考えられないが……？」

その少女は背を後ろにしていたが……誰かの来訪に気付き、振り向く少女。そして、口を開いた。

「……？　だあれ？　あなた？　人に名前を聞かれた時は、喋った人から話すってパチユリーが言ってたけど……」

「ああ、私？　そうだな——博麗霊夢、巫女だぜ」

「……いくらなんでも巫女は無理があると思うわ。何かこの幻想郷っていうの？　巫女は紅白って聞いたことあるけど……あなた、白黒じゃない。言っちゃうけど……フランドールよ、私は。みんなにフランって呼ばれているの」

「バレてちゃしゃあない。私は霧雨魔理沙だぜ。それよりあんた、なにもん？（看護婦の方が良かったか？）」

彼女の嘘を看破し、改めてお互いの情報を交換し合う二人。選択肢を間違ったのか別の答え方をすれば良かったと思つた魔理沙だが、フランドールは話を始める。

「何者と言われても……吸血鬼。それで……私はずっと家に居たわ。あなたがこの家に入つて来た以前にね」

「まだ変わった住民がいたのか……。お前さつきまでどうしていたんだ？」

「ずっと地下で休んでいたわ——495年くらいね」

「いいねえ、私は週休二日だぜ」

種族での寿命の差だと魔理沙は割り切っているのかわからないが、返事をするように言葉を返す。そして地下とはいえど、フランドールも気になる点があったのだろう。そ

の情報をも魔理沙に求めた。

「生きた人間で咲夜以外初めて見たけど……何しに来たの？」

「それか？ 私は異変解決者であつてな。幻想郷の外で広がっている紅い霧を出している奴を退治しに来たんだぜ。ちなみに私以外にも人間が来ているぞ。さつき言った紅白の巫女に、長い髪の毛を纏めている眼鏡の男がな。それで念のために聞きたいんだが……この紅い霧を出したのはお前か？」

「（……私を仲間外れにして何かやっているんだ、アイツ……）」

「……？ どうしたんだぜ？」

急に顔を俯けて表情が見えにくくなったフランソールに魔理沙は声をかけ、返答を求めると彼女は少しだけ顔を上げて、否定。

「……私じゃないよ。多分、魔理沙が言っているのは私のお姉様である、レミリアお姉様よ。多分、アイツがその紅い霧を出しているんだと思う」

「……？ 姉妹で、元凶が姉なのか……。それで妹君。それで……どうして紅くなっている事を知らなかったんだ？ 外に出てみりや一発でわかるだろ。こんな薄暗い部屋にいるよりはさ」

「……私も人間というものが見たくて外に出ようとしたときがあるの」

「そうなのか。良かったじゃないか。ほれほれ、思う存分見るが良い」

彼女の要望通りに魔理沙は自身の存在を強調するが……彼女は【ある事】を申し込んだ。

「一緒に遊んでくれるかしら？」

「いくら出す？」

フランドールの申し込みに、魔理沙は見返りを求めてみる。彼女の返答はシンプル。

「コインいっこ」

「一個じゃ、人命も買えないぜ」

「あなたが、コンティニュー出来ないのさ！」

魔理沙は彼女の申し込みが【弾幕ごっこ】を理解したその時は、フランドールから多

数の弾幕が放たれていた……。

レミリアの妹であるフランドールの弾幕を魔理沙は、箒に乗って飛翔し、弾幕を躲しながら彼女も弾幕をフランドールに繰り出す。しかし、物量でいえばフランドールが大きいらしく、全てを相殺しきれない。相殺しきれなかった弾幕が魔理沙を襲うが……弾幕と弾幕の隙間を見つけてはそこへ移動し、グレイズしながら直撃を避ける。

「中々強いなお前！ これなら私もやりがいがあるつてもんだっ！」

「ありがと！ じゃあ——私からどんどん行くね！」

魔理沙の言葉にフランドールは笑みを浮かべながら……一枚の紙、スペルカードを取り出して宣言。

「禁忌【クランベリートラップ】！」

彼女の宣言と同時に、魔理沙の四方から魔法陣が展開される。前後、左右と順番に円球状の弾幕が放たれ——魔理沙に襲い掛かる！

「前後左右からの弾幕……！ 確かに厄介だが——このぐらい、何ともないぜ！」

素早く状況を確認しながら、魔理沙は攻撃を避けていく、時折当たりそうな弾幕には自身の弾幕を放って相殺を。

「凄——い！ 全然当たらない！」

驚いたように、どこか嬉しそうにフランドールは言う。その様子を見てか、疑問を覚えたのか魔理沙は彼女に問いかけた。

「……？ 最近来たとはいえ弾幕ごっこ、あまりしてないのか？」

「……私とたまに妖精メイドが相手してくれるんだけど——壊レちやウの。妖精だから、すぐ治ルけど——」

魔理沙の問いかけに答えていくフランドールだったが……言葉づかいが段々とおかしくなっていく。それでも彼女は言葉を続ける。

「——才姉様も、咲夜モ、めーりんも、パチュリーム……私ト遊んデクれない。仲間外レニされる。いつも、私は一人ぼっち。ドウして？ 何カ、私悪イ事をシタの？ 悪イ子ナノ？ デモ、魔理沙ハ私ト遊ンデくれル——」

攻撃が止み、スペルブレイク。しかし、彼女の表情は——

「——楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ
 楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ
 楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ
 シイ楽シイ楽シイ楽シイ——」

——悦びに満ちていた。狂ったように言葉を繋ぎ、狂ったような笑顔を浮かべながら。この魔理沙との「弾幕ごっこ」を愉しんでいる。

急な変貌に魔理沙は驚きしかない。正気を確かめるように彼女はフランドールに話しかけるが——

「お、おいつ!? 急にどうしたんだ!?!」

「ジャア、マダマダイクヨ——禁忌「レーヴァーテイン」!」

彼女の言葉が届かない。フランドールは次のスペルを宣言した。そのスペルは炎の剣を模した得物。フランドールはそれを手につかみ——飛翔して魔理沙を斬りにかか

る！

「うおっ!? 危なっ!?」

彼女はすぐに箒を動かし、彼女の斬撃を避け逃げる。しかし、フランドールは笑みを浮かべながら魔理沙に焦点を当てる。

「魔理沙ハ鬼ゴツコヲシタインダネ! 追イツクヨ!」

吸血【鬼】だからというわけではないかもしれないが……フランドールは自身を鬼として、魔理沙を追いかける。接近しては炎の斬撃を、距離が離れている時は弾幕を。魔理沙は必至に避け続けながら、弾幕を放つ。

「イリユージョンレーザー!」

白いレーザーの攻撃力が高い弾幕をフランドールに時折振り向きながら放つ。少ない時間だがフランドールに被弾できているレーザーはあるが……彼女はその事を気にする様子を見せない。

「——アハハハッ! モット楽シマセテヨ魔理沙ッ!」

「何だよこの強さ……!? 異変の元凶者でもないのに、それなり以上の實力を持ってやがる……! 案外、【強い奴】ってのは間違ってたみたいだな!」

ひたすら、彼女の攻撃を避ける。一撃でもまともに受けたら満身創痍に近いだろう。魔理沙は微量なダメージを負わせながら応戦。

そして、相手のキャパシティか、時間がきたのか……炎の剣が消えていく。スペルブレイク。

「危ねー……急変してから容赦がなくなったな。もう魔理沙さんは本気だしちまうぞ？」

「マダマダ楽シメルンダネ！ 次ハ——禁忌「フォーオブアカインド」！」

疲れる様子は見えないまま、フランドールは次のスペルカードを宣言した。瞬間、彼女の体がブレ——彼女が四人に増える！

「おまつ!? 急に四人に増えるとか!?!」

「マダマダ楽シマセテネツ!」

魔理沙の反応を気にすることはなく、四人になったフランドールは各々の弾幕を放ち始める。単純に言えば、密度が四倍。もしくは一対四。現在でも、魔理沙は若干不利だと感じていた。先ほどの「鬼ごっこ」での移動、弾幕の密度を濃くしてフランドールの弾幕に応戦。彼女のスタミナは確実に減っていく。このままいけば、魔理沙は負ける。

「……しようがねえっ！ 本来は異変の元凶に取っておきたかつたんだが……出し惜しみはしないぜ！」

必死に四人の弾幕を躲しながら魔理沙は、正八角形のアイテム——ミニ八卦炉を取出し構え始める。そして——スペルカードを取り出して宣言！

「——恋符【マスタースパーク】！」

瞬間……彼女の構えたミニ八卦炉から太い、密度が圧倒的に濃い、極太レーザーが一人のフランドールを襲う！

魔理沙は片手をミニ八卦炉を持っている肘を抑えながら、標準を合わせようとする。「このまま一気に片付けさせてもらうぜ！」

二人目、三人目……と続いたときに、四人目のフランドールは現状を把握し、飛び回って回避行動に移す。

そして射撃時間を終えたのか……魔理沙はゆっくりと構えた腕を下ろした。

「……本体にはダメージを与えられなかったか。だが……他の三人は潰した！ それでスペルブレイクだぜ！」

自慢げに言う魔理沙の離れた正面に、フランドールは飛翔を止め……笑みを続けながら新しいスペルカードを宣言。

「禁忌【カゴメカゴメ】！」

彼女の宣言で、周りに円球状の弾幕が配置される。それはかなりの空間に配置され、魔理沙を取り囲むような配置で。弾幕による袋小路の状態に魔理沙はなる。

「！ 弾幕が壁に!？」

「コレナラドウカナ!？」

フランドールは大きな円球状を辺りに放つ。そしてその弾幕が静止している弾幕に当たるとつれ——崩れ落ちるようにして魔理沙を襲いに掛かる！

「ちっ！ 面倒なスペルばっか使いやがって!？」

それでも魔理沙は箒に乗り続け、隙間を見つけて躲す。その繰り返しだ。

その様子を見てかフランドールは……とある行動に移す。

「ヤツパリ、ソノ箒ハ邪魔ダネ……ジャア——壊シチャオッ!？」

「なっ!？」

フランドールは手を構え、その焦点が魔理沙の箒に。そして彼女は広げた手のひらを握りつぶすようにして動かし——叫ぶように言った。

「——ぎゅつとしてドッカーン!？」

.....。

「………何だ？」

「………アレ？ 壊レナイ………？」

——何も起こらない。何かしらのアクションはフランドールは起こしたつもりなのだ。彼女の能力である「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」で。

だが……その疑問は魔理沙は納得する事になる。ふと、後ろから黒い光を感じる。彼女は振り返って箒を改めて確認すると——竹を束ねている箇所隠れるように、封結特性の御札が貼られていた事を。

「（！ これは封結の能力が掛かっている札!? 何時の間にこんなのを——）」

『大事に扱ってくれよ？ まあ、保険も掛けてあるからな』

魔理沙は納得した。彼の言っていた保険の意味を。何かの原因で壊れるであろう箒を、壊れないようにしていた。彼固有の能力で。

「(そうか! 封結はこの箒を「壊れる」ということを封じているんだ! フランはこの箒を何かの手段で壊そうとしていた……まさか封結がこういうことを見通して能力を掛けてくれたのか……!)」

魔理沙は彼の厚意に嬉しい反面……体力に限界が来つつあった。彼女の運動、魔力。そして最後に放ったスペルカード。弾幕はパワーと魔理沙は口癖のように言っているが……その分のスタミナがもうほとんど無くなっていった。

フランドールの動揺で偶然、弾幕で囲うスペルカードはブレイクしていたのだが……それでも彼女は、新しいスペルカードを宣言しようと構え始める。

「壊レナイノハ驚イタケド……マアイイヤ! コノスペルカードデ——禁忌【恋の迷路】!」

彼女が宣言したとき……名前の通り、わずかに空き道がある弾幕を繰り出してくる。しかし……今の彼女にそこまで動くほどのスタミナがなかった。彼女はもう走馬燈のように出来事を振り返って——

「(やばいぜ……もうさっきのスペルカードで体力が……封結、悪かったぜ。せつかく箒

は壊れないようにしてくれたのに——」

『魔理沙っ！ こつちに体を向けろっ！』

——急に聞こえてくる聞き慣れた、男の声。魔理沙はその声した方向に振り向いた時……何かに体が持たれているような感じがした後、目の前に感じる温もり。

魔理沙を正面に抱いてもなお、滑るように移動しながらその人物は迷路の出口へと向かっていく。その人物は魔理沙は確認出来た。その人物こそが、なも無き店の店主である——

「——封結!?! まさか本当に封結なのか!?!」

「それ以外何がある!?! それに言っただろ! 『行った先に犯人がいなかったらそつちに向かうから安心しろ』 ってな!」

「(本当に……来てくれたのか……っ!)」

魔理沙は窮地の場面で約束通り仲間が駆けつけてくれ、安堵が広がる。封結は魔理沙をしつかりと片腕で離れないようにしながら、空いている手で弾幕を放つ。

第三者の登場で、必然的にフランドールは驚き、声をかけたが――

「誰!?! アナタモ遊ビ相手にナツテクレルノ――」

「親切で言っておこう――後方注意だ!」

彼が後方に注意を促し、彼女は彼の言う通りに振り向いてみると……投擲されたナイフがフランドールを襲おうとしている!

「!? コノナイフツテ咲夜ノ――」

「そして――さらに後方注意だ!」

フランドールはナイフを回避していたのだが……死角になった後方から、封結が放った弾幕がフランドールに当たり、彼女はダメージを負う。

「ウツ……!?!」

そして、一定量の弾幕によるダメージを与え続けたのか、制限時間がきたおかげか……スペルブレイク。封結はフランドールから距離をとり、安全な場所に魔理沙を運んで安否を確かめる。

「……一応、無事みたいだな」

「あ、ああ……封結……その、なんだ……約束、守ってくれて、ありがとう――」

彼女が顔を俯けてお礼を言っていたところで——封結の傍に一瞬で現れた人物が一人。カチューシャに、三つ編み。メイド服を着た——十六夜咲夜。彼女は片手にナイフを構えたまま、封結に話し掛ける。

「封結、早く妹様を止めるわよ。まだパチュリー様が万全じゃないみたいだから……私達で時間稼ぎしないと」

「時間を操るのにそれを稼ぐとか……面白い事を言うな。咲夜は」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

「……封結？ 誰だぜそいつ？」

魔理沙から見れば、自分の知らない異性が彼と親しげに話していたら気になるだろう。彼女の疑問に答えるように彼は説明。

「この異変の元凶者の従者である十六夜咲夜だ」

「……………はあっ!? それって敵だろ!? それなのに何でそんな風に話しているんだぜ!?」

「何。今はちよつとした事情があつてな。目の前にいる……元凶者の妹であるフランドール・スカーレットか？ そいつを止める為に咲夜と来たんだ」

「……………訳がわからないぜ……………」

「魔理沙。お前はもう休め。十分役目を果たしてくれたさ。ここからは——俺達任せ

ろ」

魔理沙の頭を撫でるようにして言った後、封結は振り返り咲夜の隣に並ぶ。

「さてとと……目の前にいうるのがフランドールで合っているよな？ 咲夜」

「ええ。合っているわ。そして……私達で妹様の狂気を鎮めないとね……！」

封結は刀を、咲夜はナイフを構え直す。フランドールは最初は戸惑いがあったものの

……悦びへと変わった。

「アハハッ！ 咲夜モ遊ンデクレルンダネ！ ソレデ新シイ玩具モ！ イイヨ！ 一緒

ニ遊ボウ！」

そうして三人は、それぞれの弾幕を放ちあい、戦闘を開始した……。

十五話 『抱く想い、終わりゆく異変』

魔理沙の戦闘を受け継ぎ、フランドールを対峙するのは名も無き店の店主である封結。そしてもう一人は紅魔館のメイドである十六夜咲夜。二人はフランドールの放つ弾幕を各々の行動で回避していた。

「咲夜！ 左に回って攻撃を！ 俺は右に回る！」

「わかったわ！」

封結の指示に咲夜は動き、封結は円球状の弾幕を。咲夜はナイフの投擲を。フランドールは機敏に機敏に動きながら、スペルカードを構えて宣言。

「禁弾【スターボウブレイク】！」

彼女の宣言と同時に、空中から色とりどりな多数の弾幕の出現。それぞれ時間差をつけながら、二人に襲いかかる！

「おっと！ 咲夜！ なるべくは被弾するなよ！」

「極力そうするわ！」

お互いに確認しながら声を出し、回避行動をとりながらフランドールに弾幕を浴びせる。

「ムウ……中々当たらない……！」

当たらないことにしびれを切らしているのか、フランドールは弾幕の量を多くする。その結果、回避が難しいレベルになってしまい、二人の体は彼女の弾幕に被弾するが――何ともないように見える。

「！ 当たってハズナノニ――」

「封結！ 今で接近して！」

「了承した！」

咲夜は時を止め、封結はフランドールの弾幕を八卦ローラーで俊敏に躲しながら――彼女に斬りつけようとする。しかし、フランドールはその場を離れて回避したが……スperlブレイク。

今の被弾した自身の箇所を咲夜は見て、感心したように封結に言う。

「……あなたの能力で外傷がそんな無いわね。一応、まだ能力は続いているわ」

「それは結構。まだ数発は耐えられるとは思いますが……それよりも、早く決着を付けるぞ！」

「……ええ、そうね！」

二人はフランドールの動きに対応していく。一人は誘導、または囷に。そしてもう一人は隙を見つけては攻撃をする。二人の今まで会った時間がかなり少なく、即席の組み

合わせだが……お互いを助けるようなコンビネーションを見せていた。

彼の知る、遠くから回復を図っている腐れ縁の魔理沙は二人の光景に疑問を持つのと同時に……苛立ちが募っていく。

「何なんだよ封結は!? どうして異変側とあそこまで仲良く出来るんだよ!? しかも霊夢じゃない、私の知らない奴と……!」

彼女の疑問については……少し前に遡る。

「——うう……こい、は……?」

小さなうめき声を上げながら、レミリア・スカーレットの従者である——十六夜咲夜は目を覚ました。目を開けると……映った景色は紅い天井。

『お? どうやら気がついたようだな?』

近くに男の声。咲夜はすぐに起き上がり、その声の主を確認すると……この異変を解決する側の一人であり、弾幕ごっこに負けた人物である——名も無き店の店主である封結。彼女はすぐさま警戒し、能力を使おうとしたが……発動できない。

「!? 時が……操れない!」

「……ほお。空間干渉かと思つたが……まさか【時を操る】能力とはたまげた。まあ、今その能力は簡単に言うならば封印させてもらつていな。意識が封じさせてもらつた後、改めて能力を封じさせてもらった」

彼の言葉に、一度右手の甲を見てみると……黒い六芒星の御札が黒い光を放つている。もう、これは彼女の先ほどの経験で体感した。

「……あなたの能力は何かを封じる能力つてわけね……」

「半分ほどはそうだな。もつとも、もう少し強力な封印を施すにはとある事を結びつかせなきゃいけないが……まあ、これは良いか。それよりも……異変は何か出来ないのか? お前の主に頼んでさ?」

会話を切り上げるように、彼としての本題を咲夜に持ちかけた。当然、彼女は否定。

「……出来るわけ無いじゃ無い。私はレミリアお嬢様の従者なのよ? 主の言う事は絶対。それにこの異変は……妹様の為でもあるんだから……」

「……主に妹もいるのか……それで従者……時に我が儘を言っても良いと思うけどな。人間、甘えも必要だと思うが」

「……あなた、私の能力に何にも思わないの?」

「……ん? どうしてだ?」

急な咲夜の問いかけ。彼は彼女に耳を傾ける。

「…………この能力は、以前の間達に化け物扱いにされているのよ？ だって、他の人物が普通の時を過ごしているのに…………私だけがその時に干渉出来る。その気になれば、恐怖を植え付ける事だって…………。この能力を踏まえて、私という存在を受け入れてくれたのがお嬢様。名前も与えてくれて…………私はどんなことがあっても、忠誠を誓ったわ」

「…………まあ、何にも無い人生を送っている奴らに対して畏怖の対象かもしれないが…………俺はそう思わないね」

「…………どうして？」

彼女の言い分の否定。咲夜はその理由を尋ねたが…………彼はこう答えた。

「俺だったらお前が欲しい」

「………………………ええっ!? あ、あなた!? 何を言っているか分かっているの!?!」

第三者から見れば、大胆な告白。まともな好意を受けたことが無かった頬を染めて困惑するばかりだ。

大胆不敵な言葉を言った封結は言葉を続ける。

「だってさ、何処まで出来るかわからないが……その能力があれば、店の商品の幅が広がると思うわけさ。食料保存も出来るのか？ 物の耐久性も維持出来るのか？ そして場合となつちや、急用が入ったときとかに素早く、時間を無駄にしない素晴らしい能力じゃないか！ それに、そんな長い時間を過ごしたわけじゃないが……対人の対応が丁寧という点！ 初めて会ったときからの丁寧な言葉遣いや話しやすさ……これはもう店員として欲しいレベルだったんだよ！ 最近、客それなりに入るようになって忙しくなっているんだ。腐れ縁の常連は手伝いもしないし……本当に最近、店員募集しようか迷っているぐらいだから……」

前者は覇気があるように、後者から悩むように言う封結。普段物事を冷静に対処している彼が熱く語っている話がある。

……同時に、彼女が思っていた事と彼の思っていた事の違いの差に恥ずかしくなったものもあるが。少ずつクールダウンをする。

少なくとも、咲夜の彼のイメージはクールな感じと思いついていたので、少し確かめるように彼に話し掛けた。

「……仮にも、お嬢様よりも先にあなたと会っていた場合……同じ事が言えるのかしら？ 当時の私には生きるのに必死だった。それで……お店をやっているのなら尚更。その時は襲っていたかもしれないわ」

「……生きるのに必死、か……。少なくとも、俺は事情さえ話してくれば……お前の事を受け入れるぞ。先ほども言った通り、店員募集しようか迷っているぐらいだから。その際ならば、衣食住を提供する代わりに働いて貰うからな。多分、もつと早く咲夜と会っていたならばそういう事を俺は言っていたと思うぞ？」

「……変な人。こんな私を受け入れる人間がいるだなんて」

「正直、お前より変な人間と過ごしているからな。人間じゃ無くとも、訳ありの居候看板娘だったり、腐れ縁の常連だったり。そこから言えば、咲夜は随分まともの方だと俺は思うね」

「……そう」

彼の変わった言葉に、少し咲夜は笑みをこぼした。彼女は、彼の言った【もしも】の事を思い浮かべてみる……。

『——品出しはこんな感じで良いのかしら？』

『おう、そんな感じで頼む。それで……昼にするか。結梨華は何が食べたい？』

『美味しいものが食べたいです！』

『……………そうか。咲夜、お前の思う美味しいモノを作ってくれ』

『難しい事を言うわね……まあ、なるようにやってみるわ』

『ああ。頼んだ』

「……………何か、店員と店主というよりは【夫婦】というのがしつくりくるんだけど……あの
お店を手伝っている少女とかの影響で」

「まあ、実質的な店員は結梨華ぐらいだからな。同年代の店員もいないし。結梨華は外
見上本当に子供に見えるしな。一種の家族に見えるかもしれない。だが、ここだけの話
……………結梨華はああ見えて——」

——ドゴオンツ!!

封結が喋っている途中で、下から響く音と振動。急なことに封結は驚いた様子を見せるが……咲夜は、心当たりがあった。

「まさか——妹様が痲癩を!?! パチュリー様はもしかして喘息で対応出来ない……!?!」

「……妹? 明らかにこれは……妖怪の類いか? まだ誰かいたのか?」

「いるも何も……その方はお嬢様の妹君である、フランドール・スカーレット様よ!」

「……下から音がしたという事は……魔理沙が応戦しているかもな……。すぐに向かった方が良いかもしれない……」

彼は考えをまとめている間、咲夜はベッドから降り、彼に詰め寄って行動を促す。

「封結! この御札を剥がしてちょうだい! すぐに妹様を止めに行かないと!」

「……別に、俺はそのフランドールだかどうなっても構わないだけだ……。でも、俺は地下にいるであろう魔理沙が心配つてもある……。仮に、咲夜が応戦しにいったとして……止められるのか? そのフランドールは?」

「……正直、難しいわ。普段はパチュリー様が痲癩を止めてくれるのだけど……もしかしたら持病である喘息で体調が良くないのよ。最悪の場合だと、妹様の狂気がパチュリー様の実力を上回って、そのまま暴れ出すかもしれない……!」

彼女の悩ましい声に、封結は考える。考えた結果として——彼はある事を持ちかけ

た。

「……………なら、俺と一緒に止めにいくか？」

「……………えっ!? あなた、正気なの!? 間違いなく、あなたの特殊な能力でも妹様の方が間違いない実力が上だわ! 正直、私達二人でも厳しいのに……………」

彼の提案に難しい事を告げる咲夜。だが彼は、ある事を咲夜に問いかける。

「……………一応聞いておきたいんだが……………種族は吸血鬼で合っているよな？」

「……………吸血鬼だけど……………何か関係あるの？」

「いや、この刀の封印を解いても良いと考えたんだ……………若干種族に語弊はあれど、吸血【鬼】には変わりはないからな。一応聞きたいんだが……………炒り豆とか苦手か? お前の主は」

「……………確かに苦手だけど……………それがどうかしたのよ？」

「……………その時の場合で考えよう。それと……………咲夜の札は剥がす。だが……………その代わり、俺の違った能力の効果を結びつける」

「……………? あなたの能力は、何かを封じる能力じゃないの？」

彼女の尤もな疑問。現に彼の能力は咲夜の能力を封じているのだ。しかし、彼は首を横に振りながら答える。

「単純で、時間継続が短いならば単なる封印として捉えられるが……………より強く封印する

事で、俺が念を込めた事と結びつかせる事が出来るんだ。それで聞きたいんだが……咲夜は地上戦と空中戦で応戦するのだったら、どっちが得意だ？」

「それは……地上戦の方が良いわね。地上でナイフ投げた方は安定するし」
彼の質問に彼女は答えると……封結はある事を言いながら行動に移した。

「じゃあ、飛翔を封じる代わりに——身体能力の強化に結びつけるぞ」

——彼の施した咲夜へのデメリットとメリット。デメリットというのは言葉の通り、咲夜のある箇所には彼の「印」が描かれている。そして彼の能力により咲夜は飛翔する事が封じられている、

一方、先ほどフランドールの弾幕が体に当たっても平気な顔でいられたのはメリットである——身体能力の底上げに結びつけたのだ。吸血鬼の身体能力は上位だ。それに少しでも追いつかせるために彼は咲夜の飛翔を封じる代わりに、彼女の身体能力を上

げる事に結びつかせた。それが本来の彼の能力であり、博麗霊夢曰くの「結び繋ぐ程度の能力」。何かを封じる代わりに、他の何かを新しく結びつかせる。それが彼の本来の使い方だ。時間が短ければ封印だけにおさめることが出来るのだが、それ以上となると何かに結びつかせなければならぬ。

……使い方によつては、メリットとメリット、デメリットとデメリットの両方を生み出す事もあるが。

飛翔を封じる代わりに、人間以上の身体能力が付加されている咲夜。自身の能力と合わせながらフランドールに対応していた。無論、封結もフランドールに弾幕を撃ち込んでいく。

攻撃が当たっても苦にならない二人を見てか、痺れを切らしたかのように新しいスペルカードを宣言。

「コレデ当たタッチャエー！ 禁弾【カタディオプトリック】！」

彼女の宣言と同時に大きい弾幕が複数形成され、大きい弾幕の後に小さな弾幕が続き、二人に襲いかかる。

咲夜はスペルカードを構え、封結に行動を促した。

「封結！ あなたは私の後方に来て！ スペルカードを宣言するから！」

「わかった！ すぐ向かう！」

彼はすぐさま咲夜の背後へ移動。そして彼女はスペルカードを宣言。

「奇術【エターナルミーク】！」

咲夜は手元を素早く動かしながら、多数の斬撃の弾幕を放つ。その弾幕は丁寧にフランドールの弾幕を相殺し、微量ながらフランドールに被弾させてダメージを与える。吸血鬼としての弾幕の力という観点なら、本来は相殺仕切れなかったかもしれない。だが……彼の能力で飛翔を封じられているが、その分の弾幕の威力、速さが強くなっており対応出来ているのだ。

その結果、何とかフランドールの弾幕を防ぎきり——スペルブレイク。フランドールは咲夜の対応する力に疑問を持ったように話し掛けてくる。

「……咲夜ツテコンナニ強カッタツケ？」

「一時的ですけどね。それでも……まだ、妹様を満足するまでとはいかないようですが」
「……ハハハツ！ ジャアマダマダ遊ベルンダネ！ モットイクヨ——禁弾【過去を刻む時計】！」

愉しむようにフランドールは次のスペルカードを宣言。二人の両脇には十字型の回転した質量のある弾幕を。そして正面にいるフランドールからは膨大な数の円球弾幕を放っていた。

「……このスペルも使うんですか……！ これは、対処が出来ない——」

苦虫を噛み潰したかのように、悔しげな声を上げた咲夜だったが……後方で待機していた封結が前に出て、刀を構え始める。

「咲夜。次は俺の番だ。後方で待機していろ」

「無理よ！ あなた、この弾幕を対処出来るの!？」

「……普通なら、難しいだろうな。ここでスペルカードは使うわけにはいかないし。ならば——この刀の封印を解いて——一か八か、対処するだけだ!」

彼は鞘に貼られている黒い六芒星が描かれた御札を剥がした。

二人は弾幕に囲まれて、姿が見えなくなつた頃——その弾幕達は一瞬にして切り裂かれた。

遠くで見守っていた魔理沙はその光景に驚きしかない。彼の刀に能力を掛けているのは知っていたのだが……何を封印しているのか、知らなかつたのだ。

「おい!! 封結の御札を剥がした瞬間に弾幕が切り裂かれるって……一体何が——」

ふと、魔理沙はフランドールの様子を見ていたのだが——彼女の様子がおかしい。何

かを恐れるように——体が小刻みに震えていた。

「ナ……何ナノソノ嫌ナ劍!? サツキマデ何トモナカツタノニ……!?」

フランドールは警戒した目で、刀を持つ封結に視線を向ける。彼は彼女の怯えている表情を見て、安堵したかのように言葉を繋げた。

「やっぱり、吸血鬼にも有効だったか……。この刀は霖之助がやけに勧めた刀でな。どうして、この刀を俺に押しつけるようにしたのかはわからない。霖之助は『これは君が持つておくべきだ』と言われて、この刀の性質を教えて貰ったらすぐに俺の能力で封印したさ。その封印と結びつかせて『弾幕を斬ることが出来る』にして……ようやく、この刀の本来の力を發揮出来る」

彼はそう言い、刀を改めて構え、刀の名前を言った。

「——封刀『鬼切』。元々は対、鬼の刀だ。鬼の力を凌駕することが出来る——それだけの刀だ」

改めて刀の能力について彼は言った時、咲夜は彼の言葉に納得し始める。

「だからあの時封結は炒り豆が苦手かどうか聞いたのね……!」

「ああ。漢字でまがりなりでも、吸血鬼で『鬼』が入っているからな。もしかしたらこの刀で対処が出来ると思っただ。幸い……効いているみたいだ。この刀は鬼から見たら恐怖の対象らしい。そしてフランドールは……あの様だ」

封結は彼女に視線を向けるも……フランドールは怯え始め、手を構えて弾幕を乱発し始めた。

「ク——来ルナ来ルナーツ!？」

彼女のスペルカードが乱れてきている。規則性が段々と崩れていき、定まらない弾幕が放たれるも——封結は鬼切で弾幕を払う。

「……作った弾幕にも有効みたいだな……こりや良い。予想よりこの鬼切使えるぞ」

次々と封結はフランドールの繰り出した弾幕を無効化していく。そして、フランドールの精神に影響を与えている所為なのか——スペルブレイク。

「さすがに降参しても良いんじゃないか？ この刀を恐れて弾幕の狙いがおろそかになっている。それに加え、この鬼切のおかげでお前の力は俺には干渉出来ない。所有者の特権だな。だからさっさと認める——この刀の封印を解かれた時点でお前の負けは決定している。さっさと気を鎮めろ」

「——！ 嫌ダ！ コウナツタラアナタヲ壊ス！ 秘弾【そして誰もいなくなるか？】——」

フランドールの宣言。彼女は蝙蝠となつて消え——まずは追尾するように、弾幕が蛇が這ってくるように近づいてくる！

「！ 咲夜！ このスペルはもしかして耐久スペルなのか!？」

「そうよ！ このスペルカードをしている間、妹様には攻撃が通らない！ おそらくその刀でもスペルカードの耐久スペルは無理でしょう!？」

「確かに……対象がいらないんじや、防御は出来ても攻撃が出来なくちゃな……! 咲夜は下がれ! どうやらフランドールは俺を狙っているみたいだ! 近くにいと巻き添えを喰らうぞっ!」

「……わかったわ! 気をつけて!」

咲夜は封結の言う通り戦線離脱。彼は追ってくる弾幕を八卦ローラーで俊敏に滑りながら回避していく。回避している途中で——もう一つ、弾幕を追尾する攻撃が現れた。

「ちっ! しっ! い!」

封結は弾幕を斬りながら回避していく。だが、回避しているならば着々とスタミナが減っていくのは必然だ。

そして、追尾してくる弾幕は止んできたのだが……今度は四方からそれぞれ違う繰り出し方の弾幕が封結を襲う!

「……これ、さっさと回避しないと隙間がなくなるのか!？」

封結はスタミナが減っていく中、隙間がある内に弾幕と弾幕の間を縫うように躲す。しかし、次には違う軌道の弾幕が封結を攻撃してくる。

「……ハア、ハア……」

スタミナがドンドン減り、息づかいが荒くなる。彼は人間だ。一般的に見れば運動能力は優れているのかもしれないが、それはあくまで人間の中での話。確実に彼のスピードが遅くなっていく。

『モウソロソロ壊レチャウカナ？ モシコレマダ体が壊レテイナカタラ——壊レルマデオ人形サントシテ遊ンデアゲルネ！』

どこからか響くフランドールの声。どこか嬉しそうな声を響かせながら——彼女は弾幕を放ち続ける。その事に魔理沙は駆けつけようとするが間に合わない。咲夜は能力を使っても、瀬戸際。

そして……反応と体の動きが鈍くなった封結は弾幕に囲まれてしまった。確実に数メートルで当たる時に——

『——夢符【封魔陣】！』

空中から地上にいる封結の背後に舞い降り、スペルカードを地面に貼り付けて結界を展開する人物。その人物は立ち上がった後、誰かを理解しながら封結は背中合わせの状態でその人物へと声をかけた。

「……つたく、良いタイミングで来てくれるよな——博麗の巫女！」

「そこは名前で言いなさいよ封結……せっかく助けてあげたのに、私の名前を呼ばないでいるのはどうかと思うけど？」

「俺は今回の場合、そっちの方がしつくりときたんだけどな……まあ、助かった。霊夢」

「お礼は賽銭箱にお願ひするわ」

「気が向いたら五円は入れてやる」

「一円だけじゃないだけまだマシだけど……まあ、良いわ。それで手打ちにしてあげる」
霊夢が展開した結界でフランドールの弾幕を無効にしていく。そして、時間が来たのか——フランドールのスペルカードはブレイク。蝙蝠が集まるように、その後フランドールは現れたが……霊夢の存在に戸惑うばかり。

「……アナタ誰？ 折角ソイツニ勝テソウダツタノニ……」

「私はただの博麗神社の巫女の博麗霊夢よ。それで……あんたがレプリカだかの妹？」

『レミリアお嬢様よ、博麗の巫女……』

弾幕が止んだのを確認し、封結の傍に現れる十六夜咲夜。彼女は霊夢の言葉を訂正していたが……霊夢は咲夜にある事を告げる。

「あ、そうそう。そのレミリアだかをちゃんと私はしばいたわ。本来ならばそれで異変解決なんですよけど……」

「……!?!? お嬢様が!?!」

『何だ……霊夢が元凶に当たったのか……』

続いてきたのは霧雨魔理沙。彼女の悔しげな言葉を聞いた後、霊夢は声を掛ける。

「魔理沙……あんた、無事だったのね。冗談無しに。下手したら壊されているってレミリアから聞いたけど……」

「確かに危なかったさ。だけどな——封結は私の元に駆けつけてくれたんだ。私を……その……ちゃんと抱き留めながら助けてくれたからなっ!」

「……ふーん……」

魔理沙は一瞬躊躇うように言葉を詰まらせていたが、最後の言葉を強調するように言った。彼女の言葉を聞いた霊夢は封結に冷たい視線を送っている。その事に疑問に思った封結だが——霊夢が彼に早く話し掛けた。

「……封結。あんたには足止めを頼んだわよね? それでこの場にそのメイドがいるってのは気になるけど……それはまあ、おいておくとして。何で私の元に駆けつけなかつ

たのかしら?」

「さすがに地下から大きな音と地響きしたら魔理沙が気になるだろう? それで咲夜から聞いた話だとそれなりに危ない奴と聞いてな。霊夢なら心配無いと思っただ。それに俺の場合は元凶とは会っていなかったし。魔理沙の約束通り、駆けつけたんだ」

「……バカ」

「ん? 何となく貶されたような気がしたんだが……どうかしたか?」

「別に。それよりも……さつきとあいつを止めるわよ」

霊夢、魔理沙、咲夜、封結はフランドールに体の向きを変える。彼女はスペルカードを持っており——宣言。

「QED【495年の波紋】!」

彼女の宣言と同時に、空間のいたる場所から弾幕が発生。その弾幕を中心として、水滴が水面に落ちて広がるように、波紋が広がっていく。

四人はそれぞれ躲しながら、封結は咲夜に声を掛けた。

「咲夜! こいつの狂気を鎮める奴はまだ来ないのか!」

「……実はさつき、時を止めながらあなたを行動している時に……パチュリー様は喘息を発症していたのよ。だから、来れないわ……」

「……………あ」

咲夜の言葉聞いて、魔理沙は気まずそうな声をあげる。その事に疑問を覚えた一人として、霊夢が魔理沙に問いかける。

「魔理沙……どうしたのよ？」

「いやあく……パチュリーは私が倒したから、多分それで来られないかと……」

「……………」

苦笑いしながら言う魔理沙を除く三人の沈黙。弁解するように魔理沙は三人に訴える。

「しよ、しょうがないだろ!? この異変が起きて私は地下に元凶がいると思ってたんだ! その道中で邪魔してくる人物がいたら片付けるのが異変解決者だぜ!」

「じゃあどうやってこいつの狂気だかを鎮め——あ。よくよく考えれば適任がすでにいたじゃない……」

始めは魔理沙に非難の言葉を言おうとしていた霊夢だが……冷静になって打開策を見つけた。その行為が出来る人物——封結に声を掛ける。

「封結。あんたが狂気を封じなさい。あんたしかこの場で鎮める奴はいないわ」

「……俺が封じるのか。それしかないなら仕方ないよな……なら、お前達であいつの行動を制限してくれ! 札をフランドールに貼り付ける!」

「頼んだわよ!」

「任せませ！」

「……妹様を頼むわよ……！」

三人の了承の声。封結は八卦ローラーで弾幕を躲しながらフランドールに接近していく。彼に当たりそうな弾幕は針で相殺されたり、レーザーで相殺されたり、ナイフで相殺されたり。彼女達三人は彼のフォローをしていた。

彼はフランドールに近づいていく中……彼女は警戒し、弾幕の量を増やししながら言う。

「アナタハ近ツケサセナイ……！」

「そう言うな。俺だつてこんな面倒事は嫌なんだ。だから——さつさと、終わらせるんだよ——俺の平穩の為に！」

さらつと願望を言いながら彼は御札をは違う紙——スペルカードを宣言！

「封符ふう【リミツテッドエリア】！」

彼の宣言と同時に、彼を中心に黒い空間が広がっていく。その空間はフランドールも入っていく。そして——フランドールの放っている弾幕が減少していく。

「……!? 弾幕ガ……ドウシテ!？」

「詳しい効果の説明が必要か？ これは攻撃スペルでも何でも無い。制限を付けるだけのスペル。いや、平等にするスペルか？ 俺は現状弾幕を放っていないんでね。弾幕を

打てる数は、俺を基準とする。俺がそれなりに放っていけば同じ数だけ弾幕を放てるが……現在の俺は放っていない。お前の対処は鬼切で十分だからな。そうなれば今は減りつつ——弾幕が無くなるぞ」

「ソナナ……!?!」

「そしてこの鬼切で——お前を斬りかかるぞ!」

八卦ローラーで封結はフランドールに急接近。そのまま彼は大きく振りかぶる。

「——ッ!?!」

鬼切の性質での恐怖からか、フランドールは目を閉じた。そのまま防御態勢をとろうとしたのだが——

「——言葉で騙されすぎ。お前を斬ったらおそらくこの洋館の主と——咲夜に恨まれるっての」

フランドールの背後から聞こえる声。そのまま彼——封結は彼女の首筋に黒い六芒星の御札を貼り付けた。貼り付けた瞬間、六芒星が黒く輝き——

「あ——」

——そのまま、フランドールは意識を失い倒れかけたところを封結が倒れないように抱き留める。彼女を背中に乗せ、歩いて咲夜に近寄り……フランドールを渡した。

「……………これで良いか？　咲夜？」

「……………本当に妹様の狂気を…………?!?　あなたって本当は何者なの…………?!?」

霊夢の頼まれたようにしてフランドールの狂気を鎮めた封結。改めて咲夜は尋ねるものの……………彼はこう答える。

「だから言つたら？　名も無き店の店主である——封結だ」

彼がフランドールの狂気を鎮めたのを咲夜は確認していたころ、霊夢と魔理沙は彼に近寄り話していた。その光景はとて仲の良い光景に見えて——

「(……………つ。何故か、心臓付近が苦しい……………?)」

——何故か仲が良さそうに話す封結の様子を見て、違和感を覚える咲夜だった……。

十六話 『異変の後処理』

フランドールとの戦いを終え。封結は眼鏡を額に掛けて鬼切を再び封印した後、咲夜にとある事を話し掛ける。

「フランドールの狂気を封じたのは良いが……結局、この感じからだと言夢が異変の元凶を退治したって事だろ？ さつさと外の紅い霧を収めてもらいたい。店の経営もこのままじゃ出来ないからな……」

「……それは……そうね。まずはお嬢様を呼ばないといけないわね……」

どこか名残惜しそうに、彼の言葉に同調する咲夜。その二人をよそに、魔理沙は言夢に今回の異変の犯人について話し合っていた。

「そういや、この異変の犯人はフランの姉なんだろう？ どういう奴だったんだ？」

「そのフランっていうの？ 姉妹といっても翼が違ったわね。こっちは七色に対して、向こうは悪魔の翼っていうの？ そういう——」

『——!? まさか……フランの狂気が抑えられている……!?』

『……博麗の巫女はいるっていうのは知っていたけど……他に男？ あれが〔ふゆ〕という異変解決者の一人……？』

扉から聞こえた声。その二人の人物は封結達に近寄っていく。最初にフランドールの狂気について指摘したのは姉であり、異変の当事者でもある——レミリア・スカーレット。

一方、男である封結を見て疑問を抱いているのは図書館を管理している魔女——パチュリー・ノーレッジ。

二人の存在を確認した咲夜は傍に能力で駆け寄り、安否を確かめるかのように話し掛ける。

「お嬢様……パチュリー様……！ お体は大丈夫ですか!？」

「ええ……今となれば、大丈夫よ。それで咲夜……その男に負けたのね」

「……申し訳ありません……」

「……しようがないわ。霊夢の従者は咲夜以上だった。それだけの事よ。これからも精進しなさい」

「……はい」

「へえー？ あの男が博麗の巫女の従者なのね……初めて聞いたけど……」

レミリアから言う情報にパチュリーは興味がありげな視線で封結を見るが……レミリアの言った言葉を封結は戸惑いながら問いかける。

「……ちよつと待て？ 俺が霊夢の従者ってどういうことだ？」

「……え？ だって霊夢、あなたは私の従者って言っていたわよ？ 私との弾幕ごっこの最中何度も」

「いや、俺と霊夢は腐れ縁ではあるが……他人だぞ？ 俺は霊夢とそういう関係じゃない」

「……………えっ」

目を丸くしながら驚いているレミリア。その会話内容に一番引かなかったのは魔理沙だ。彼女は霊夢に少し怒りを込めて問いかける。

「……おい霊夢。何時から封結は霊夢の従者になったんだ？ 封結は否定しているじゃないか……………」

「向こうが従者自慢してくるから封結を借りたわ。従者には従者を、という事でね」

「対抗意識燃やしてどうするんだぜ!？」

当然なように言った霊夢に魔理沙は疑問しか湧かない。

段々と賑やかになっていく中で……少しの間、意識を失っていたフランドールが目を

覚まし始めた。

「——あれ？ 私……眠っちゃったの？」

「妹様……大丈夫なのですか？」

「うん、平気……」

咲夜の背中から降りて、現状を確認するフランドール。そして彼女の首筋に貼つてある御札に目が行ったパチュリーは彼女に問いかける。

「……妹様？ その首筋にある御札は何かしら？」

「え……あ、本当だ……何か貼つてあるけど……取れない……」

フランドールは手で剥がそうとするも剥がれない。その事に当事者である封結は説明する。

「その札は気にしなくていい。その札はお前の悪いモノを閉じ込める札だ。しばらくの間、お前は機嫌を損ねたりすることは無い」

彼の言い回しに察しがついたレミリアは、確認するように問いかける。

「……悪いモノ——狂気のこと？ 霊夢の従者ではない——【ふゆ】かしら？ あなたが

狂気を鎮めたというの？」

「まあ、その——パチュリーだったか？ いつもやっている方法とは違うんだろ？」

「……俺が封じ込めたな」

「……ふうん。それじゃあこの御札を貼っている限り妹様の狂気は封じ込めることが出来るってワケね」

パチュリーーの言った考察に、一瞬レミリアの反応が変わったが……彼はある事を否定する。

「とは言っても、一時しのぎだけだな。これはあくまで【封じた】だけ。実際、封じ込めるのに精一杯だったんだ。俺の封印というのは、定期的にしなければいけない。今回は札を使ってでの封印、それとあの狂気の強さから見て……一日で封印が解かれる。間違いないくな」

「……それじゃあ、あなたが定期的にフランの狂気を封印し続ければ解決ね（霧を通さずとも、この能力でフランは——）」

レミリアは当然のように、封結に声を掛けたのだが——

「は？　何で俺がしないといけないんだ？」

——否定した。レミリアの言葉を疑問に持ちながらの否定。霊夢と魔理沙以外は封結の態度に驚きを隠せない。

その否定した封結に、少し焦りを含むような言葉でレミリアは詰め寄って問いかけた。

「何を言っているのよお前は!!? ここまでの流れだとお前がフランの狂気を何とかしてくれるんじゃないの!?!」

「別に今まで何とか出来ていたんだろ? 俺は仕方なく、咲夜からの情報提供で魔理沙が危ないと思ったから、その副産物として封印しただけだ。それに今まではそのパチュリーが対処していたんだろ?」

彼はパチュリーに視線を向けると、彼女は少し言葉を溜めながらも彼の言葉に答えた。

「……そうね。今までで妹様の狂気が現れることがあった。その際には私が対処していた。でも……あなたの場合、大した苦はなくて対処出来るんじゃないの?」

「対象が静かだったらな。だが言わせて貰うならば——どうでも良い」

興味がなさそうに、どうでも良いと言った封結に魔理沙は察しがついているのか、確かめるように話し掛ける。

「……封結。そう言うとは思っていたが……まさか自分の利益にならないからか?」

「無償労働が一番つまらん。異変に関しては霊夢が解決したわけだし、店もちゃんと経営出来る。こちらは商売して生計を立てているんだ。よそのことまで構っていられるか」

吐き捨てるように言った封結に——レミリアは妖力を漏らし始め、威嚇するように言葉飛ばす。

「……たかが人間如きが私の命令に聞けないってどういうの？ だったら——体でわからせても良いのよ？」

「……………」

封結はレミリアの様子を見て——『鬼切』の封印を再び外した。その瞬間、レミリアの妖力は引っ込み、急に後ずさって体が恐れるかのように震えだした。

……同時にフランドールも怯え始めてしまったが。

すぐに反応したのはレミリア。彼に疑問を投げつけるようにしながら言葉を。

「!? な、何なのよその剣は!? 嫌な気配がするんだけど!？」

「……フランドールに関してとはとばっちりだな。それはすまない。お前に対しては敵意は無いから安心してくれ」

「……………うう」

震えながらも、こくりと頷くフランドール。パチュリーは封結の持っている刀に疑問

しか持たない。

「何の武器なのその剣!? レミイと妹様が剣の札を外したぐらいで怯えるだなんて……!?」

「まあ、訳ありの武器だ。それで……レミリアとか言ったか? 一言二言言わせて貰うぞ——」

彼は、レミリアを視線で射貫きながら言葉を言う。

「——自分の命令通りになると思うな。我が儘の餓鬼が」

冷たい彼の言葉。言い終えたのと同時に封結は再び鬼切を封印する。そのまま翻して帰ろうとしたのだが——咲夜が、彼の袖を掴んで引き止めた。

「……私からもお願いします。どうか、妹様の狂気を……鎮め続けてくれませんか……?」

「……別に、俺じゃ無くても良いだろう? 今までパチュリーで何とかなっていたみたいだし——」

「それでも、私はあなたに『お願い』したいの……」

心配そうに告げる咲夜。その表情を見てか、封結は苦い顔をしながら迷っているような表情を見せる。

その中……今まで黙っていた霊夢がとある事を封結に話し掛けた。

「封結。受けてあげても良いんじゃない？ こうして『お願い』されているわけだし」

「……けどなあ……正直、封印しなくちゃいけない事を何度も繰り返す事になると——」

「それだったらつとり早く——結梨華本来の力を使えば解決じゃない？」

「……………マジか？」

「マジよっ」

霊夢の言う『結梨華本来の力』に反応してか、その事を知っている一人として魔理沙が霊夢に心配気味に確認する。

「……それって結梨華の本来の力を使う……つまりは、結梨華の【アレ】だよな？」

「そうね。それが本当に早いじゃない」

「でも、結梨華の「アレ」は極力、他人に知られちゃまずいもんだろ？」

「詳細を知らなければ大丈夫じゃない？ いざというときはそういう事も操れるんだし。このある意味平行線の話を終わらせるにはそれが良いでしょ。そうすれば一回で済むのは確定だし」

共通の認識での話で、封結は悩むような仕草を見せた後……決断。

「極力はしたくないんだけどな……だが、咲夜はちゃんとこう頼んできたわけだし——仕方ない。明日、この館に結梨華を連れてくるか……」

折れたように、代替案を承諾した封結。咲夜は少し晴れた顔をしながらも、お礼の言葉。

「……ありがとう……」

「はあ……明日はめんどくさくなりそうだ……」

「ちよつと!? 何で咲夜は良くて、私はダメなの——」

レミアアは彼の対応の違いに異議を申し立てようとしたが——その前に、霊夢が彼女に近寄り、小声で話し掛ける。

「封結は命令される事が嫌いなものよ。あんたみたいに高圧的に言う輩とかね。でも……」

『お願い』や『頼み事』なら聞いてくれるのよ。ちゃんと誠意を持って頼めばね」

「……納得いかないわ。こうして吸血鬼からの言葉というのに……」

「…………正直言って、封結はそれ以上の種族と対面して話したりとかあるんだけどね……………」

不満ありげなレミリアだったが、霊夢は現状を確かめるかのようにレミリアに確認を。

「この紅い霧——紅霧異変といったところかしら？　この異変解決者である私に退治されたんだからさっさと霧を払う事。それと…………封結はあんたの妹を何とかしてくれるから、ちゃんとやりなさいよ」

「…………この男が少し癪だけど…………ルールだものね。約束通り、霧は無くすわよ……………」

どこか悔しそうな言葉だったが、レミリアは承諾。どこか申し訳なきように、妹であるブランドールを見ながらだが——

——こうして、紅霧異変は無事に解決した…………。

紅霧異変・後日談

十七話『事情の説明、その準備』

幻想郷を紅い霧で覆う〔紅霧異変〕が解決され、無事に幻想郷に天気と環境が戻ってきた。

人里で〔名前の無い店〕の店主である封結は自身が構えている店へと戻った。扉に手を掛けながら、居候している少女の名前を呼ぶ。

「結梨華ー？ 帰ってきたぞー？」

『はいー！ ただいま向かいますー！』

丁寧な言葉遣いと共に、花結びの簪を着けた少女——結梨華が出迎える。彼女は家主にまず労りの言葉をかけた。

「異変解決、お疲れ様です！ 無事に紅い霧は去ったみたいだったので安心しましたよー！」

「まあ、いつもの二人が異変を解決してくれた。それと——ルーミアは来てないか？」

彼が言う第三者の名前。彼女は心当たりがあるような表情を見せて、説明しようとしたが——

『あー。ふゆなのかー?』

居間から出てきたたであるう、赤いリボンみたいなのをした、黒い服のベースの妖怪少女——ルーミアも玄関に現れた。

……口元に食べ物の痕がついているが。

その事を踏まえて説明を始める結梨華。

「主人様紹介の元で来てくださったのはわかりました。服の袖に、主人様の御札もありましたし。ルーちゃんは私の言う通りに人里の人達を助けるのを手伝ってくれました」

「そうか。それは良かった」

「ただ……物凄く多く食べるんですよ、ルーちゃん……。まだストックはありますが……このままいくと、少々危ない気が……」

「……まあ、よほど空腹だったという事だろう? それなら仕方ない」

少し疲れたような溜息をしながらも封結は、満足そうな表情を浮かべるルーミアに声を掛ける。

「腹はふくれたか?」

「うんー。こんなに食べたのは久しぶりー」

「今回は人里を助けるという名目で食わせてやったが……次からは金を持ってこい。そ

れかもしくは価値相応のモノでな」

「そうなのかい。じゃあ、またー」

彼女は別れの挨拶をすると、自身を闇で包みながら店を出て行った。彼女をずっと見ていた結梨華は、とある事を封結に言おうとしたが――

「主人様……ルーちゃんは――」

「言いたいことはわかる。どう思った？」

「……正直、嬉しかった方の気持ちが強いですね。理由や環境は違えど、結梨華と同じような子っているんですね……」

「……まあ、誰がやったのかは知らないけどな――それはともかく。結梨華、明日は店を休みにするぞ」

話を打ち切り、新しい話を持ち出す封結。彼の言葉に彼女は覇気があるような言葉で反応する。

「結梨華達二人でお出かけですか!？」

「……違う。ちよつと今回の異変の元凶場所である――紅魔館に行くんだ。吸血鬼が住んでいる場所な」

「!・ それでも結梨華は嬉しいですよー♪ 吸血鬼さんとはまだ会った事ありませんからね!・ 楽しみですよ♪」

「ここから本題なんだが……少々、とある事で結梨華の制限を解く必要があるんだ」

彼が悩むようにそう言うのと、彼女は少し間の抜けた表情になったが……切り替えて、何故かどこか嬉しそうな表情になりながら封結に問う。

「ほうほう♪ 結梨華の力が必要なんですネ♪ どんとこいですよ！ ……それで、結梨華は何をすれば良いんです？」

「……それはだな——」

彼はゆっくりと、明日行う予定の行動について彼女に話した……。

翌日。早朝ですでに起きて、封結と結梨華は朝食を食べ終わり、身支度をしている頃。彼女はいつもの服、封結は普段来ている作務衣に額に掛けた眼鏡、後ろ髪をくくつて整えていた。

彼は身支度が終わり、『鬼切』を腰に下げながら結梨華に行動を促す。

「それじゃあ……さっさと行くか。紅魔館に」

「はいですよ！」

外に出て店を閉めて、行動しようと思いき出したとき——空から見える人影。その人物は鳥の翼を広げて、地上に降り立ち——二人に話しかけてくる烏天狗。

「おはようございませう封結さん、結梨華さん！ 少々昨日の異変で色々起き着たいことがあるんですよ！」

「……文か」

「文さん、おはようございます！ やっぱり、昨日の異変の事が気になるんですね？」

妖怪の山で暮らしている、射命丸文。彼女は二人に挨拶をした後、手帳とペンを持ちながら言葉を続けた。

「昨日、紅い霧が幻想郷を覆いましたよね？ その事で霊夢さんと親しい人物である封結さんにお聞きしたいんです！ 彼女なら異変に行っていない封結さんでも、話を少々していると思いませんか！ 霊夢さんに聞く前に、事前に聞いておこうかと！」

昨日の異変の詳細。少なくとも文の中では彼は異変に関わっていないと思っ
ているらしい。彼女の中では異変解決者である霊夢と関わりはあるものの、異変と関係無い
と思っ込んでいる。実際、彼は異変解決者である事は知られていない。

だからこそ——彼は言う。

「ああ。話ならちゃんと聞いている。昨日の異変は——博麗霊夢ともう一人の異変解決者である、霧雨魔理沙によって解決した。大雑把に話すぞ」

「どうぞどうぞ！　それで、今回の異変というのは——」
——彼はわざと、異変に関わっていることを喋らない。

店主説明中……

「——とまあ、こんな感じだ」

「成る程……今回の異変はあの赤い館——紅魔館に住む吸血鬼が起こした異変だったんですね」

相槌を打ちながらメモ帳に書き込んでいく文。封結の説明を聞き終わり改めてお礼を言った後、二人の行動について尋ねる。

「いやあく、情報提供ありがとうございます！　ところで……お二人は何処に出かけるんですか？　お店も【臨時休業】と貼りだしているみたいですし……」

「その紅魔館にとある事で呼ばれていてな。霊夢がおそらく何か喋ったんだろ。それで結梨華も連れて行った方が良く二人で向かおうとしているところだ」

「……ふむ——！　それならば私も同行しても良いですか!?　その紅魔館の吸血鬼さん

やその住民さん達にお話を色々とお伺いしてみたいですっ！」

彼の言葉を聞いて悩むような仕草を見せた後……決断。文は封結達に同行したいと願いだした。

彼が話すよりも、結梨華が先に反応して文に意見を言う。

「良いですね！ 多い人数で行った方が楽しくなりますっ！」

「ありがとうございます！ 結梨華さん！ それで……封結さんはどうですか？」

「……よほどな事を突っ込まない限りは大丈夫何じやないか？」

「ではこの清く正しい射命丸、ご同行させていただきます！」

結梨華は賛成。封結は傍観。彼女は同行出来る事についてこう思う。

「(紅魔館住民の方々と、最近の取材対象である封結さんと結梨華さんの普段ではわからない秘密もあるかもしれませんが！ きつとネタがたくさんです！)」

自分の発行している新聞の事を考えながら、彼女は封結と結梨華と行動を共にすることになった……。

十八話 『謎が深まる少女』①

封結、結梨華、文の三人は飛翔して紅魔館に向かう。その道中に文は封結はともかく、結梨華まで飛べるとは思っていなかったようで彼女に問いかける。

「あの……結梨華さんも飛べたんですか？ それで能力持ちだったりします？」

「今の結梨華でもキチンと能力はあるので。相手を判断する「において種族がわかる程度の能力」ですけどね」

「において種族がわかる能力とは個性的ですね……でも、その能力って使いどころが限定されませんか？」

「ですね。戦闘にしても、種族がわかるだけではどうしようもないですし。日常会話などで相手の種族がわかる程度ですのぞ」

文と結梨華は会話して進んでおり、封結は黙って進み続けている。沈黙が続いている彼に文は話を振った。

「そういうえば封結さん、霊夢さんからの情報で紅魔館の住民は吸血鬼の他にどのような方がいるんです？」

「……そろそろ着くからわかるはずだ」

彼は視線先にある建物に文を促す。彼女も封結に従ってその先を見ると……赤い洋館、通称【紅魔館】が見えてきた。

三人は飛翔を止め、その紅魔館の門に歩いて行く。すると——紅魔館の門番で有り、『龍』の漢字が入った帽子を被っており、中華風の服を着た人物。封結は少し呆然としているその人物に話し掛けた。

「……確かお前はこの紅魔館の門番である……紅、美鈴だったか？」

「……………！ はいっ。あなたは……まあ、異変解決者の封結さんですね。今回の異変を通して咲夜さんから話は聞いています。聞いた話だと、妹様の狂気を抑えてくれた方だと。そして本日は——本格的に妹様の狂気を何とかしてくださる……そう聞いております」

彼の言葉に気づいた反応をし、話をする美鈴。ちゃんと彼女に話は伝わっているみたいだが……彼女の話を知らない人物が一人。

「……………!!? 封結さん!!? あなた異変解決者だったのですか!? それでこの異変の解決者!? 先ほどの取材では紅い霧の異変ではあなたが関わっているとと言う事は知らないですよ私っ!!?」

先ほど紅霧異変の詳細を聞いた文。しかし、彼女が聞いた内容は『異変は博麗霊夢と霧雨魔理沙が解決した』と聞いた。彼は異変に関わっている事を一個も喋っていない。

その事に封結は簡潔に答えた。

「文は俺は異変に関わっていないと思つていたみたいだからな。それに、本当に異変解決方面だったら霊夢と魔理沙が貢献している。俺は単なる手伝いだつたからな。異変側の人物の足止め。俺は目立った活躍はしていない。それと俺の事は新聞に書くな。そういう方面で有名になるのは嫌なんだ」

「……まあ、後でそれを代替にする事を提案させてもらつてもよろしいですか？ 私としては載せたいという気持ちが強いので……。仮に、もし載せたらどうしますか？」

「店でお前を出禁にする」

躊躇いなく言う封結。フォローするかのようになり、申し訳なさそうに結梨華も文に頼んだ。

「こればかりは結梨華もお願いします。主人様はそういう方面で知名度が広がるのは嫌らしいので……（むしろ、結梨華の所為で申し訳ないです……）」

「むう……結梨華さんまでそう言うならば仕方ないですね。後日、埋め合わせと言う事をお願いします」

文が結梨華の言葉を受け入れた頃——急に現れる人物が一人。その人物は外界で言うメイド服を着ており、異変時には封結と対決、そして同盟を組んだ人物である——十六夜咲夜が現れた。

彼女は彼を確認するなり言葉を発したが……疑問に思う事があるみたいで、彼に問いかける。

「約束通り、来てくれたのね……紅魔館へようこそ。それで、そのお店の少女が妹様の狂気を何とかしてくれるの……？」

「俺はあくまで封じるだけだからな。根本的なモノはどうにもならない。その根本的なモノを何とか出来るのは結梨華なんだ」

彼は彼女の問いを答えると結梨華は咲夜に近寄り、笑顔を浮かべながら覇気のある声で挨拶を始める。

「主人様から聞いています！ 改めて結梨華ですつ！ 主人様経由で頼まりましたが、結梨華頑張っちゃいますよ！」

「え、ええ……よろしく願いますわ（……本当に何とか出来るのかしら……？）」

天真爛漫な表情で友好的に接してくる所為か、咲夜は慣れていないのかぎこちない。本当に目の前の少女が問題を解決してくれるのか疑問を抱いているみたいだ。

しかし……ここで、文は結梨華に対してある疑問が湧く。

「（……あやや？ 結梨華さんの能力は「において種族がわかる程度の能力」のはず。それなのにどうやってその【狂気】というものをどうするのでしようか……？）」

彼女がそう疑問に思っていた頃……咲夜は文を視界に入れると、先ほどの戸惑いの表

情から変わって業務的に話し掛けた。

「……あなたはお呼ばれしていいわ。お帰りください」

「あやや……やはり追い返そうとしますか——しかし！ 私は封結さんと結梨華さんから同行しても良いという許可を貰っているんですよ！」

「……！ 封結……どうしてそういう許可を出したのかしら？」

文の弁解を聞いて咲夜は詰め寄るようにして彼に近寄り詳細を求める。

「別に邪魔しなかったら良いと思っただけ。それで文が紅魔館住民について詳細を求めたから、それならば直接会わせて良いと考えたんだが……ダメだったか？」

「……別に、そういうわけじゃないけど——」

「許可は出ました結梨華さん！ では私と一緒に突撃取材をしましょうっ！」

「ですよー♪」

言質を取ったという解釈をした文は結梨華と共に紅魔館へと入って行った。その様子を見て呆れるような溜息を封結はしていたが。

「……五月蠅くしたら声とか出すのを封じておく。迷惑をかなり掛けるようだったら追い出して構わないからな」

「……はあ。そうさせてもらおうわ……ちなみに、聞きたいのだけ——」

彼の言葉に同調した後……咲夜は彼の耳元に口を近づけ、小声で彼に質問を。

「……彼女とはどういう関係？」

「文か？ 最近知り合った烏天狗だから、どういう関係かは【知り合い】じゃないか？」
「……そう」

彼の答えに、何故か満足そうな表情をする咲夜。封結は少し表情に疑問を持ったので
問いかけようとしたが――

「？ 咲夜？ 聞いてどうしたかったんだ――」

「何でも無いわ。それより……妹様と会う前に、お嬢様に挨拶をしておきなさいよ。あの二人にもそう言わないといけないから……追いかけるわよ、封結」

「……わかった」

「それと美鈴、侵入者が来たら追い出すように。わかったわね？」

「あ、はい。了解です咲夜さん」

咲夜の言葉に美鈴は答えた後、二人は紅魔館に入って行った……。

「……一瞬、咲夜さんが機嫌が良いそうにしておいたような……？ それと――あの花結びの少女の結梨華さん――何か、彼女の【気】は他の人物と比べると違いすぎるような……？」

咲夜は文と結梨華を能力で連れてきて。封結も含める四人は紅魔館のロビーに向かっていた。道中、文は咲夜の事を色々尋ねてきたが彼女は業務的に言葉を返す。

そして歩いて行くと——ロビーの扉前。咲夜は足を止めて、封結達に注意事項を述べる。

「この先にお嬢様が待っているわ。くれぐれでも粗相は無いようお願いね」

「俺はともかく、二人の行動を見ていた方が良いかもな……」

封結が視線を向ける先には文と結梨華。その二人は封結の言葉を受けて不満そうに言った。

「私は新聞のために紅魔館当主の方をよく知る必要はあるのです！ そんな粗相はしませんよ！」

「結梨華は皆さんと仲良くなりたいですっ！ 少し迷惑な事をしてしまうかもしれないが……結梨華自身も、極力迷惑は掛けないようにしますよ！」

「……まあ、案内してくれ。咲夜」

「……そうね」

二人の発言を聞かなかったようにしながら、封結と咲夜はロビーの扉を開けた。

その先にある玉座で待っていたのが——幼い姿はしているものの、悪魔の翼に鋭い八重歯。彼女こそが紅魔館の主である——レミリア・スカーレットある。

彼女は封結と、見慣れない二人を見て意見しようとしたが——言葉が詰まる。

「……その男はともかく、烏の妖怪に——ん？ その……花を頭に付けている奴……何者なの？」

「結梨華の事ですか？ 結梨華は結梨華ですよ。主人様のお店で居候させてもらっている結梨華です！」

「……答えになっていないわ。あなた……人間じゃないわね？ それで、妖怪の気配もしない……いや、むしろ『あなたの種族が曖昧』になっている感じがするわ」

レミリアの指摘に彼女は困るように、言葉を濁しながら言葉を言った。

「うーん……ちよつとそこは内密にしてもらいたいです。ちよつと【きみつじこう】なので」

「……あなたが何者であるかは【運命】を見ればわかる話。見させて貰うわよ」

そう言って、レミリアは自慢げに瞳を閉じて能力に集中する。文は『運命を見られる

吸血鬼ですか!』と言ってメモしているが……結梨華はレミリアの行動を止めるように言う。

「あっ!?! 結梨華の事を能力とかで見ない方が良いですよっ!?!」

「ふふん。私の能力に恐れをなしているのかしら? だったらこの場で吸血鬼に恐ろしさ——」

そうしてレミリアは結梨華の運命を見る。すると——

レミリアが得体のしれない生き物に食い殺されそうになる光景を見た

「——っ!?! な、何!?! 今の運命の光景はっ!?!」

「っ!?! お嬢様!?! どうかなされたんですか!?!」

急に我に返ったように、レミリアの動悸が激しいようで、呼吸が荒々しい。それに伴い、冷や汗が滝のように流れる。急な主の急変に咲夜は彼女の傍に駆け寄り、容態を確かめる。

封結は呆れているような表情で落ち着いているが……文は今の状況に困惑するばかりで、取材対象の一人と数えている結梨華へと疑問の声を。

「あやつ!?! 急に紅魔館当主の方が弱っている!?! 結梨華さん、あなたは一体何をしたんですか!?!」

「結梨華は何もしてないですよーっ!?! これはただ【お爺様】の過保護の影響なんですっ!?! こういうことになると思っただけで結梨華は吸血鬼さんの行動を止めようとしたんですよーっ!?!」

焦るように少し涙目弁明する結梨華。事態が收拾仕切れなくなっていく中で……封結がレミリアに事情を説明した。

「……結梨華は本当に訳ありだな。結梨華に危害を及ぼそうとするなら……過保護な奴の【力】が発動するんだ。そのままお前の能力とかで見続けようとするなら——大惨事になるぞで」

「そういう事は早く言いなさいよ!?! それで何なの!?! そのお前の居候は何者なの!?!」
「……結梨華の事情は話せないんでな。精々、ウチの店の【訳あり居候看板娘】としか説

明が出来ない」

「何なのよそれ……」

「まあ、それはともかく。さつさと自己紹介をさせて貰うぞ。訳ありで居候しているこの子は結梨華。それで小さな赤い頭巾をして、さつきからメモをしているのは射命丸文だ」

レミリアは体調を整えながら封結の説明を聞く。そして、一通りやることを確認し終わったのを把握した封結はレミリアに行動を促す。

「じゃあさつさとフランドールの狂気を対処するぞ。地下に向かえば良いんだろ？ 事はなるべく早く済ませたいからな」

「……………そうね。行きましよう」

「(……………彼のお店の少女は一体何者なの……………?)」

レミリアと咲夜は結梨華に疑惑の視線を送っているが、彼女達は地下へと向かった……………。

十九話『謎が深まる少女』②

図書館へ向かい、足を進めていると——図書館には管理をしているパチュリー・ノーレッジ。そして、今回の人物でもある——フランドール・スカーレットがそこにはいた。まずはレミリアの親友でもあるパチュリーが見慣れない二人を見て、まずは文に話しかける。

「……あなた、完全に部外者でしょ？ どうしてこの紅魔館にいるのかしら……？」

「そりゃあ、今回の異変の事を記事にするためですよ！ そのためにはこの紅魔館住民の方々にお話を伺いしたいと思ひまして！」

「……まあ、良いわ。それで……その、花の髪飾りをしている少女——というより見た目レミイや妹様と外見年齢同じじゃない……本当に何とか出来るの？」

文から結梨華にパチュリーは視線を移すが……外見が幼いからか、半信半疑で疑っている。

彼女が疑っている中、レミリアは注意するように言った。

「……パチエ、そいつは只者では無いわ。私の能力で運命を見ようとしたら——警告するかのよう、その運命の光景で殺されかけたわ」

「!? この少女が!? 力を探っても、そのような巨大な力を感じないわよ!」

レミアアの言った事に同調するように、結梨華は頬を膨らませて反論。

「人を外見で判断してはいけませんよ! そのところをお願いします! 結梨華、これでもお姉さんなのですよ!」

「…………ごめんなさい、私から見てもそうは見えないわ…………」

結梨華の言い分に咲夜は気まずそうに否定する。その事に悲しそうな反応をする結梨華。

「ガーンツ!? やっぱり信じてもらえてない!」

「だろうな。その見かけだと信じてもらえないだろうよ」

「…………うん。私から見ても同じぐらいしか見えないよ…………私は495年は生きているけど」

封結の言葉に同調するように、話を聞いていたフランドールまでもが否定。そのフランドールに結梨華は焦点を当て、彼女に話し掛けた。

「えつと…………あなたがフランドールさんですか?」

「…………うん。私がフランだよ。あなたが…………私の悪いモノを何とかしてくれるの…………?」

心配そうなフランドールの声。しかし結梨華は——フランドールに近より、彼女の手

を取りながら目をしつかり見ながら答えた。

「心配しなくても大丈夫ですよ。主人様の力の元、ちゃんと——フランちゃんの悪いモノは結梨華が取り除きますから！」

「……本当に？」

「むむむ……あまり信用されていない……。それにフランちゃん、よそよそしいですよ！ もうちよつとフランクに話しても構いませんから！ 友達みたくで構いませんから！」

「……【友達】？ あなた……私の【友達】になつてくれるの？」

結梨華の言った言葉に、少し驚くような様子を見せて再確認するフランドール。その事に結梨華は頷きながら話を続ける。

「そもそも結梨華の目的は幻想郷の皆さんと仲良くすることが目的なのです！ フランちゃんもその一人ですよ！ それで、悪いモノが取り除き終わった後——いっぱいお話ししましょうね！」

「……うん！」

笑顔で言う結梨華に触発されてかどうかはわからないが、彼女も笑顔を見せながら答えた。そのフランドールの様子を見てか、レミリアが驚いている表情を浮かべている。その事に封結は気づき、話し掛けてみるが——

「どうしたレミリアア？ 妹に何か変な様子でも見られたのか？」

「……そういう事じゃないわ。あの結梨華という奴の根本的なモノがよく分からないのよ。あんな光景を見せたのに、純真な想いでフランと話して、もう心を通わせている……その事に嫉妬しただけよ」

「……姉妹仲はあまり良くないのか？」

「良くないでしょうね。私がフランを閉じ込めていたんだから……あの子の狂気を恐れて。嫌われてもおかしくないわ」

「……そうか」

その言葉を最後に、封結はこの場にいる人物達に注意するように声を掛け始める。

「……そろそろ取りかかる。ちょうど広さが良いからこの図書館の場所を借りる。それで俺と結梨華、フランドール以外は悪いが出て行ってくれ。それから取りかかる」

彼の言葉に疑問を覚える人物は多数だろう。その内の一人として文が彼に問いかけた。

「何故私達は居てはいけないんですか？」

「結梨華は本当に訳ありだからそういう過程をあまり他人に見られるのは良くないんだ。この事については知られるわけにはいかないからな」

彼が説明した後、文の次に質問をしてきたのは咲夜。

「でも、異変解決者でもあるあの二人はその少女の事情を知っているんでしょ？ その二人はどうして？」

「……その事については、偶然としか言いようがないんだ。あいつらは本当に俺の店に来る腐れ縁だからな。その時に知ってしまったが……あの二人は公言する事はないからな。ちゃんと結梨華の事情を深く理解しているからだ」

「……そう」

彼の言葉に少し悲しげな返事をした咲夜だが……彼は現状の様子を見ながら行動を促す。

「……他に質問は無いな。それじゃあ悪いが退室を頼む」

ほとんどの人物は不満げに図書館から去って行く。その途中で——レミアアは振り向いて、結梨華に言葉を。

「……妹を頼んだわよ」

「はい！ お任せくださいですよ！」

そして、他の人物は出て行く。出て行ったのを確かめた結梨華は改めて封結に言葉を。

「主人様……配慮、ありがとうございます。本当なら隠したくはないんですが……【お爺様】から特定の人物か特別な場合しか許可をもらっていないもので……」

「結梨華は気にする必要無い。お前はやるべき事をやってくれたらそれで良い」
「……ですね。結梨華はやるべき事をやります。それでは主人様、結梨華に能力の解除を——」

彼女は封結の行動を促したが……彼は手で制止の合図をしながら彼女に言葉を。

「それよりも先に対策をしてからだ。おそらくあいつらは何らかの手段で見ようとする輩もいるかもしれないから……結界でも張ってくる」

そう言うのと彼はまず図書館の扉に彼の能力を応用した結界を張った後——フラン
ドールの狂気を取り除く作業が始まった……。

——そして一方、図書館の外で待機している人物はというと。

「……パチエ、水晶だかで見えることは出来ないの？」

「……ダメね。何かに妨害されていて見ることが出来ない……」

「それにこの扉、私たちが出て行った後に開かなくなっちゃいましたね……かなりの特ダネの気配がするんですが……あやや」

咲夜を除く人物達は覗こうとしていた。彼女達の行動と結果を見て、思い当たること
が一つ。

「……………封結の能力で知る事を封じているのかしら……………」

そう考えていたその時——何かを思い出したかのような反応するパチュリー。その事に親友であるレミリアが問いかける。

「……………あ。そういえば……………」

「? どうしたのよパチエ?」

「いや、こあの事を忘れていたわね……………多分、今でも本の整理をしているかも……………」

レミリア達の待ち時間はほんの数十分だっただろうか? その間、見るのを諦めた文は彼女達に取材を行ってメモをとっていた。

そして——ようやく、扉が開かれる。そこに居たのはもちろん封結だ。

「待たせたな。フランドールの狂気は無くなった。これで異変時みたいな事は無くなるはずだ」

彼の言葉に最も早く反応したのは彼女の姉であるレミリア。彼に近寄っては、詰め寄るようにして確認を。

「！ 本当にフランの狂気が無くなったの!？」

「ああ。結梨華がちゃんと全て取り除いてくれたさ。もう、お前はそれについて悩めることは来ないだろう」

「……そうなの……!？」

安堵したような彼女の様子。次に文が彼に駆け寄り、詳細の情報を求める。

「それで現在、結梨華さんとフランさんは何をしているんですか?」

「楽しくお喋りしている」

単純に言った彼だが……咲夜とパチュリーはこの場にいる人物達の行動を促し始めた。

「とりあえず、妹様を確認しにいきましょう」

「ちゃんと無くなっていればいいのだけど……」

封結を先導に、図書館で歩みを進める。そして、目の前に映りこんだ光景は――

「――そんなわけで、結梨華は店番をしている時に言ったのですよ……『魔理沙さん、ドロワーズが見えていますよ』って。そうしたら珍しい魔理沙さんの恥ずかしがっている様子が面白かったですね!」

「へえ〜! 魔理沙ってそういう一面もあるんだー!」

「まあ、結梨華だけなら『おう、サンキュ』ぐらいですんだかもしれませんが……タイミング悪く、主人様が来ちゃったんですよ。やっぱり、異性に見られるのは男らしい言葉遣いの魔理沙さんでも恥ずかしいみたいです!」

「? どうして異性に見られると恥ずかしいの?」

「それはいざれフランちゃんにもわかる 때가来るのですよ……!」

「そうなんだー。わかる 때가来たいな……」

無邪気な会話をしながら、会話をしている二人の少女。第三者から見てもわかることは、仲良く会話をして楽しんでいる事だ。

その光景を見た、紅魔館住民であるレミリア、咲夜、パチュリーは……あまりの変わりように驚愕を隠せないでいた。

「……確かに、フランから狂気が無くなっている……!?! 探しても狂気を感じない……!?!」

「それに、様子も全然違う……!?!」

「……確かに、妹様の狂気は無くなっている……」

三人が驚いている中、文は封結の元に駆け寄って概要を聞いていたが……それでも彼は答える素振りを見せない。

「封結さん。本当に中では何が行われていたんですか……?」

「だから言えないと言っている。諦めろ」

「むう……」

彼の言葉に不満げな文だが……フランはまだ結梨華と話しているみたいで――

「それで――結梨華お姉ちゃんはわかるの? どうして異性に見られると恥ずかしいのか?」

「!!!?!」

急なフランドールの結梨華への呼び方。封結と結梨華を除く人物達は彼女の呼称に驚いている様子だが、結梨華はそれには気づかないで返事をしていたが――

「それはやっぱり、結梨華はフランちゃんと比べると長く生きていますからねー。大人なことはわかるのです!」

「――待ちなさいよあなた!?! どうしてフランがあなたを姉のように慕っているわけ!?!」

レミリアは特に驚きを隠せない。すかさずレミリアは会話に入り込み、結梨華に尋ねるが……思い出したかのように結梨華は言う。

「あ、そういえばレミイちゃんはフランちゃんと五歳違うんだね。それだったらレミイちゃんも結梨華の事を『お姉ちゃん』って呼んでも良いんですよー♪」

「呼ぶつもりはサラサラないし、変な呼び方をするんじゃないわよ！ 私は500年は生きているの！ むしろ呼ぶのはそっちよ！」

自分が年上と言い、立場を表そうとしたが——結梨華は言葉を返した。

「結梨華は1600年は生きていますよ？ 少なくとも、レミイちゃんよりは年上なのですー！」

「……………え？」

「……………聞き間違いでしょうか？」

「……………皆、きつと聞き間違えよ」

結梨華の言った年数。単純に言えばレミリアの三倍以上の時間を生きている。その

言った言葉を三人は信じてない。文は口を開けて呆然としているが。

その中——封結は彼女に傍に近寄り、軽く手刀をしながら言葉を。

「……はあ。どうして実年齢をバラす?」

「だってそう言わなくちゃ皆さん信じてくれないんですよ?! でも……フランちゃんは私の姿や事情を知つてすぐに信じてくれましたからね! フランちゃんの事も大好きですよー♪」

「あははっ! くすぐりたいよお姉ちゃん♪」

最初は悲しげに言っていたものの、彼女の事を理解したと思われるフランドールに抱き着いて頬ずりを。フランドールはくすぐたつそうだが、彼女もまた笑顔を浮かべている。

当然、一番の身内で姉であるレミリアは彼女達の近寄り——妹であるフランドールを結梨華を奪い取るように抱き寄せながら牽制するように言う。

「何フランを奪い取ろうとしているのよ!? フランは私の——大事な妹なんだから!」

響き渡るレミリアの声。彼女の言葉を咲夜とパチュリーは驚き、文はメモの準備を。封結は目を閉じて腕を組み、結梨華は口元をゆるめてニヤニヤして。フランドールが一番彼女の言葉を聞いて驚いているかと思つたが——実は言つた張本人であるレミリア自身が戸惑い、頬を染めている。

フランドールは少し戸惑いながら姉に問いかけようとしたが——

「え……お姉様……？ 本当に——」

「ちよ、ちよつと花を摘みに行つてくるわ!？」

——逃げるかのように、レミリアは飛翔して図書館を出て行つてしまった。その事にフランドールは悲しむところが——嬉しそうに、笑みを浮かべていた。

「封結とお姉ちゃんの言つた通り……本当だつたんだ……!？」

「……今なら少なくとも姉の本心を聞けるだろう。追いかけると良い」

「ですよ！ お姉ちゃんは何時でも妹さんの事を心配しているんですから！ 逆も同様なのですよっ!？」

「うん！ お姉様と話してくる!？」

二人に促されてフランドールはレミリアを飛翔して追いかけていった。レミリアとフランドールの関係についてよく知る咲夜とパチュリーは二人に問いかける。

「あなた達……まさかお嬢様達の関係までも……!？」

「……狂気を取り除いた後にフランドールがそういう事を聞いてきてな。埒があかなそうだったから——結梨華でてつとり早く不安を取り除いたんだ」

「……結梨華。本当にあなた、何者なのよ……？」

「残念ながら教えられないんですよ……。結梨華としたら隠し事はしたくはないんですけど……。すみません」

「あやや……。何だかドラマがありそうな気がするんですけどねえ……。物凄い特ダネのにおいがしますよ……」

パチュリーから問いかけに申し訳なさそうに言う結梨華。その事について文は悔しそうに話をしていたとき……。図書館の奥から悪魔の翼を背中、頭にも生えているスーツ姿の女性が現れる。その人物はパチュリーを主とする小悪魔だ。

「……皆さん、一体どこに行っていたんですか？ 何か妹様と……。あれ？」

小悪魔は封結を見た後……。結梨華を見て疑問の声をあげていた。その小悪魔の視線に疑問を抱く結梨華。

「？ どうかしたんですか？」

「……やっぱり、違いますよね……。凛々しい女性の声とは全然違いますし……。先ほどまでの方はどこにいるんでしょうか……。？」

小悪魔の謎の言葉にとある二人以外は疑問を抱いていたが——図書館の扉に現れる

二人の人影。その二人は紅魔館の部外者の人物であるが……同時に、今回の異変の解決者の二人だ。単純な色で表現するならば、紅白と白黒。

「あんた紅魔館に行くのが早いわよ！ 朝ごはんたかろうかと思つたのに！」

「そうだそうだ！ 私達に飯を買わせろ！」

「……お前らなあ……」

呆れ声を出しながら腐れ縁の二人である博麗霊夢と霧雨魔理沙を見る封結。二人の登場に咲夜はある事を問いかける。

「……美鈴はどうしたのかしら？」

「あの門番？ 魔理沙がやったわ」

「ちよっ!? 霊夢も攻撃してただろ!? 二人の方が効率的とかそういう理由でしてたじゃないかっ！」

「……あなた達は呼ばれてはいないんだから素直に帰りなさいよ……」

ジト目で言い争っている二人にパチュリィは言う。しかしその言葉に二人は気にしていないようで、魔理沙がこの場に居る全員にある事を伝える。

「おっと、そうだった……とりあえずアレだ！ 異変も解決出来た事だし——宴会しようぜっ！ 場所は博麗神社でな！ 食料とか酒とか色々持つてくるように！」

「あゝ……いつものか」

彼女の言葉に思い切りがあるような反応をする封結。咲夜は彼に概要を尋ねた。

「……宴会？ どうしてやるのよ」

「大体は何らかの騒ぎや、騒ぎたい時にやる宴会だ。今回は紅霧異変の解決の祝いを含めてやる宴会だな。まあ、酒を飲みたいというのが本音が占めているだろうが」

「そうなの……それじゃあ封結、あなたも参加するの？」

「俺は異変に関わったら強制的にこの二人に連れて行かれるから……まあ、悪霊が今いないだけまだマシだが。こんな宴会は魔界に行つたとき以来だな……」

「……魔界なんてものがあるの？ それでどうして行つたのよ……？」

遠い目をしながらさらさらつとと言う彼に咲夜は疑問しかもたないが、彼は質問を流すように言う。

「色々とワケがあるんだから仕方ないんだよ。それに俺は巻き込まれた」

「封結さん。後でその魔界についてお聞きしたいんですが——」

「霊夢か魔理沙に聞け」

溜息をつきながら順に咲夜と文に説明する封結だが……結梨華は対照的に嬉しそうに彼に話し掛けた。

「宴会ですねっ！ 結梨華、主人様の元の近くでやる初めての経験です！ 今すぐ準備をしましょうっ！」

目をキラキラさせながらすでに楽しみにしている結梨華。彼女に同調するように魔理沙は行動を促す。

「そういえば結梨華も初めてか！　こうしちゃいられないなっ！　霊夢、今すぐ宴会の準備をするぞー！」

「……あんた、基本準備に関しては私がやっているのに良くそんなこと言えるわね……」
「そう言っておきながら俺を手伝いに借りさせる巫女が何を言うんだ……？」

「まあまあ、主人様。今回からは結梨華も手伝いますので！　結梨華、皆様の為に頑張っちゃいますよっ！」

異変解決者側のそれぞれの会話の後、魔理沙は咲夜に言伝を頼む。

「じゃあ紅魔館の住民で来たい奴は来るように伝えてくれ！　今確定しているメンバーだと私と霊夢に、封結と結梨華だ！　じゃ、私は宴会のキノコの採集に行くからなー！」

「……まあ、私は——」

一瞬だが、咲夜は封結をチラ見したが……言葉を繋げる。

「——お嬢様次第ね。とりあえずは聞きに行かないと」

「よしっ！　じゃあ伝える事は伝えませ！　吸血鬼のために時間帯は逢魔が時だぜー！」

魔理沙は近くにある本を頭の帽子の中に入れてながら咲夜に伝え、そのまま箒に乗って

図書館から出て行つた。

少しの間だけ静寂が流れたのだが……図書館を管理しているパチュリーは遅れて魔理沙の行動に反応した。

「!? どさくさに紛れて本を持ってかれた!?!」

「どうしましょうパチュリー様!?! 確かあの本は次に読もうとしていた本ですよ!?!」

彼女の使い魔である小悪魔も焦るような声を出す。二人がうろたえている中、霊夢は一言。

「宴会に来て取り戻せば良いんじゃない?」

「……そうね……今日は喘息も調子良いみたいだし——今度こそ力の差をはつきりさせてやるわ!」

軽く怒りを感じながらも、宴会に参加する事を表明するパチュリー。そんな彼女をよそに、文は霊夢に願い出るように話し掛ける。

「霊夢さん! 私も参加したいです! ここで異変の事を含めて色々な事が取材出来ますからね!」

「まあ、好きにすれば良いんじゃない? とりあえず、何かお酒を持ってきなさい。それと……あんた達はすぐに神社にきなさい。でも、封結は食材を持って来てから来ること。結梨華はそのまま私の手伝い。良いわね?」

文の申し出を受け入れた後に霊夢は封結と結梨華に行動を促す。

「……仕方ないか。じゃあ持つて行き次第、神社に向かうとする」

「わかりました！ 結梨華は霊夢さんのお仕事をお手伝いしますね♪」

「それでよし。じゃあそういう事だからー」

適当な挨拶を霊夢はした後、文と封結に結梨華を連れて図書館から出て行った……。

「……結梨華、一応聞いておきたいんだけど」

「？ 何でしょう主人様」

霊夢と文が先行して紅魔館から出る最中に、封結は訳ありの居候である結梨華にある事を探ねる。

「あの図書館にレミリアとは違う悪魔の住民がいたんだが……大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ！ あの時の結梨華はいろんな事に対応出来る大人の女性なのですか

らっ！」

「……相変わらずだな、その時の結梨華は」

二十話 『現れていた謎の女性』

来客が去った後の図書館。パチュリ―は本を盗った魔理沙にどういう作戦で取り返すか計画を立てていたが、小悪魔はある事を主に尋ねる。

「あの……パチュリ―様。私が図書館に居たとき、白い光が発生した後、さらにまた白い光広がつたんですが……妹様とあの男の方は確認出来たんですが……他に誰かいました？」

「ん？　そういえば、こゝは図書館から出るのを促さなかったわね——！　もしかして妹様の狂気の取り除き方を見たというの!？」

「いえ、あの……私がその二つ目の白い光を確認出来た頃は妹様と男の方は確認出来たんですが……凜々しい声をした女性の姿がどうして見れなかったんですよね……本棚が異様に重なっている所為で」

パチュリ―は結梨華を使ってでの狂気の取り除き方を使い魔に尋ねるが、彼女は首を横に振りながら答える。しかし、彼女の言った「凜々しい声」に反応するパチュリ―。

「……凜々しい声？　少なくともあの【結梨華】という謎の少女は凜々しくもないわよ？　声の質も幼かったし……」

「ですよねえ？ どうも、同一人物としては思えないんですよ……。あの幼い少女の声は子供みたいな声でしたが……姿を見れなかった女性の声はその……艶のある声でした。凄い喋り方が女性らしいというか……」

「……………何かを召喚でもして、その人物を使って取り除いたのかしら——まあ、それはともかく。魔理沙から本を取り返す方法を思いつかないとね……………」

考えが憤ったパチュリーは再び本の奪取について考える。それでも彼女の使い魔でもある小悪魔は……納得のいかない様子だった。

「(そうなる……………あの人は誰なんでしょう？ その時の【結梨華】という少女は黙っていたのでしょうか……………?)」

小悪魔は出来るだけ、図書館であつた会話を思い出す——

「——これはこの棚に入れてと……………」

パチュリー達が図書館から出ていた頃、それを知らない(教えられていない)小悪魔は本棚の整理を続けていた。パチュリー曰く、「異変についてはもう良い」という事。そ

の際に使った資料を片付けていたのだ。

「……妹様のための異変、叶いませんでしたね……まあ、人間達は危害が及ぶようなので、異変解決者達が来るのは仕方ないかもしれませんが……」

そう振り返りながら本棚の整理をしていた小悪魔なのだが――

急に、白い光が図書館中に広がる。

「こあつ?! 一体何が!?!」

彼女としてはパチュリーの実験が何かと思い、作業を中断して光源の元へと向かつては本棚に隠れて状況を把握する。そこに居たのは紅魔館の主の妹であるフランドール・スカレットはかなり驚いているような表情をしており、男――異変解決者と同行した封結もいるのだが……フランドールの目線の先は、小悪魔の視線からでは見えない。何か、本棚が重なって見えない。フランドールはその何かを見て、驚きの言葉を言う。

「つ?! あなたは一体誰?!」

『――ふふふ。さすが純真なフランさんは私^{わたくし}の姿を見て驚いて何よりですわ♪ こうし

て驚いてくれるのも、私としても嬉しく思いましたよ』

フランドールの言葉に答える、謎の女性の声。声から判断するならば上品に聞こえ、どこからか気高く、凜々しい声。

その見えない謎の人物に封結は話し掛ける。

「まあ……久しぶりだな。その——は」

「あら、封結様？ お望みならばずっと今日はこのままで過ごしてもいいですよ？」

「そのお前は目立つから駄目だ。何のために普段から能力を掛けていると思ってる？」

それと様付けはやめろと何回言っていると思っているんだ？」

「それはとんでもないですわ。私がこうして楽しく過ごしているのは封結様のおかげ。封結様に敬意を持つのは当然な事。まあ……封結様はそういうならば、やることを終えたらいつもの——に戻りますわ。惜しいですけど……」

どこか艶のある声で、封結に親しみの言葉を言う人物。小悪魔は会話を聞いて、ある不自然に気づく。

「（あれ……名前が聞こえない……？）」

何かのノイズが入るように、謎の女性の名前が聞こえない。封結が話す際には彼女の名前を呼んだはずなのだが……それでもノイズが走り、聞こえない。

そういう疑問はあるものの会話は続き、謎の女性はフランドールに話を振る。

「こうして見ると、私^{わたくし}が大人の女性と見えるでしょう？　少なくとも、レミリアさんよりはお姉ちゃんだと思いますわ」

「うん！　凄^{わたくし}いお姉様よりお姉様に見える！」

「何^{わたくし}なら私の事を『——お姉ちゃん』とでも呼んでもよろしいのよ？　こうして会えたのは何かの縁。私はその縁を大事にしたいですわ」

「わかった！　——お姉ちゃん！」

「ふふふ……♪　私もフランドルさんみたいな妹さんも大好きですわ♪」

最初は驚いていたフランドルだが、謎の女性に懐き始めている。少なくともこの楽しそうな、嬉しそうなフランドルの姿を見るのは小悪魔でも初めての事だった。

二人が楽しそうな会話をしている中、封結が本題を振る。

「会話は後で時間を作っても良いが、今はフランドルの狂気を取り除く方が先だろ」
 「おっと、そうでしたわね……私としては少々最初に話しすぎたようです。では、さっそく取りかかりますわ。フランドルの「狂気」を操って、無い状態にします。フランドルは目を閉じてください。すぐに終わりますわ」

「う、うん……」

少し不安にしながら、フランドルは目を瞑る。

そして——フランドールに白い光が包む込む。

「（これってさつききの光ですか!? それで、これで妹様の狂気を取り除くって……!?）」
小悪魔は呼吸するのを忘れるぐらいに、その光景を見続けていた。そして——その光が収束されていき、フランドールの姿が確認出来る程になった。

少し息を吐きながら、謎の女性は彼女に伝える。

「ふう……これでフランドールの狂気は一ミリも無くなりましたわ。これ以降は衝動的に襲われる事はないでしょう。どうですか？ ご気分は？」

「……うん！ 何か凄い気持ちが良い！」

「その笑顔こそが私にとつて嬉しいモノですわ。私の力がフランドールに役立てたのなら尚更です♪」

お互いに嬉しそうに言い合いながら、フランドールは笑顔で謎の女性の言葉に答える。

「（……お嬢様が長年問題にしていた妹様の狂気が無くなった!? 本当にあの光で!?）」

小悪魔は驚愕しか無い。長年問題としていた彼女の狂気が、数十秒も経たないうちに

無くなったという。封結はその様子を見てか、どこか安心しているようにも見える。

しかし……先ほどのフランドールの笑顔とは打って変わって、彼女は落ち込むように言う。

「……でも、また地下に閉じ込められるのかな……う？」

「……？ どうしたのですか急に？ 少なくとも、私はそういう心配は無いと思います
が」

悩むように言うフランドールに、その事に疑問を持つ謎の女性。

「だって……今までだって、私のことを閉じ込めてたんだもん。それって私の事が……嫌いだから、迷惑だから閉じ込めていたんじゃないの？」

「……成る程。どうやら長年、レミリアさんはちゃんとした理由を話してはいなかったみたいですね。まあ、その時のフランドールさんの精神年齢や狂気も考慮していたので先延ばし、先延ばし……と、なっていたのでしよう」

「え？ お姉ちゃんわかるの？」

謎の女性の言葉に驚きの様子を見せるフランドール。そして謎の女性は封結にある許可を求める。

「封結様。ここはお二人の為にも、ちゃんとした理由を話した方がよろしいでしょうか？」

「——の能力があれば、本心なんてすでに筒抜けだろ。それに……俺もフランドールの事を心配していたレミリアの話聞いたぞ」

彼は一度そこで言葉を句切り、フランに彼女の言葉を伝える。

「レミリアは少なくともお前の事を心配していた。『嫌われてもおかしくない』と言って、狂気を取り除く前のお前と——の会話で仲良く過ごしていたのを嫉妬していたんだ。ここから考えるにはな——レミリアはお前を嫌っていないんだよ。お前と話せている人物に嫉妬していたということは自分がそのポジションになりたかつたんだろ」

「……お姉様がそんな事を言っていたの!？」

「ああ。言っていた」

彼の言葉に驚きの連続で表情を隠しきれていない中、続くように謎の女性は言葉を続ける。

「人は何かしら行動する際には、何かの根拠があつてするものですわ。生きるために食べる。仲良くするために話す。そして——今回の場合はフランさんの未来の為に、ワザと閉じ込めていたんですの。そう——精神と狂気が抑えきれないフランさんを、大事な妹を守る為に。そしておそらく、今回の異変は吸血鬼の行動範囲を広めて——一歩ずつ、フランさんの狂気の緩和と精神を落ち着かせたのでしよう。紅い霧の中でも見られる自然はそれなりには影響力はあります。ゆつくりと、紅魔館の外というのはど

ういう世界なのか、学習させてあげたかったのでしょうか。フランさんはとても良いお姉さんがいて何よりですわ」

謎の女性が言う言葉にフランドールも聞き入っているのだが……離れたところで聞いていた小悪魔も聞き入っていた。

「(!?) お嬢様の考えをここまで明確に理解しているんですか!?! この方はお嬢様と知り合いなのでしょうか?!)」

彼女がそう思っているが、誰が喋っているかわからない。先ほどから謎の女性の姿を確認しようとしている小悪魔だが……本棚が異様に邪魔だ。まるで本棚が小悪魔の行動を妨害しているかのように。

そして謎の女性は言いたいことを言い終えたのか、封結に声を掛ける。

「では封結様……後は私の^{わたくし}出番は必要ないですわね。後は当本人達の問題ですわ。私はこれで失礼します」

「……わかったが……何か言いたいことや、伝えたいことはあるか?」

「あら? 封結様がそう仰るのは珍しいですわね……」

「折角の今のお前なんだ。今度、お前自身で何かしたい事でもあるか?」

「そうですわね……お言葉に甘えるのなら——」

悩むようにして謎の女性は黙り込んだ後……彼女は答える。

「——ならば今度私^{わたくし}が出てきた時、デートをお願いいたしますわ♪」

「すまん、それは却下で」

「私に選択権は無いのですのっ!」

「さすがに露骨にそういう事を言われるとな……」

「……封結様の思っている事は未だにわかりにくいですわ。本当に腐れ縁のお二方が羨ましいです……」

「羨ましいとか言われてもな……結構大変なんだぞ? あいつらの対応をするの」

「そう仰っておきながら優しくする封結様も私は大好きですわ♡」

「本格的に色々制限を付けるぞお前?」

「ふふっ。ごめんあそばせ。それならば買い出しに同行という事で宜しくて?」

「……まあ、それなら良いだろう」

「では、後日の機会にそういう事でお願いたしますわ」

二人独自の会話が終わった後、謎の女性は最後にフランドールに約束するように話し掛けた。

「フランさん。ここでの出来事は秘密ですわ。私^{わたくし}の事を特には。でも……先ほどと同じような態度で構いませんから。何せ私達は——友達ですのっで」

「——うん、わかった!」

「ではフランさん……また会う日まで、ごきげんよう——」

そうして、挨拶を終えた頃……封結は謎の女性がいるであろう本棚の影に近寄っていく。そして、数十秒後には——

『——お店の居候、結梨華！ ただいま戻りました！』

「見ればわかる」

「……主人様。そこは結梨華に合わせてくださいよう……」

急に幼い少女の声が聞こえてきた。彼女の言葉に冷静にツツコミを入れる封結の反応に物足りない気持ち伝わってくる。

事が終わったのを確認した封結は、二人にこれからのことを話し始めた。

「さてと……無事に終わったから、扉の近くで待っている奴らを入れるぞ。それまでの間に軽く雑談していたらどうだ？」

「ですねっ！ ではフランちゃん、お話をしましょう！ ……これは主人様の店で魔理沙さんがやって来た時の話なんですが——」

「魔理沙って異変の時に最初にあつた人間だよね？」

「ですね。イメージカラーは白黒に近い方です。それでですね——」

少女二人が話している最中に、男は図書館の扉に向かつていく。一応、何か起きた事を確認出来た小悪魔だが……自分の作業が止まっていたことを思い出した。

「あ……パチユリー様に頼まれた整理をすぐに終わらせなくては！」

小悪魔はなるべく気づかれないようにして、フランドールと結梨華から離れて図書の整理を再開した……。

「……やっぱり、あの大人の女性みたいな方は誰だったんでしょか……？　それで、

【結梨華】という少女は何時の間にこの図書館に……？」

宴会で本を取り戻す作戦を考えているパチユリーをよそに、小悪魔は疑問に思っていた……。

二十一話 『異変解決の宴会』

宴会が本格的に始まる前。博麗神社では霊夢、魔理沙、結梨華。そして食料を持って来た封結が準備を行っていた。料理をしている霊夢が封結に声をかける。

「じゃあ封結、作るのは任せたわ。私は倉からお酒持ってくるから。結梨華、ちようどい
いからあんたも手伝ってちようだい」

「まあ……任せられた」

「わかりました!」

封結は霊夢の作業を受け継ぎ、結梨華は霊夢の手伝いで神社内から出ていき。そうして封結が作業に取り掛かっていた時に……帽子を脱いでいた魔理沙は少し声を詰まらせながら、彼にある事を尋ねる。

「……なあ、封結。ちよつと聞きたいことがあるんだが……良いか?」

「それは別にいいが手伝ってくれ。俺は野菜を切っているから、適当に野菜を洗ってくれ」

「あ、ああ。わかったぜ」

彼の指示通りにし、封結の隣に来て野菜を洗い始める。時折、魔理沙は封結を横目で

見ながら。身長差がある所為か、上目遣いになってるようにも見えるが。

彼女の視線を感じ取ったのだろう。彼は顔を動かさずに魔理沙に声で確認を取る。

「で？ 何が聞きたいんだ？」

「その……紅魔館にいる人間の……咲夜だったか？ いつからあんな感じなんだぜ？」

「あんな感じというのは何だ？」

「だから、その……異変で敵対していたのにも関わらず、仲がよさそうだったじゃないか。何かあったのか？」

「何かあったかと言われてもな……少々話したただけだ」

「……その何を話していたんだぜ？」

魔理沙から続く質問の声。彼は少しため息をしながら、作業をしながら彼女に言葉を返す。

「別に大した話じゃない。気にしてもしょうがないぞ？」

「じゃあ私が個人的に気になるんだ。気になってしょうがない。今夜は眠れそうもないぜ」

「今夜『は』か。じゃあ今日しのげば明日から眠れるから問題ないな」

「……封結。さすがの私も怒るぜ？ 何を隠しているようにしているんだ？」

「別にそういうつもりじゃない。言うならば、そうだな……『もしも』の話をしていた」

切り終えた野菜を皿に盛りつけながら答える彼に、彼女は詳細を求める。

「どんな『もしも』を話していたんだ？　そもそも何でそういう話になったんだぜ……？」

「能力云々で話していたらそうだった。それでももしも俺と出会うのが早かったら店員として欲しかったなあっていう事を話していただけだ」

「店員、ねえ……封結は別に結梨華だけでも店員は足りるんだろ？」

「足りるかバカ。俺にも少し自由時間が欲しいんだ。今あるとしたら結梨華が自由時間を使っていないときだ。俺だって稼ぎたいのもあるが、ゆっくりと休みたいんだよ。異変の後の店の開店とかダルイ」

「……だったらさ——」

悩むように言う封結に魔理沙は彼に体を向けながら、頬を染めながらも彼に言葉を伝える。

「——わ、私が店員になっても良いんだ——」

「却下だ」

「封結!?!　返答が早すぎるぜ!?!」

ためらいもなく、質問内容を察して拒否する封結。続けて彼は驚愕している彼女に話を始める。

「お前を雇ったら知らず知らずに仕事をサボり始めるだろ？　そして変な薬品を俺の店で暇があったら作り出すだろ？　それとお前の話し方は客によろしくない。過去で最初に会った女らしい言葉なら別だが——」

「わあーわあーっ!?　言うな私の黒歴史をーっ!?」

彼の言葉を塞ぐように、焦って背伸びしながら彼の口を手でふさごうとする魔理沙。彼はそれを手で振り払い、ある事を伝える。

「それにたまに、お前の親類関係も来るんだぞ？　今では偶然鉢合わせしていないが……揉め事は避けられないだろ」

「……………諦めるぜ」

彼の言った言葉に、落ち込みの様子を見せる魔理沙だった。

『おーい、来てやったわよー』

外で聞こえてくる幼い少女の声。しかし、この声には多少の重みがある。封結と魔理沙は作業を中断し、社外の外に出ることに。

「紅魔館御一行のご到着か。まあ、適当にくつろげば良いんじゃないか？」

「まあ、誘われた側だしそうさせてもらうわ。それと……霊夢と結梨華はどうしたのか
し。」

「酒を取りに行っている」

レミリアの質問に封結は答えると……彼女の傍にいたパチュリーは魔理沙に怒りを
込めながら話をふっかつけた。

「魔理沙っ！ 図書館の本を持って行ってくれたわね！ 本を返しなさい！」

「安心しろ。死ぬまでに返すぜ」

「……良いでしょう。なら表に出なさいっ！ 弾幕ごっこで取り返してあげるわ！」

「ちようどいいっ！ 私もこのイライラをどこかにぶつけたかったぜ！」

魔理沙はパチュリーに誘導されると、二人は共に飛翔。しばらくすると騒々しい音が
聞こえてくる。

「……パチュリー様、大丈夫ですよね……」

彼女の使い魔である小悪魔は主の事を心配していたが。

封結は人物を確認していくと、門番である紅美鈴がいる事を気がかりに思い、話し掛
ける。

「……門番がこんなところにいるのも良いのか？」

「今日だけは妖精メイドの方々にお任せしているんですよ。まあ、これだけの荷物を持つてくるというのかもしれませんが」

彼女の言う通り、片手でそれぞれの袋で持つている食料と——西洋の酒の瓶もある。少なくとも彼は見るのは初めてだったため、概要を尋ねようとするが——

「……？ 何だその酒瓶みたいなのは？ とりあえず酒か？」

「ああ、これはですね——」

「[ワイン] というものよ？ 封結は初めてかしら？」

レミリアの従者である十六夜咲夜が答えた。彼女の問いかけに彼は首を横に振る。

「[わいん]？ 何か本で読んだことがあるな……何かたくさんの時間を使って作る酒じゃなかったか？」

「ええ。それを私の能力で応用して作ったのよ」

「……やっぱ、その能力便利だよな……」

羨ましそうに咲夜を褒める様に言う封結。それで気分を良くしたのか、心なしか機嫌がよさそうだ。

そこへ——数種の酒の瓶を持つてきた博麗神社の主である博麗霊夢と、結梨華が戻ってきた。

「あんた達、来たのね。手伝える奴が手伝いなさい。その方が早く終えるから」

「ふむ……咲夜、出番よ。異変解決者達にどちらか上か示してやりなさい」
「仰せのままに」

異変の準備の手伝いを咲夜に言うレミリア。そして、結梨華の存在を確認して、喜びながら彼女に駆け寄るとある吸血鬼——フランドール。

「あー！ 結梨華お姉ちゃん！ もっと楽しいお話を聞かせてくれるっ？」

「うー……お話をしたいのは山々なんですが……主人様、良いですか？」

悩むように、フランドールとの行動を許可を求める結梨華。仮にも現在は手伝い中だからだ。彼は少し目を閉じて考えた後、彼女に言う。

「……結梨華にはアフターケアで世話になったからな。本格的に出来て配膳するまでゆっくりしていて良いぞ」

「！ ありがとうございます主人様♪」

許可が出て結梨華は嬉しそうにし、フランドールと離れた部屋に移動しようとしていたが……レミリアが静止の声を掛ける。

「……待ちなさい。私もそういう話に興味があるわ。聞かせなさい」

「要約『妹が盗られちゃう……私のおつて思わせなきや！』という事ですね！」

「なっ!?! ち、違うわよそんな風に思っていないわよ!?! ただ個人的にどんな話か気になるだけ!」

結梨華なりの解釈の仕方に焦りながら頬を染めて否定するレミリアに、フランドールは楽しそうに言う。

「お姉様もお姉ちゃんの話が聞きたいんだね！　じゃあ一緒に聞こうよ♪」

「フランドールちゃんの言う通りなのですよ！　さあ、このまま身を委ねるんです！」

二人はそれぞれレミリアの左右へと移動し、腕を組むようにしてレミリアと動かすようにして二人も動いていく。途中、レミリアの抗議の言葉が発せられたが……部屋から移動されると、聞こえなくなった。

その光景を見てか、美鈴はどこか嬉しそうにしながら封結に話を振る。

「封結さん。今回の事はありますがどうございます。まさかお嬢様達のあのような光景が見られるとは思っていませんでした……」

「やったのは俺じゃない。礼は結梨華に言ってくれ」

「いえ。その結梨華さんと繋がりがあったのは封結さんじゃないですか？　それに聞いたところ一つ屋根の下で一緒に暮らしているみたいですし……。ですので封結さんにもきちんとお礼と思ひまして」

「……まあ、どうも」

単調だが彼は彼女に返し言葉。そして、会話を終わつたのを見計らつた咲夜は彼に話をしていったが――

「それで封結……私はどうすれば良いのかしら？」

「ん……そうだな……握り飯でも作るか。ここじゃ狭いから外に出て、一緒に握り飯でも——」

「——それは私がやるから問題ないわ。咲夜は適当におつまみでも作ってちょうだい」

途中で霊夢が話に割り込み、咲夜に別の仕事を押し付ける。その事に咲夜は反応してか、少し機嫌が悪そうに反論の言葉を。

「……私は彼に頼まれたのよ？ おつまみはあなたでも出来るでしょう？」

「この家主は私よ？ 私がしたいことをして何が悪いワケ？」

「むしろ家主だから休んでいても良いのよ？ 私は彼に頼まれたことを一緒にしようって言われているんだから」

「別に封結の指示通りじゃなくても良いのよ？ ほら、封結。あんたも何か言いなさい」

軽く口喧嘩が発生している中で、霊夢は彼に発言を促す。彼は当然のように言う。

「じゃあ俺はつまみでも作っておくから二人で握り飯を作ってくれ。二人して握り飯を作りたいならそれで良いだろ。美鈴と……小悪魔だったか？ 二人は別な作業を教えるから、手伝ってくれるなら聞いてくれ」

「えっ!？」

「じゃあ私も手伝いますね。料理は久しぶりですが……頑張ります」

「はい。わかりました」

霊夢と咲夜の驚愕をよそに、封結は彼女二人に御握りを作ることを任せた。そしてつまみを作る作業の手伝いを美鈴と小悪魔に促し、彼は説明に入っていた。おそらく彼の中では「二人が握り飯を作りたいなら任せるか」という勝手な判断だったりする。

そこへ——風が入り込むように、一人の烏天狗が呆然としていた二人に話しかけたのだが——

「あやや……ようやく妖怪の山での仕事が終わりました……ん？ どうかしたんですか霊夢さんに咲夜さん？ それとお聞きしたいんですけど、魔理沙さんとパチュリーさんが上空で弾幕ごっこをしているのですが——」

「……ちよつと表に出なさい……」

「あ、あやつ？ どうしてそのような怖い表情で御札とナイフを構えているんですか？ もしかして手伝いに来るのが遅かったから怒っているんですか！？ ちゃんと土産にお酒だつて持つてきて——って、どうして二人して投擲し始めるんですかーっ！？ 私まだ何もしていませんよーっ！？」

偶然で遅れて宴会場である博麗神社に來た射命丸文だったが……少しの間、彼女は標的にされて逃げ回っていた……。

多少の事があつたが。頭を冷やした霊夢と咲夜は御握りを作る作業に。文は身の覚えのないとぼつちりに封結に抗議していたり（美鈴と小悪魔は苦笑いしながら作業を続けていたが）。上空での弾幕ごっこの最中に喘息で体調を悪化させたパチュリーを魔理沙が面倒をみたり。疲れた表情をしながらレミリアはフランと結梨華の話を聞いていたりなど。時間は少しずつ進んでいく。

そして、ようやく配膳作業でいるメンバーはその作業に勤しんだりしながら——ようやく、宴会の準備を終えた。それぞれ博麗神社の居間の座布団に好きな席に座る。

……途中、封結の隣に座ろうとしている人物達がいたが、彼は机の隅に座った後に結梨華が流れるように座った。その隣に続くようにフランドールとレミリアも座る。諦めたかのようにその人物達はそれぞれの座席へ座ったり。

後は各々勝手に飲んで騒ぎだしたりしていた。魔理沙と図書館組は何やら魔法について討論していたり、文は霊夢と美鈴から異変の事を改めて聞いたり私的な事を聞いたりしてネタ作りをして。吸血鬼姉妹と結梨華の世話をメイドがして。封結はゆっくりと食べ進める。

時間が過ぎていき、違う意味で人と騒ぎ合っていたり、酔いつぶれて眠っていたりしている人物がいる中で……封結は宴会場である居間を抜け出していた。神社の賽銭箱の近くでのあがる階段付近の柱にもたれかかって座り、外に酒の入った入れ物を傍に置き、猪口をゆつくりと口に近づけて飲みながら月を眺めていた。

そこへ……一人の人物が彼の元に近寄り——屈んで彼の目線で話し掛けてくる十六夜咲夜。

「こんなところにいたのね、封結。やつぱり騒がしいのは苦手なのかしら？」

「苦手というワケではない。ただ、あまり長居する気がないだけだ。普段はこういう静かな場所が落ち着く。それより主人達は良いのか？」

「お嬢様達は眠っちゃったわ。今日は色々な事があったからだと思うけど……隣、良い？」

「別に構わん」

彼は咲夜の言葉を了承すると、彼女は彼がもたれかかっている柱に同じようにもたれかかる。彼が持たれている方向で示すなら、月が見えている南。彼女は東向きにもたれかかり、顔の向きを変えて酒を飲んでいる封結に話し掛けた。

「……昨日までは敵だったのに、こうして騒いで飲む機会があるとは思わなかったわ」

「大抵異変後は酒でも飲んでおけばそういう認識は無くなるんだ。これから先も異変が

あればそういう機会は訪れる事を頭に入れておくと良い」

「……異変、ねえ……でも、そういうのって異変を起こした側と解決した側でやるものじゃないの？ 部外者がそんな簡単に宴会に来られるとは思えないけど？」

彼女が思ったことを口に出し、彼に改めて問いかける。封結は酒を喉に通した後、彼女の疑問に答えた。

「だったら異変解決者になれば良いんじゃないの？」

「……私が異変解決者に？」

「そうすれば、異変の関係者って事で気楽に参加できるだろ？ まあ、ぶっちゃけそういう事は気にしないで宴会に参加出来るんだけどな。文がその例だ」

彼の猪口に酒が無くなったので、新しく注ぎながら封結は答える。再び酒を口に含んでいる中で、咲夜は彼にある疑問を。

「……どうして封結は異変解決者である事を名乗ろうとしないのかしら？ その方がお店でも興味本位でお客も来るんじゃないの？」

「結梨華が関連しているってのもあるが……それは違うと思うんだ。それはあくまで『異変解決者』としての俺。『店主』としての俺じゃないんだ。そうなったら違う意味で冷やかしが来る可能性もあるだろうし、腕っ節が強いだけの本当のバカが喧嘩を売りに来る可能性も無いとは言い切れない。大体、異変解決者というのは『強い』というイメー

ジがある。魔理沙は別として、代々の博麗の巫女に手をあげてはいけない。それに俺は外見が女々しく見えるからな。この長い髪の毛の所為かもしれないが」

「だったら切れば良いんじゃない？ そうしたら男らしく見えるだろうし……あなただったら格好良いと思うわよ」

酒が入っている所為かわからないが、咲夜は頬を染めながら彼に髪の毛を切る事を勧める。だが……彼は首を横に振った後、後ろでまとめられている髪束を触りながら答えた。

「どうもな、未練がましいというかなんというか……この方が安心するんだ」

「未練がましいって……その額にある眼鏡は？ 普段は額に掛けてあるばかりで、目元に掛けていないじゃない？ 視力は大丈夫なの？」

「ああ？ これ？」

彼は酒を飲むのを止めて縁側に置くと、眼鏡を外した後、咲夜に手渡した。

彼女は疑問に思うものの、レンズの先の景色を見ようとすると――

「……！ これって――伊達？」

「そう。伊達なんだよ。ぶつちやけ裸眼で普通に見える」

「そうになると、これはファッションなの？ 異変の最中掛けていたのも。そうになると邪魔じゃない？」

「違う店で店主の霖之助の眼鏡は本物だが……俺はこれをしている理由はちゃんとあるつもりだ」

「……それは？」

彼の意味深の言葉に咲夜は耳を傾けた。彼女の興味津々な態度に機嫌が良さそうに、彼は答える。

「何か眼鏡があったほうが——店主っぼいだろう？」

「……………（クスツ）」

「……………？ どこに笑う要素があったんだ？」

まさかの言葉に咲夜は笑いかけた。少し熱のある喋り方をしたとおもったら、彼女は——子供っぽいとギャップを受けたからだ。普段は物事に冷静に対処している彼が、『眼鏡があったほうが店主っぽい』という外見的理由で眼鏡を掛けている。予想外の

言葉に咲夜は彼の発言を面白く感じた。

彼はいたって真面目に答えたつもりなのだが、彼女が何故笑っているのかわからない。彼はその事を問うと、彼女は少し謝りの言葉を交えながら言う。

「ごめんなさいね。あなたの事だからもつと深い理由があるかと思つたから……その理由が予想外過ぎてちよつと、ね……」

「そうか……？ それなりの理由だと思ふんだが……？」

「まあ、良いんじゃない？ 人の感性はそれぞれだと思ふし、そのままできてくれたら——はい、返すわ店主さん」

「……何か納得いかん……」

不機嫌そうに言いながら彼は咲夜に伊達眼鏡を返してもらう。そして、彼女は話を交えるように、彼の耳元に顔を近づける。

「ねえ……もし、良いのなら——」

小声で、咲夜の唇から封結の耳元に言葉を伝える。話が終えると咲夜は離れ、確かめるように封結は尋ねる。

「……マジか？」

「ええ。お嬢様には許可はもらっているし、時間があるときにはね」

「……まあ、その時は——」

彼が言いかけているところで——襖が開き、酒瓶を持った異変解決者二人、メモ帳をもった文が現れた。その人物たちは各々のリアクションをとりながら、二人に話しかける。

「封結、やっぱりこんなところに——つてどうしてメイドと一緒に酒を飲んでいるのよ!? あんたは私に酒を注ぎなさいっ」

「二人して飲むよりは多数で騒いだ方が良いに決まっているぜ! ほら、二人とも戻るぞー!」

「あやや……こんなところで密会とは……スクープですかねっ!」

「……それなりに酒が回っているな、お前ら」

「じゃあ、戻りましょうか。話したいことは話し終えたし」

二人は促されるまま、宴会場の居間へと戻っていく中で……小声で咲夜は封結に話しかけた。

「……少なくとも、明日からもよろしく」

「……ああ。私用で少し俺は出かけるが……よろしく」

話し終え、夜遅くまで宴会は続いた……。

最終話 『日常』 ②

宴会が終わった次の日の朝。後はもう異変関係者達は日常に戻るわけだが……その中、霧雨魔理沙はいつものように封結の店である「名前の無い店」に来ていた。

「さてとと、いつもの通り封結から飯をたかるか。結梨華はしようがないとして……霊夢より先に来られたのなら結構意味があるぜ」

そう呟き、彼女は挨拶をしながら店に入ったのだが――

「おい、封結！ 結梨華！ 飯を買いに来たぜ――」

『――いらつしやいませ……つて、あなたは魔法使いの魔理沙じゃない……』

「……………は？」

魔理沙は一瞬困惑した。いつも聞き慣れているはずの二人の声ではなく、違う女性の声。それでも、聞き覚えはあるのだが。

彼女は声のした方向に振り向くと、会計する場所に座りながら本を読んでいる、清楚な服装を着て三つ編みを両耳の傍にしている――紅魔館の住人十六夜咲夜がそこにいた。

「あいにく、封結はいないわよ。結梨華ならまだ寝ているけど」

「いやいやいやっ!? 何で咲夜がここにいるんだぜ!?」

咲夜は当然のように言うが、魔理沙は疑問しか湧かない。魔理沙はその事について問いかけると、咲夜は平然と答える。

「お嬢様達は昨日は例外として、夜に活発的になるのよ。午前中でもうやる事を終えちゃってね……。暇な時間、ここで雇って貰っているのよ。残っている時間は有効活用しないと」

「……それはつまり……店員になっているのか!？」

「ええ。そうなるわね。ちゃんとお嬢様にも許可は貰っているし、彼も私を受け入れてくれたから」

彼女の言葉に驚きを隠せない魔理沙。魔理沙自身はとある理由で彼の店で働く事は好ましくない。しかし、自分が出来ないことをしている咲夜に、彼を店員に採用している事に。確かに店員は欲しいと言っていた彼だが、こんなに早く雇うとは思っていなかったからだ。

……ちなみに咲夜がレミアに許可を貰う過程で、内容は結梨華の正体を探るという方便にしているが。確かに彼女自身も気になるモノの、大して執着は無い。

色々と魔理沙は問い詰めたい質問が多数あるが……一先ずは店主の情報を求めた。

「じゃあ、封結はどこに行ったか知っているのか?」

「出かけてくると言っただけで、詳しい事は教えられてないわ。そんなに時間は掛からないって言っていたけど……心当たりある？ この事は結梨華も知らないみたいなのよ」

「うーん……あいつが行くとしたら両親の墓参りだが……その日はもう過ぎているしなあ……。買い物なら適当な人里か、香霖堂だと思うし……」

「(墓参りについては結梨華から聞いたけど……この事については腐れ縁でも知らないのね……そうなると思夢も知らないのかしら——)」

『——封結ー、結梨華ー？ ー飯をたかりに——つて、あんた達何しているのよ？』

魔理沙の情報を元に考えていた咲夜だが、ちようど良く博麗の巫女である博麗思夢が店に訪れた。手には霊撃札を持っており、彼女なりの「通貨」を持っているが……魔理沙を始め、この場にいるのが珍しいと考えている咲夜に視線を向けている。

考えていた事も含め、咲夜は彼女に魔理沙の質問を同様に尋ねてみた。

「あなたは知らない？ 彼はどこかに行つてくると言っていたんだけど……」

「知らないわよ。あいつはたまにどこかにフラフラしていくんだから。腐れ縁でも、そんなないちい封結の行動なんてわからないわよ。それより……何であんたがここに居るのよ？」

「簡潔に言えば暇な時間はここで働く事になっているわ」

霊夢の質問に当然のように返す咲夜。その事に彼女でも驚きの様子を見せる。

「はあっ!? 封結が!? あいつよほどな事が無い限り店員なんて雇わないわよ!? 私が善意で店員なつてあげようと言った時は断ったくせにつ!」

「……霊夢。本当は?」

彼女の言い分に心なしか似ていると思いつつ、魔理沙は本音を尋ねてみると。

「そうすればお店で食べ放題じゃない?」

「お前不純すぎるだろ……（私も言えた義理じゃないが）」

会話が続く中で、店の中の襖が開いた。眠そうに目元をこすりながら、普段とは違う服装で、白い和服で外見が幼く見える少女。

「むう……久しぶりの遅寝の満喫中なのにいるさいですよ……」

「結梨華……珍しいわね、あんたがいつもより遅く起きてくるなんて?」

「宴会で少し夜更かしの分があるんですよ……。普段、定時に寝ているもので。それで咲夜さんが代わりにお店をしてくれるという事で、結梨華はお休み中なのです……。後で龍神の像にお祈りしてきますが……」

ふあ……と、欠伸をしながら答える結梨華。そのような彼女に構わず、魔理沙は結梨華に咲夜の事について話し掛けた。

「……結梨華は反対しなかったのか? 新しい店員を雇うことについて」

「主人様がむしろ咲夜さんを採用したがつていたので、結梨華は反対する事はないです……。むしろお仕事仲間が増えて結梨華は嬉しいのですよー……」

結梨華は咲夜がこの店にいる事を肯定と示した。

しかし……誰一人知らない封結の所在について、疑問を持つていた……。

「——コホッ」

『? どうした封結? 風邪でも引いているのか?』

「……そう言うワケでは無いと思いますが……異変や宴会の疲れの影響もあるかもしれないね……」

「まあ、お前の場合は店の経営に、異変解決までやっているんだ。普段好きなことを没頭している霊夢とかと違うんだからしょうがないさ」

軽く咳き込みながら、とある人里から少し離れた一軒家に、封結はいた。彼は正座をして、珍しく敬語で話している。一方、彼の目の前に話し相手がいるのだが……その女性はあるぐらをかいて酒を飲んでいた。

彼女の振ってきた話題から外れ、本題に戻るように封結は話を再開させた。

「——それで、今回の異変である【紅霧異変】は以上です。無事に異変解決者である霊夢、同じく霧雨魔理沙が解決しました」

「今回の話を聞くとすると、霊夢が異変元凶者を退治したみたいだねえ……霊夢が作ったスペルカード勝負——弾幕ごっこで。霊夢の代で新しい規則を作ったときはどうなるかと思つたが……結構良いみたいじゃないか。私もやってみても良いかもねえ……」

「……貴方なら、大抵の妖怪は退けますよ。霊夢とは違うベクトルで強いんですから」

「ほう？　じゃあお前は私を人外とでも言いたいのか？」

「種族は人間ですが、実力は人間以上と言っているんです。侮辱などの内容は含まれていません」

「丁寧に説明してくれるね。まあ、お前が私を貶すとは思っていないしな。これは私の単なる意地悪だ」

豪快に笑いながら、封結に酒を注がせることを動作で示す女性。呆れながらも彼は彼女の杯に酒を注ぐ。

注ぎ終えた後で——彼はいつも思っていたことを彼女に言った。

「引退にしても、早すぎると思うんですけどね——今ではもう【先代の巫女】と呼ばれて
いるんですよ貴方？」

彼が言った【先代の巫女】。目の前に居る彼女こそが、霊夢の前の代である——先代の
博麗の巫女である。

封結の言葉に何ともないように言葉を返す先代の巫女。

「私の代の時は、名前では無く【博麗の巫女】と呼ばれていたからねえ……。それに、私
はもう出番はないのさ。霊夢は私と違って天才で才能に溢れているからね。これから
のことも考えても、私が引退しても何も問題は無い。しばらくの間幻想郷の管理は霊夢
に任せておけば問題ないんだよ」

「だとしても、もう少し霊夢にいろいろ教える事はあるでしょう？　巫女としての生活
態度とか生活態度とか生活態度とか」

「……まあ、腐れ縁——というよりは幼馴染みか。それについては封結が何とかするん
だな。お前は同年代の人間と比べると精神的に大人びているんだ。教えるとかそうい
う類いは得意分野だろう？」

「……間接的に面倒くさいと思ってませんか？」

「本音でいうならそうだね」

彼の問いかけに素直に答える先代の巫女。それでも彼女は言葉が続ける。

「一時お前のいた『童の集い』でも、年長だった所為もあると思うぞ？ それでお前は全般的に年下には甘い。だから霊夢はそれも含めて、お前を頼りにしているんだ」

「頼りというよりは我が儘の気が……」

「むしろ霊夢は私より封結の方が興味があるから軽く嫉妬を感じている」

「逆に貴方が霊夢の面倒を俺に触れさせたのが一つの原因ですからね？」

「それを置いておくとしてだ」

露骨に会話を逸らした先代の巫女だが、何食わぬ顔で違う話題に移した。

「……お前がここに來てくれる事はありがたいと思っている。より詳しく、霊夢の近況や異変、お前の生活模様を聞いて安心できるよ。これも私にとっては一種の楽しみだからな」

「……それは何よりです」

「それじゃあもう報告は以上か？ 他に伝えることは？」

「無いかと。では、俺はこれで——」

話が終わり、封結は立ち上がり去ろうとしたところで……先代の巫女から制止の声が掛けられた。

「ああ、ちよつと待つてくれ。それとは別に聞きたい事がある」

「……何でしょうか？」

「お前のところで居候している……結梨華だったか？ どうだい？ その子の様子は？」

「……幻想郷にちゃんと溶け込んでいますよ。現状、問題はなさそうです」

「そうか。なら帰つてよし」

「……失礼します」

最後にきちんと封結は別れの挨拶をし、部屋から出て行つた……。

「……あいつがあのおの訳ありの少女の名前に【結】を使つていたときは驚いたが……そこは、両親に似たのかねえ……。封也、結衣……お前達の息子はきちんと立派に育つていよよ——む？ いつも何かを伝え忘れたような気がするが……まあ、良いか」

封結が人里で店に移動しようとしていたところ。寄り道がてらに人里の違う店の店頭

にある品を見定めていた。

「…………この商品を取り入れるのも良いかもしれない…………しかし、それをどう工夫して、売るのが問題だな…………」

いろいろと店の改善点、商売の考えを巡らせる中で考えたところ——

『あら？ 何をそんなに熱心に見ているのかしら？』

——女性から声を掛けられた。彼は声の主に反応し振り返ったところ——その女性は紫を主体にしたドレスを着ており、ナイトキャップに見える、リボンがついている帽子を被っている。髪の毛は長髪で枝分かれした髪の毛の束にリボンを付けていて、さらには日光を遮るための日傘をさしていた。その女性の雰囲気は何故か近寄りがたい。そのような印象を封結は感じていた。

少し彼は対応に戸惑ったものの、一先ず彼女の言葉に返事をした。

「……………こういういろんな店の商品を見て観察することで、ウチの商品としてどう受けるか考えているんだ。世の中、店は競争するからな」

「その口ぶりから判断すると……あなたもお店を経営しているのね。見た目、若そうに見える人間なのに」

「まあ、そうだ。名前の無い店だが……それなりに繁盛しているつもりだ。気があつたら寄つてくれると助かる」

「気が向いたら寄つてみるわ……あなたのお店はいつも騒がしいみたいだから少し面白そうよね。じゃあ、私はこれで」

適当な話を交えた後、その女性は歩いて立ち去つて行つた。だが……彼はその女性に疑問を覚えていた。

「(……?) 別に商品を見るぐらい普通だろうに。それに、騒がしい事……まるで俺の日常を知っているかのような言い回しが気になるが……遠目で見ていたんだらうか。やっぱ、霊夢達がいることによつて少し客の出入りが変わってくるんだらうな……それをどうするか……?)」

少し悩みを抱えながら、封結は自分の店に帰つて行つた……。

人里から離れた場所。封結に話しかけた女性は、思っていたことを呟いていた。

「……今日、初めてコンタクトをとってみたけど……こうして触れ合ってみるとただの人間よね——藍らん。いるかしら？」

『はっ』

彼女の声に、一人の女性が現れた。その女性は服の上に青い掛けがあり、服の手の袖口が広いおかげか、両手を袖口に入れて腕を組むようにしている。彼女も帽子を被っているのが……頭には三角形の形が突出している。さらには彼女の後ろ腰下の近くには——狐の尾と見られる尻尾が九本あった。

その妖怪と判断できる女性——藍と呼ばれた女性は、目の前に女性の言葉を聞く姿勢を。

「あのお店の状況はどうかしら？」

「現状は博麗の巫女、人間の魔法使いの異変解決者がいます。さらには、今回の紅い霧の異変の首謀者の従者である十六夜咲夜も確認できます。会話から察するとなれば、紅魔館のメイドはこれからはあのお店と深く関わっていきそうです」

「……花結びをしている少女の正体はわかっただかしら？」

「……紫ゆかり様のスキマ越しで見させてもらいましたが……封結、彼の能力で妨害されていて正体はわからずじまいでした。おそらく、あの図書館での出来事は誰もわからないか

と……。それに加え、彼の能力はその花結びの少女に掛けていているようなので……。彼女の正体を知るためには、彼の能力を解く必要があるようです」

「……封印や結界関係ならば彼は霊夢や私より上……。彼の能力は縛り事を与える能力だもね……。藍、それはしようがないわ」

そして【紫】と呼ばれた彼女は片手をかざし……。空間が歪んでは、新たな空間を生み出した。その空間の背景は、多数の目が映し出されている。

その空間を彼女は作りながら……。どこか、寂しげな表情をしながら言う。

「もしも、彼が幽々子の時代に生きていたのならば……。いえ、考えるのは止めましょう。過ぎ去った事はもう後戻りは出来ないわ」

「……紫様……」

「それにしても……。不思議よね。霊夢は縛られない能力だというのに、逆に彼は縛る能力だもの。これほど正反対な能力はないわ。彼が霊夢に気に掛けるのも、わかる気がする」

彼女が作った空間を広げ、人が入れるほどの大きさにする。そして目線で【藍】を促し、彼女がその空間に入った後で……。【紫】は続くようにして入って――

「これからも、彼の動向も注意した方が良いわね。封結……いえ、——封結」

——二人の女性は、その場から消えていった……。

『——おい、帰ったぞー。結梨華、咲夜ー』

名前の無い店に店主である封結が帰ってきた。居候をしている少女の名前と、新しく雇った人物の名前も。その二人はきちんと反応し、彼の元に寄つて来た。

「お帰りなさいですー！」

「お帰り。一言伝言を残して、どこに行っていたの？」

「ちよつとな。違う店の品を見定めたりしていた」

適当に彼は質問に答えているところで……店の奥から、今でも見慣れている二人も出迎えた。

「封結く……く飯く……」

「朝っぱらから来たのにも関わらず封結がいらないんだもんな……ま、封結も羽を伸ばしたいのもあるんだろうけど。それより腹減ったぜ」

「……意外にも、先に食ってなかつたんだな」

少し意外そうな反応をしていたが、その事に霊夢は少しいらつきを込めながら彼の言葉に意見する。

「咲夜がそういう事に厳しかったのよ……結梨華は店の経営を咲夜に委ねているって言うていたし、真面目に対応しすぎなのよ」

「まがりなりにも彼にお店の事は頼まれているからね。ちゃんと彼が望むような働きはするわよ。あなた達みたいな物々で商品を買おうだなんて甘いわ」

当然のように霊夢の発言に意見する咲夜。そして話を戻すように霊夢は最後は弱弱しくだが言う。

「それで封結が帰ってくるのを待っていたのよ。店主であるあんたが戻れば権限は封結にあるわけでしょ？ だからご飯……」

「……そうなるって魔理沙もそうだったのか？」

「そうだけ。だから私達はさっさと飯が食いたい」

霊夢の言葉を聞き、彼の確認の言葉に頷きながら答える魔理沙。彼はため息をつきながら、行動を移し始める。

「はいはい。じゃあ作ってくるから待っている……結梨華は手伝ってくれ」

「わかりましたっ。結梨華、いつも通り頑張っちゃいますよっ」

彼が動くのと同時に結梨華も動き出す。二人が動くこうとしている中、咲夜は彼に声を掛ける。

「……結局、この二人の分の朝食も作るの？」

「いつも通りに霊撃札とマジックポーションを持ってきているだろうから……何かしらは代価してもらっているわけだからだ。咲夜は気にしなくてもいいからな。お前はここの店員でもあるからそういう代価はいらん。まかない食だと思ってくれ。俺が支度している間、店番を頼んだ」

「……ええ。わかったわ」

きちんと頼りにしていてくれるのか咲夜は特に意見する事はなく、勘定をする場所に移動した。店の三人はともかく、腐れ縁の常連は居間へ移動しては背中を伸ばして畳に寝ころび始めた。

店主である封結は少し呆れながらも、結梨華と共に少し遅い朝食作りを始めた……。

一通りの仕事を終え。昼前になる時間になったころ、咲夜は自身が持っている懐中時計の時刻を確認しながら封結に話しかけた。

「封結。そろそろ私は帰らなくちゃいけないわ。昼は紅魔館で仕事をしないと」

「ん？　そうか。とりあえずありがとな。咲夜がいる分、全然仕事効率が違くて助かった」

「……そう。褒め言葉として受け取っておくわ」

彼の褒める言葉に、どこか満更でもなさそうな咲夜。その二人の様子を見てからはわからないが……霊夢と魔理沙は彼に行動を促した。

「じゃあ封結ー。今度はお昼ご飯ー」

「昼ごはんは一体何するんだ？　まあ、封結が作るもんだつたら何でも構わないが」

「お前らは何時まで居座るつもりなんだ……？」

遠慮のない二人に疑問しか思わない封結。何もしないでゆっくりとしていた二人を判断してか、咲夜は注意するように言う。

「……せめてあなた達二人で料理しないと思わないの？」

「だって正直めんどくさいもの。私はここにいる時は封結の料理を食べてゆっくりするって決めてんのよ。ここは良い空間だわー」

「私は別に作っても良いんだけどな。ただ……封結はあまりキノコ料理が好きくないん

だ」

「……………そうなの？」

少し意外そうに咲夜は真相を彼に確かめる。その彼は少し悩むようにしながら答える。

「……………まともに自分の能力で保護していないときに食べた時はトラウマでな……………。その時の魔理沙は毒キノコの種類があんまりわかっていない時だったんだ。それで体調を崩して以来……………キノコ料理はあまり得意じゃない」

「封結さ、昔の私と今の私はレベルが違うんだぜ？　そろそろ私の料理を食ってみろつて。病みつきになるぞ」

「……………気が向いたらな」

曖昧な返事で魔理沙の言葉を流す封結。どうやら現在は食べる気はしないらしい。

その光景を見てか結梨華は、どこからか楽しそうに言う。

「何だか『家族』って感じがしますね……………主人様がお父さんで、咲夜さんがお母さん。霊夢さんと魔理沙さんは娘さんみたいです」

「それは異議を申し立てる（わ）ぜ」

彼女の言葉に不満があるように言う腐れ縁の二人。あまり詳しい結梨華の事情を知らない咲夜だからこそ言える言葉。

「……見た目お嬢様の外見年齢に指摘されるのってどうなのかしらね……?」

どこか気分がよさそうに言う咲夜。それでも二人は不満そうな表情をしている。

そして話を中断させるためか、封結は咲夜にある事を話し掛けた。

「さてとと、咲夜には給料を払わなくちゃな。とりあえず労働時間から考えて——」

「あ、封結。お金は別に良いわ」

「……は? マジか?」

急な彼女の断り。彼は信じられないような声を出した後、彼女は言葉が続けた。

「でも……給料の代わりにお店の商品を貰っても良いかしら? 別に私はお金に困って

ないしね。それだったら生活に役立ちそうな商品や、あなたが作った食料関連でも良い

と思つてね。わざわざお金をもらつて買うよりも、労働をお金として購入するのも良い

でしょ?」

「咲夜さん凄いですっ! きちんとしたお店の売買の仕方の一つですっ」

彼女の考えに結梨華は賞賛。しかし、当本人である封結は複雑な顔を浮かべている。

「う、うーん……間違つたことは言っていない。確かにお金を介さず手っ取り早い買い

物ではあるが……何か違和感があるな……。しかし、労働してもらつたから断るに断れ

ないしな……」

「肯定として受け取っておくわね、その言葉。じゃあ、何選ぼうかしら……」

彼の肯定ともいえる返事に咲夜は機嫌を良くし、店の中で商品を選び始める。その事に便乗しようとしたのだろう。霊夢と魔理沙も店の中を動き回り始めた。

「じゃあ私も霊撃札を払って買いますよ。お昼ご飯が出来るまでね♪」

「そうだなー……私も何か探してみるか。封結、マジックポーションを適当に置いておくぜ☆」

「……お前ら……」

彼の言った事は聞こえていないようで、霊夢と魔理沙も店の中を練り歩く。彼はその二人に声を掛けようとしたのだが……店の外から、来訪者の声が店の中に響いてきた。

『すみませんー！「文々。」新聞発行者の射命丸文ですけど……封結さんはいらっしやいますかーっ？』

「……文か？」

「ですね。主人様、お昼ご飯の材料は結梨華が用意しておくので、対応をお願いしても良いですか？ 一応、文さんも主人様の事を呼んでいるので」

「……ああ」

結梨華に促され彼は一先ず【買い物】をしている三人を置いておき、店の外に出る。そこにいたのはもちろん、紅魔館に一緒に訪れた烏天狗の射命丸文だ。彼女は背負っているカバンから新聞を取り出し、彼に手渡しながら話し掛ける。

「封結さんは当事者の一人という事で知っていますが……これは紅霧異変についての新聞です。それでどうぞ」

「……新聞、か……まともに読んだのは初めてかもしれないな……」

「あ、それで埋め合わせの事なんですが……良いですか？」

「……一応聞こう、何だ？」

彼女の言った埋め合わせ。封結が異変解決者としてのことを秘密にする代わりに言った事だ。彼は彼女の言葉に耳を傾ける。

「それはですね……私の発行する『文々』」新聞をお店の商品としてどうかと思いましたがね」

「……新聞を？」

「はい。一応、私なりにいろんな方に読んで貰えるようには努力はしているんですが……中には私が妖怪という分類上、怖がる人間の方がいるんですよ。それならば、人間の方に売ってもらえれば良いのではないかと思っただけです」

「……まあ、中には妖怪を毛嫌いしている奴もいるからな」

「それに、それだけはないですよ？　ここの記事をよく読んでみてください」

文は封結が広げながら新聞を読みながら聞いているところに、ページを捲つてある記事のピックアップ。そんな大見出しではなかったが――

「……………俺の店の紹介がある!？」

「そうです。本当なら広告料として私がもらいたい気分なのですが……そこは妥協して、無料で提供します。封結さんや結梨華さんがお店の情報を広めるのは私がやるという事です。もしも仮に直接私の新聞を買う方がいるとして、その記事に興味を持たれたのなら……お店に寄るかもしませんね。どうですか?」

「……メリットは確かにある。俺が大した労働をせずに〔店主としての〕宣伝ならば俺は一向に構わない。よし、その条件を飲もう!」

「あやや♪ ありがとうございます!」

彼女の説明に自分に利益があると判断した封結は申しれを受け入れた。そして彼はさらに交渉に入ったのだが――

「それで……何部お前のところから仕入れれば良いんだ? 単価はいくらなのか――」

「その事ですか? お金はいりませんよ?」

「……………は? マジ――」

再び彼の間抜けみたいな声を出そうとしたが――デジャビュ。察しのついた封結だが……確かめる意味合いで、彼女に問いかける。

「……………まさかだと思うが、新聞で商品を買うつもりか?」

「お察しの通りです! いや……一人暮らしとなると、一人分の食事を作ったり調達

したりなど少し億劫に感じていましたね……。でも、封結さんのお店ならばそんな事を気にする必要はないと思ひまして。過去に霊夢さんが霊撃札でお食事していることで、常に封結さんは複数人の料理などをしているので、私としても効率が良いのですよ！ では許可も頂いたのでとりあえず——何部かはお店の商品をとって飾つてきますね。それで、今回はお昼ご飯を頂くという形でお願ひします！ ではっ！」

そのまま彼女は店内に入っていく。呆然としている封結をよそに、文が入ってきたのがわかつたのだろう。結梨華が始めに対応していくなか、店内にいる人物の会話が聞こえてきた。

『いらつしやいませ——つて、文さん？ その新聞はどうしたんですか？』

『この新聞を商品として置くことを封結さんの許可を得たのですよ！ それで今回は買物ということではなく、この新聞の分のお昼ご飯でも頂こうと思ひまして！』

『ほわく……新聞を商品として扱うとは……主人様見境無しですね……』

『——本当にここはいろんなお客が来るのね……』

『あや？ これは紅魔館のメイドの咲夜さんじゃありませんか？ 霊夢さんと……同じく常連だという魔理沙さんはいらるのだろうと思ひましたが……何故貴方がここに？』

『時間があるときはここで働かせて貰つているのよ』

『あややつ!? これはスクープですか!? 『店主と店員の秘密の密会』みたいなの!?』

『——文、そんなこと封結に限って無いから……』

『——霊夢の言う通りだぜ。ところで……封結はどうした?』

『彼はまだ外にいるみたいですが……何か考え事でもしているのではないですか? 新聞の値段など』

『封結——! 早くお昼ご飯作りなさいよ——!』

会話の最後に、霊夢の催促の声。彼は遅れてその声に気づいたが……悩むように片手で頭を支えながら溜息をつく。

馴染みの腐れ縁の常連がいて。

訳ありの居候看板娘がいて。

新しい店員、客もいて。

それなりに店が繁盛しているから良いものの、少し対応の仕方に後悔しながらも、彼は店の中に戻っていく。そして店の中にいる人物達に、言ってもしょうがないことかもしれないが——名も無き店の店主はこう言う。

「——頼むからちゃん和金を払ってくれ」

——幻想郷に店を構えています 完結——

クロス『パラレル・イマジンワールド』

ある幻想世界。そこにはよろずなものを多種多様に扱っては売っている店が存在する。その店の名前は——実は無い。名前がないからといって代名詞で「あの店」や「この店」と呼ばれることはなく、「名前の無い店」と呼ばれている。

その常連客は、幻想郷を平和を守る異変解決者がその店にいたり、赤い洋館のメイドの人物がそこで一定時間「アルバイト」の間隔で働いていた。最近では烏天狗も常連客の一人になっているという。

その中、その名前の無い店の看板娘である白いパーカーを羽織っては花の髪飾りをしている【結梨華】の少女は店番をしていた。現在客がいないので本を読んで待機しているが、お客が来るとなれば営業スマイルを浮かべては、天真爛漫な表情で客を迎えている。

その中、店には二人の来店者が。その二人は結梨華にとつては初めて見たお客。本を読むのをやめ、いつもの彼女らしい笑顔を浮かべて来店を歓迎した。

「いらっしやいませなのですよーっ！」

『ん……。こんなに幼い子が店番を……。むっ？』

『? どうした親友? この子に何か興味でも?』

『いや……なんでもないよ。じゃあせつかくだから店員さん、このお店でおすすめの和菓子とかつてある? 風の噂でこのお店にはコンビニ——もとい、いろいろなものを扱っているって聞いたんだけど……』

二人の男の来店者。初めに結梨華に反応したのは、赤いネクタイをきつちりと首元につけながら、それに合う黒い上着に黒いズボンを着ており。次の男子は執事服、だろうか。前者の男子と比べると着崩しており、少し開いた無名も元に袖まくりした腕。そして男子では珍しく髪留めをつけており。

幻想郷では見慣れない格好に結梨華は気になったが、あくまで現状の結梨華はいつも通りにお客の相手を。

「和菓子ですね? それだったら主人様が作ったこしあんの大福がお勧めなのですよっ
!」

「お、大福あるんだ。よし、食べ歩きにはこれを食べよう」

「大福と聞いて即決だな、お前さん……」

「大福こそが和菓子で至高だと思っている」

彼女のお勧めを聞いてはすぐさまに注文。結梨華は注文通りに品物を用意し、金銭を使ってでの等価交換を終えたあと、大福について語っていた男子はどこか満足そうな表

情を浮かべては、随伴する男子はどこか呆れながらもその店を出ていく。

二人が去ったのを確認した結梨華、彼女が抱いた違和感を口に出していた。

「……へアピン男性の種族が、【荒人神】……？ 聞いたことの無い神様です……。そしてなによりも、主人様の異変解決の格好に似ていた男性のにおい——【お爺様】に似ていたような……？」

——そして、事は起こる。

『——紅魔館が乗っ取られた？』

『ええ……乗っ取られたんだけど……』

『……？ 何か腑に落ちないようだな……？』

後日。アルバイトとして『名前の無い店』で働いている、紅魔館のメイド——十六夜咲夜が店の主人である封結に話を持ち掛けていた。

話から見るならば普通は深刻な話のはずだが、どこか咲夜は困っているような表情を

浮かべており。同時に店に居座っていた紅白の脇の空いた巫女服をきた——博麗霊夢は詳細を咲夜に尋ねた。

「……乗っ取られたという割には、落ち着いているわよね、あんた」

「最初は落ち着いていなかったわよ。急にヘアピンの男が『この紅魔館はしばらくの間、オレ達の根城にする』って。それはもちろん、私達は抵抗したけれど……その男一人に、私達は負けたのよ」

どこか疲弊しているように語りながら言う咲夜に、同じく居座っていた魔法使い——霧雨魔理沙が驚きの声をあげた。

「はあっ!? 一人の男に負けたのかよっ!? じゃあフランは!? フランはどうしたんだ!? 私達で共闘してようやく勝てたフランは!?!」

「それも、ヘアピンの男に負けたわ。それにしても……そのヘアピンの男、どこか私達の動きがわかっているようだったよね……」

「……それでだ。現状、紅魔館はどうなっているんだ?」

事の深刻さを理解した封結は情報を求めたところ——どこか咲夜は苦笑い。

「それが——普通に馴染んでいるのよね、その男……。昨日も『うの』というスペルカードのような何かを使って、私達と遊んでいるのが現状なのよね……」

「……………すまん。その男は何がしたいんだ?」

「それがわかったら何も苦労しないわよ……。いつの間にかに紛れ込んで、お嬢様でさえヘアピンの男の遊びに参加しているくらいだし……」

もつとも、いつも勝つのはその随伴している男だけだね、と説明を加える咲夜。そこで、ある事を思い出した咲夜は封結に言う。

「……そういえば、封結。あなたの異変解決時に着る服装あるじゃない？ あなたは白だけど……黒の服を着ては、同じような赤いネクタイをしている男もいるのよ」

「何？ 俺と同じような服だと？ あれは香霖から仕入れたものだが——まさか、その二人は『外来人』と呼ばれる人物か？」

「そうね……その可能性が高いわ」

外来人。この言葉は主に幻想郷の外から来た人物に総称されている言葉である。厳密にいえば、最近幻想郷に来た咲夜達紅魔館の人物達も外来人の分類だが……。

そこで、咲夜が改めて本題。

「霊夢も魔理沙もちょうどいて良かったわ。紅魔館を占拠している、主に主犯者のヘアピンの男を退治して欲しいのよ。正直あなた達でも勝てるかどうか危ういくらいだけど——」

「あんななめてんの？ そう簡単に負けるはずが無いじゃない」

「そーだぜー。前の紅霧異変の時とは違って、ちゃんと前情報はあるしな。昨夜たちが

私達にどんな戦いを教えてくれればもう楽勝だぜ」

「だといいいけど……そういえば結梨華はどうしたのかしら？　あの子だったらこの手の話には食いついてくるはずだけど……？」

ふと思ひ出したかのように、店内を見渡す咲夜。その彼女に封結は事情を説明。

「何か気になる事が出来たつてことで、ちよつと実家に帰省しているぞ」

「実家……？」

「ああ、実家だ。普段は念話的なもので会話を済ませることはあるんだが、結梨華自体が直接動く事は珍しいことだけだな……。まあ、それはともかくとして。その外来人たちが幻想郷を脅かすかどうかは不明だが、不確定要素は排除した方が良いな。俺達も動く。それで咲夜、その主犯格の男は名前はなんていうんだ？」

普段はめんどくさがりな彼だが、関わりの持つ人物の『お願い』は聞いてくれる。情報を集めるために彼女に問いかけたところ——咲夜は答える。

「確か、彼はこう言っていたわ。【心お気楽荒人神】——本堂静雅つて」

「——しっかし、ここまでスムーズに進めたもんだなあ……」

「本当ね。少なくとも紅魔館を乗っ取ってると聞いたから、そこらの妖精達が撃墜しにくると思っていたのに……」

「ま、楽に進めることは良い事だと思っぜ。このままさつさと異変解決だ！」

封結、霊夢、魔理沙は紅魔館内にすでに入っていた。中華風の門番、紅美鈴がいたが、現状が現状なので、彼女も三人を通していた。その際美鈴が現状の紅魔館の事を表すと、「まあ、一応平和と言えれば平和なのですが、お嬢様の威厳が、ですねぇ……」とどこか遠目だった。

閑話休題。

飛翔しながら進む霊夢と魔理沙、特製のローラーブレードで進んでいく封結だったが——一人の男が、三人達の目の前に歩いて現れた。

『ん………咲夜から聞いたけど、異変解決者が本当に来たねぇ……。博麗霊夢に、霧雨魔理沙は確認。それで………男の異変解決者？ それに君が着ている服って外界の服じゃ………？』

その男は、封結の服装黒パージョンと言つても良い。違いは数点あり、封結は髪の毛は縛つては腰まで長さがあるが、彼の髪の毛の長さは一般的だ。心なしか、彼の頭上の髪の毛は若干倒れかけの角のように、後ろに反れながらまとまっている。その印象は、どこか優男にも見える。

彼の出現に行動はとりあえず止まり、霊夢はその男にどこかイラつきながら言葉を飛ばす。

「あんたが私達の休憩時間を奪つた〔ほんどうしずまさ〕って奴？ だったらさつさと退治されなさい！」

「……うーん、ちよつと〔君〕に言われるとちよつと傷つくなあ……。まあ、それはともかくとして。自分は静雅じゃないよ。強いて言うなら、今回の主犯の仲間、かな」

「なんだ。主犯じゃないのか。じゃあ下つ端は封結に任せるとして——私はさつさと主犯を退治することにするぜ！」

標的の人物ではないことが判明し、魔理沙はスルーしてそのまま箒にまたがってはそのまま飛翔して通りすがつた。反応に遅れた霊夢は封結に「じゃあ、封結。さつさと片付けてくるのよ」と気楽に事を押し付けながら、彼女も男を通りすがつていく。

その様子を見守っていた男だが、封結は今の光景を疑問に覚え、思つた事を問いかける。

「……追わなくてもいいのわ？」

「追っても良いんだけどね。でも、彼女達の相手は静雅に任せるとするよ。彼女達以外の人物を担当するのは自分だって静雅に言われているからね」

「……そうか。ならさつさとお前を片付けて——霊夢達を補助しないといけないからな！」

戦闘意欲を見せるためか、封結の持つ「鬼切」を鞘をつけたままで刀を向ける。それに対して目の前の男は、一枚の紙——スベルカードを持ち出して、宣言。

「ま、こうなるよね。静雅達が決着着くまでやろうか——武符「リトルセイバー」
彼の左手に、半透明の赤い色の西洋の剣が出現。

そして、二人は【剣】を構え——戦いが始まった。

「——さあ、さつさと異変の首謀者は出なさい！」

「そうだけぞっ！ 霧雨魔理沙様のお通りだ！ さっさと退治されるー！」

大広間への扉を蹴破る勢いで、扉を弾幕で吹き飛ばす霊夢と魔理沙。彼女達が目の向けた先には——玉座に頬を着きながら座り、見定める男。

「——クツクツク——ようやく来たか、異変解決者の少女達よ」

「……何かバカっぽい雰囲気しているわね」

「ああ。何かレミリアが背伸びしている感じがするぜ」

「謂れない風評被害がレミリア嬢を襲う！ ……つてか、わざわざそういう演技しているんだからさあ、ノツてくれよ……」

いかにも自分がそうですと言わんばかりに声をかけた男だが、その返しの言葉は毒があり。思わず座りながらもこけるかのように座っていた玉座から位置がずれ、つまらなそうに言う男。

しかし、どのように男が言おうが異変解決者は関係ない。ここで改めて男の情報を霊夢達は求めた。

「それはともかくとして。あんたが紅魔館を乗っ取った【本堂静雅】って奴ね。そうじゃなくとも部外者だからやつつけるけど」

「そうさ。オレが皆大好き【心お気楽荒人神】の本堂静雅。この幻想世界に旅行気分で行ってきた」

「誰が旅行気分で紅魔館を乗っ取るんだぜ？　そもそもアラヒトガミつてなんだよ……？」

「簡単に言うとおれの種族の事だな。簡略に説明するならば、『神々を滅ぼす神』だ」

「……は？」

魔理沙の問いに答えた本堂静雅の言葉に、思わず聞き返す反応をした二人。その答えは度肝を抜かれたようだが。固まっている二人にフオーするかのよう説明する男。

「まあ、おまげ感が凄いなよな、この種族。神々を滅ぼすつもりはないから安心してくれ」

「どう考えても厄介ごとを持つてくる神じゃない！　あんたの存在で博麗神社の神様が滅んでくれたらどうしてくれるのよ!？」

神様といえはいるかどうかは定かではないが、形では神社の巫女である博麗霊夢にとって静雅の存在は害悪だ。さらには異変といえない今回の事件かもしれないが、元凶が目の前にいる。

なら、答えは簡単——弾幕で交渉するだけだ。

霊夢の言葉の喋り具合から判断したのだろう。すぐさま魔理沙は箒に乗り、本堂静雅に弾幕を放ち始める。

「霊夢の言う通りだ。お前の存在で何か異変がさらに起こるといふのなら——すぐさま

退治するまでだ！【マジックミサイル】！

先手必勝の魔理沙の攻撃。質量の濃い弾幕のミサイルを静雅に放った。

当本人の静雅はというと——どこかから一瞬で槍を出現させては——

「そいやっさ！【リフレクトジャベリン】！」

——丁寧に魔理沙の弾幕を踊るかのようにして体を動かしながら槍ではじき、お返しに全てはじいた魔理沙の弾幕が霊夢達に跳ね返った。

その行動に驚愕していた魔理沙だったが、霊夢の行動は迅速だった。

「！——【ホーミングアミュレット】！」

すぐさまお札を取り出し、丁寧に魔理沙の弾幕を相殺を試みる霊夢。おかげで大多数の弾幕を相殺できたが、全ては相殺しきれなかった。とはいえ、残りは簡単だ。荒くなった弾幕の攻撃をちよんよけ——グレイズするだけだ。二人は残った弾幕を躲していく。

全て攻撃を躲し終えた二人。すぐさまフォローしてくれた霊夢に魔理沙は礼を言った。

「助かったぞ霊夢！まさか弾幕を跳ね返すなんて予想してなかったしな……」

「私だって最初は驚いたわよ。あそこまで丁寧に弾幕を処理するとはおもってなかったもの。それにただはじくだけじゃなくて、余計な動きを交えながら躲すなんて……！」

「はっはっは。ただの弾幕ならオレには効かんよ。そら、もつと出し惜しみなく攻撃するといい！ こつちから行くぞ——槍符【天からの五月雨】！」

自身を自負しながら次に男はスペルカードを使用した。そのスペルカードは男の周りに槍の形をした弾幕が形成され、男はそれを天井に向けて放った。

最初はどこに撃っているんだと困惑していた異変解決者達だが、その答えを知ることになる。

——天井に当たった槍の弾幕が反射し、雨のように霊夢達に襲い掛かったからだ。

「！なるほど……だから雨という文字を弾幕つてわけね……！」

「中々質量のある弾幕だな……！」

「そら、攻撃はまだ続くぞ！」

続いて槍の弾幕を生成し、再び天井に向けて男は弾幕を放つ。二人はこの時点でのどのような弾幕か分析したのか、後は一回の単純に回避行動をとるだけ。魔理沙、霊夢の順にスペルカードを構え、宣言しようとしたとき——霊夢は宣言中で何かに気づき——

「そんな攻撃はもう見切ったぜ！ 今度はこつちの番だ！ 魔符【スターダスト・レヴァリエ】！」

「さっさと終わらせる！ 霊符【夢想封——】！ 霊符【封魔陣】！」

何かに気づき、攻撃系スペルから防御系スペルに切り替えた霊夢。その事に疑問に

思っていた魔理沙だったが——その答えがわかった。

「——があっ!?! う、後ろから、弾幕が……!?!」

——魔理沙の背中に弾幕が被弾した。言わずもがな、その弾幕の正体は——何度かの壁などの反射をした静雅のスペルカードの弾幕。彼女は攻撃中だったスペルカードが強制中断され、弾幕の量は中途半端に。

後は静雅は簡単だ。攻撃の量が少なくなつた魔理沙の弾幕をはじき、躲すだけ。おまけに霊夢は防御を優先しているので、彼女の攻撃の弾幕もない。

結果として静雅は無傷。霊夢は防御に周り、魔理沙にはダメージが蓄積された。

攻撃を終えて、今の二人に言葉をかける静雅。

「おー、霊夢はどうかかなと思つたが、魔理沙は被弾したか。まあ。猪突猛進なお前さんなら情報の刷り込みの後、攻めてくるとわかつていたからな。お前さんは本当に騙されやすい」

「!?! ……お前、私の事を知っているのか?」

知っているかのような発言に、言葉をとぎらせながら問う魔理沙に静雅は含み笑いを浮かべながら答える。

「ククク……オレの眼は未来を見通せる眼があるんだ! おかげで霊夢は警戒する姿が見え、魔理沙は構わず突進する未来が見えたからな。後は簡単に対処ができる!」

「み、未来が見える……!?!」

「そ、そんなやつとどうやって戦えばいいんだぜ……!?!」

「嘘だ」

「嘘かよ?!」

一遍信びよう性のある能力のようなものに霊夢が驚き、どう対処したらいいのか困惑していた魔理沙に、真顔で自身で言ったことを否定する静雅に、二人は耐えきれずツツコミを。

「さすがにオレはそこまで改造されてねえ……。体は普通の人間と同じだ。未来を見通せる能力なんぞあつたら宝くじでも買つて大儲けでもしてるわ」

「ふざけた奴ね……。一瞬信じかけたじゃない!」

「(……こんな奴から被弾したのか……)」

「まあ、それはともかくだ。オレのターンはまだまだ続く! 神符【戻りゆく軌道線】!」
違うスペルカードを宣言する男。宣言をし終えると彼から波紋のように多数の球の弾幕が拡散し、霊夢達に正面から襲い掛かるが、二人は冷静に回避、

——だが、今度の二人は最初から警戒を怠らない。

「霊夢! どうせあいつのことだ! あいつのスペルカードは何かしらセコイギミックでもある! 霊夢はその対処に当たってくれ! こいつは私かぶつ飛ばさないと気が

済まないぜ！」

「不器用なあんなならパワーでまっすぐピチュラせた方が良いでしょうよ！　だから——あんたの言う通りにしてあげる！」

すぐさま霊夢は躲し終えた後には後方を警戒し、振り返る。すると彼女の読みは当たっていたのか、躲した弾幕が急に止まり、数秒経ったのちに放たれた軌道線に沿って、弾幕が戻ってきた。

「！　やっぱりね……スペルカードに「戻りゆく」なんて言っているから戻ってくると思ったらビンゴよ！」

「おっふ。さすがにオレの言葉は信じないと思っただのにな……嘘をつく子芝居でオレの言葉を信じさせないようにしたのに。何故だ？」

「どうやら先ほどの子芝居は誘導もあつたみたいだ。静雅に疑問に、単純に霊夢は答える。」

「そんなの——【勘】に決まっているじゃない！」

「把握した」

「把握したのかよ!?!」

普通なら「そんなもので読まれてたまるか」とでも反論すると思っていた魔理沙だが、静雅はどこか納得するかのようには頷いていることに魔理沙は追いつけない。

霊夢は、もうやる事が決まっている。彼女の攻撃系のスペルカードを宣言。

「霊符——【夢想封印】！」

彼女から現れた、色とりどりの大きな八つの球の弾幕。その内の四つの弾幕が動き、流れていくように静雅の弾幕をなぞっていくように相殺する。残りの半分の弾幕はというと——静雅に向かっていく。

「おおっ!? さすがにこの質量の弾幕がはじききれねえっ!?」

彼は獲物の槍ではじくことは無く、走って逃げているのが現状だ。

そして、好機を言わんばかりに得られた情報に魔理沙は含み笑いをしながら、行動を始める。

「……なるほど。一定量の弾幕の質量なら弾けないってわけか……ならー」

すぐさま魔理沙は箒に乗って飛翔し、先回りをして彼の正面に。後は彼女は八卦炉を構え——

「——やっぱり、弾幕はパワーだぜ！ 恋符【マスタースパーク】！」

「後ろから【夢想封印】、前から【マスパ】かよっ!」

挟み撃ちにされ、本堂静雅は被弾した……。

どこか本堂静雅の体からプスプスと煙を出しながら倒れていたが、すぐさま起き上がり、現状受けたことについて語る静雅。

「さすがに大ダメージを受けてしまったな……二人の攻撃を素で避けるのは無理があつたか……」

「慢心したでしょ、あんた。だからあんたはどこかアホっぽいのよ」

「ひどい言われようだ。まあ反論はできませんが」

「これで借りは返したな。異変解決だぜ。後は封結がお前の仲間を片付けるのを待つだけだな」

ちようどその時だった。ロビーの扉が開き、仲間が戻ってきたと思っていた霊夢と魔理沙は声を掛けようとしたが――

「封結、遅いわよ。もう首謀者はこっちで退治して――」

「まったくよく。お前がもう少し早く来てくれればスムーズに解決できたのに――」

『——何だ。静雅負けちゃったのか』

違かった。霊夢と魔理沙はいつものように、適当な随伴の相手は彼が片付けてくれている。そう信じていた。

しかし、現状は違う。まるでダメージを一度も食らっていないのか、ピンピンしている本堂静雅の仲間。

そして——ボロボロの満身創痍で、彼に担がれている封結の姿だった。

「嘘っ……!?!」

「そんな……!?!」

驚愕している二人は差し置いて、そのまま静雅へ近づいていく男。その彼が担いでいる男に疑問を覚えた静雅は声をかけた。

「ん？ 親友よ、その男は誰だ？」

「なんでも【この世界】の男の異変解決者みたいだね。中々面白い能力を持つていたけど……相性が悪すぎたね。そもそもご先祖様が自分にいない状態だとはいえ、最低限の

【負】にかかる力は無効化出来るし。剣術も扱えるみたいだけど……まだ形としてはなっていない。言い方にもよるけど完璧には使いこなせてない印象を受けるね。これから期待つてことで」

「ほお……そんな奴がいたとはな……」

男は封結を玉座に座らせ、静雅に行動を促す。

「さてとと。主犯の静雅が負けたことで異変は終了。こちらの戦術的敗北ということで撤退しようか」

「ああ。それが敗者の定めだな」

彼に言われるままに、静雅は空間に手をかざし始めたが……霊夢と魔理沙は男にお札を八卦炉を構え、戦闘耐性をとっていた。

「待ちなさい！ 封結をこんな風にして……！ あんたは絶対しぼく！」

「そうだけ！ 封結をここまで追い詰めるとは……！ 異変解決したが、まだ後処理が残ってる！ 封結の仇は私がうつぜ！」

「ええ……戦うの？ まあ……別にいいけどさ」

仕方ないと言わんばかりに戦闘体制に移った男。すぐさま三人はスペルカードを宣言しようとしていたところに――

「――やめろ、霊夢！ 魔理沙……！」

「封結!? あんた意識があるのね!？」

「安心しろ封結! お前の仇は私がとるだからお前はそこで休んでろ!」

意識を失っていた封結だったが、途切れ途切れながらも声を発して霊夢と魔理沙を制止する声をかける。しかし彼女達は彼の言う事を聞かず戦闘を始めてしまう。

そこで、封結を倒した男がスペルカードを宣言。

「——龍撃【ドラゴンバスター】」

両手を顎のように構えると、まるで龍のブレスのような、赤く質量の濃い弾幕が彼女達を襲う。その弾幕量は部屋全体を包み込むほど巨大で——

「なっ——」

「でか——」

いきなり巨大なスペルの宣言に頭の中で混乱した所為か、二人は避けきれずに被弾した。その攻撃力は大きく、彼女達は耐えきれずに倒れこんだ。

その様子を見て、男は言葉を漏らす。

「うーん……まさか初見で躲せない、か。【こっち】の霊夢は初見で冷静に躲したというのに。頭に血が上っていたしそれで躲せなかったのなら納得だけど」

「いやいや。お前さん無慈悲だろ。さすがにハードルが高すぎる」

「そうは言ってもねえ……魔理沙はともかく、霊夢は躲せるすべは持っているはずなん

だよ。まあ……時系列から推測するに、「過去のパラレル」みたいだし。紅霧異変が終わった時間軸みたい。まだ経験が足りないみたいだ」

「うーむ……まあ、とりあえず帰るか」

本堂静雅は男の手を取りながら空間に手をかざし、黒い空間のようなものを作り出した。そして本堂静雅が黒い空間に入り、霊夢達を一撃で沈黙させた男が空間に入る前に言葉を。

「……少なくとも、自分達はこの幻想郷に危害を与えるつもりはないよ。ただ、静雅の提案とはいえ、本当に「遊び」に來ただけなんだ。それはわかってほしいかな？ それで……ゴメン。もしもまた会えた時は、お互いに話し合つて平和的に過ごしたいな」

申し訳なさそうに男は三人に会釈をして誤り、黒い空間の中に入つては消えていく。そしてその黒い空間も消えていった。

静寂が流れる。片膝をつきながらも、姿勢を正していく霊夢と魔理沙だが、二人はまだ困惑している。まず最初に霊夢は封結に改めて男について情報を求めた。

「封結……あいつ、一体何者なのよ……？」

「……あいつは、少なくとも【人間】だと言っていた。しかし、何も装備は基本的にはないはずだが、走つて【八卦ローラー】と同速度で移動してたぞ……！」

彼の言う【八卦ローラー】は単純に言えば、ローラーブレードに八卦炉を内蔵した改

造靴。このローラーブレードは足に自分の力の素養を溜めることで、足から弾幕を放出することが可能であり、それを利用してブーストすることで高速移動が可能になる優れものだが……。

彼の持っている装備を知っている魔理沙は、彼と【競争】したこともあり、封結の言った言葉は信じがたかった。

「はあ!?! その装備をした封結と同等?!? そこまであいつ早いのかよ! それにあの弾幕の質といい……あいつも、もしかして私と同じスピードとパワータイプなのか!?!」

「それも含めるだろうが、技術もあつた。あいつも剣を使っていたが——綺麗だった。型に収まらないというか、テクニカルに対処された。本当に人間が出来る動きかどうか疑うぐらいにな。あいつはスピードとパワーもあり、テクニクもある——近衛のとれたバランス型と表現するよりは、振り切った万能型がしつかりくる」

「万能、型……」

魔理沙の質問に答える封結の言葉の一部を復唱する霊夢。これまでに見たことの無い人物だ。

——もしも、異変の主犯格があの本堂静雅ではなく、あの男だったら。この異変は解

決できただろうか――

最悪なパターンを一瞬考えた霊夢だが、そのことは頭の隅に追いやり。改めて、霊夢は封結に男の名前を尋ねた。

「……封結、あいつの名前は？」

「……あの男は、【異世界の神主見習い】――辰上侠と言っていた」

所が変わって、雲海地帯。その場所には一人の少女と、体格の大きい【竜】と向かい

合っていた。

少女は、疑問を竜にぶつける。

「……お爺様。「アラヒトガミ」の男性も気になりますが、問題は結梨華達と同じにおいがする男性が不思議なのです。どうしてお爺様と同じにおいがするのですか？」

『……考えられることは単純だ。我はその者に干渉した覚えはない。可能性ある答えは並行世界からやってきた子孫。そして——我の体の一部がどこかにあるのだろう。においは同じ並行世界の人物で同じというのはいえ、子孫とはいえ完全な別人なのに関わらずにおいが同じというのはそういうことだろう』

「……そんなことが可能なのですか？ 子孫とはいえ、お爺様の体の一部を宿することなんて……？ 普通なら拒絶反応が起きそうなものだと思うんですが……？」

「……そして、可能にできることはある。体の一部を宿せる条件。何しろ、祖先と同じ媒体になれば問題ない。祖先と同じ形質で突発的に稀に引き継がれる——先祖返りというものがな」